16
21

上原勇太著

訂正
增補

須磨誌

附舞子明石志

第三版

須磨誌序

上原君所著須磨誌一卷借覽數日未卒業而返焉余買船往還浪花神戸者不知其幾回而每望青松白沙于波光艶瀲之間未能縱觀其風景也距今三年發神戸將赴岡山亦以在瀛

九一二・東京帝國大學圖書之印

車中唯看松飛沙奔而已猶未
卒業而返本誌也

明治二十六年七月

讃岐　赤松　渡撰

目錄

須磨乃位置　須磨乃解　須磨乃風景
須磨乃人家　須磨乃舊家　風土氣候
須磨乃繁榮　須磨乃旅館　須磨乃漁業
海水浴　療病院　須磨乃雜詠
行平佗住乃事蹟　葉　簾　行平衣懸松
行平月見松　遠山松　稻葉山
松風村雨堂　因幡藥師　前田氏
菅公手植乃松　長田社　菅之井
賴政藥師　重衡腰掛松　上野山福祥寺
馬盥乃額　漢竹　青葉笛
辨慶乃鐘　若木櫻　嫩木櫻制札

西月翁句碑　上野
馬塚　綱敷天神社
諏訪社　現光寺
芭蕉翁句碑　須磨乃關屋跡
詩歌（關及び月）　須磨に隱江
磯馴松　村上帝社
蛇窟　寢覺庵
一乃谷　內裏蹟
源平躑躅　鉄拐山
鵯越　熊谷扇松
古跡塚　戰乃濱
熊谷平山一二乃懸　敦盛塔

後乃山
天神松
似雲風月庵に跡
須磨乃月
千森川
關守稲荷
八本松
逆落し
鐘懸松
勢揃乃松
鉢伏山
敦盛蕎麥

泉水井　界川
須磨琴　須磨簾
潮雜炊　須磨燒
觀音竹　海魚
吟谷彫

須磨以東

聖靈權現　桂尾山勝福寺　神撫山禪昌寺
蓮に池　越中前司盛俊墓　長田神社
越前三位通盛墓　木村源吾重章墓　平知章墓
監物太郎頼方墓

龜井日和
藻鹽磯馴味噌
白團砂
大師染

附舞子明石

舞子乃濱　明石　人丸神社　盲杖櫻　八房梅

凡例

一引用書之古事記姓氏錄栄花物語古今著聞集源氏物語伊勢物語平家物語源平盛衰記太平記延喜式日本紀三代實錄帝王正統錄東鑑須磨記准后親房記和名抄八雲御抄花鳥餘情色葉抄我峰集勝地吐懷篇拾芥抄日本總國風土記播磨風土記地名字音轉用例承應四年記所歷日記須磨名所記千種日記本朝俗諺志今按名蹟考西遊日記名所便覽攝津徵書遊方名所畧攝陽群談名所方角抄遊囊勝記須磨乃枝折攝西奇遊談古今勅選歌集三代集八代集二十一代集準勅選名家々集歌合百首拾遺愚草群書類從西行撰集抄俳諧古今抄句撰後拾遺鹿島紀行名所八体芭蕉翁一代集日本名所吟詠集皇國名家絶句類纂東行日記玉山集扶桑名所詩集古今日本名家詩鈔皇朝精華集近古詩鈔日本詠史百律皇朝絶句類撰山水奇觀漫遊詩草星巖集山陽詩鈔琴平詩鈔玉川唫壯小稿明治百二十家絶句攝津志近世畸人傳諸國里人談攝津名所圖會播州名所巡覽圖會細見記播磨廻松れ栄須磨古跡記兵庫名所記須磨ゟ栄須磨の友兵庫縣地誌歷史考播磨名所圖繪須磨名所獨案内京華要誌須磨名所畧記其他新聞雜誌なりとは然れども尙は遺漏尠からさるのみならす書中誤なきを保せす願くは大方の教示を得て他日改版を期し其誤謬を正し尙ほ弘く史料を拾輯して遺漏を補はむとす

一書中記する處の引用書及ひ詩歌發句之時の古今を問はそ散見するかまゝに記ふたるものなり

一書中鵜越の一項を加へ其他須磨以外の名所古跡を載せたるは歷史の關係順路の便より編入したるものにして猶攝津名所圖繪に播州の名所を記ふ播州名所圖繪に攝津の古跡を載せたるか如し

一明治廿六年始めて此書を編纂せし以來改版毎に西須磨村直井元左衛門直井元介井上雅の諸氏は訂正增補に專ら力を盡され重野安繹杉谷正隆の二氏は

本誌に關して編者か發したる質問の解答を與へらるゝ又何禮之橋本海關瀬川露城松原貴遠赤松松亭の諸氏は高吟を示され何多仁子は「須磨の友」鶴崎平三郎氏と「須磨療養地」直井元介氏は「須磨名所畧記」の貴著各一卷を寄せらる玆に特書して其の厚志を謝す

編者識

須磨誌

上原勇太編纂

須磨の位置

須磨は兵庫縣攝津國武庫郡（須磨ハ八部郡ニ屬セシモ明治廿九年四月武庫菟原八部ノ三郡ヲ廢シテ武庫一郡トス）にあり東は大手野田村に接し西は播州塩屋に境し南はなへて青海原にして北は鉢伏鐵枴青谷の山々横たはり其の大手に接する方を東須磨と呼ひ塩屋に境する方を西須磨と云ひ東經百三十四度十分北緯三十四度四十分に位せり東鑑を按するに

播磨國有二珠璃明石之勝地一

攝陽群談にはこの記事を解して

須磨は攝津なれとも須磨明石と續く名所なる以て播磨の國に珠璃明石の勝地ありとしるせしなり

と云へり古書に徵するに

延喜式　攝津國驛草野須磨各十三疋云々

千種日記　播磨と攝津國の境川あり尙過て敦盛の石塔あり

顯昭阿闍梨　古今集の「わくらはに云々」の前のきに註し此集にもいへる如く須磨は攝津國にあり然るを或る人須磨は播磨に在といへりされとにや播磨潟須磨の關なと多く人讀めと僻事なり攝津國播磨境に關はあれと須磨は攝津の方なりされは播磨路やとつくへしと先達は申侍し

色葉抄　攝津國と播磨の境に乘水牧と云所云々

遊方名所略　一谷鳥崎一里鳥崎攝州播州堺也（播州名所圖會鳥崎千壽の西より舞子の濱の西までの名也）

後太平記　塩屋明石須磨鳥崎に支へ蟹の坂に當て軍兵と見へて狼烟夥しく燒上たり

延喜式　八部神社生田神社長田神社汝賣神社

名所方角抄　須磨の關屋といふは今は播磨路と見えたり

遊覽勝記　須磨浦は正しく攝津國なるを古人或は播磨灘と云ふは座なのゝ名所を知らざる誤りとすべし

今はゝ關屋跡と唱ふる地を以て顯昭か攝播ゝ境に關ありと云へる記事を見る時と古へより須磨と稱せし西須磨ゝゝ大部は播州に屬せとも關屋の項ゝ記せし如く昔より關屋の位置に二說ありて一と今關屋跡と稱せる地を云ひ一と鐵梶山の麓を云へり顯昭とこの鐵梶の麓の方を信しとかくは云ひしもれなり名所方角抄の記事も顯昭と同しく西の方を關屋跡と信せしなれ共よく地理を知らざるゝ故にかく誤りしものゝなれ然らされと今より二百年前ゝと西須磨の全部と播州に屬せしものとなるへし其の他播磨風土記日本總國風土記を搜索せしも須磨の舊播州に屬せる由見えされは攝陽群談の東鑑の解眞にして古へより攝津の須磨なること明けし播州名所巡覽圖會に

矢田部郡は舊播州の內にて須磨と明石郡に屬せり

と載せられたると千載集の

播磨路やそまの關屋の云々（師俊）播磨灘すまゝゝ月夜の云々（親隆）

ゝとを讀みて直ちに須磨と昔播磨ゝ屬せりと速信し（顯昭の解を讀まと其着眼の誤れる事明けし）遂に高倉院嚴島御幸記に

明石の浦ゝとにも何かしの昔鹽たれけんも思ひ出らる云々

とあるを見て「是行平の事を云へるゝり」と云ひ同書汝賣の神社の項を見るゝ

岩屋村にあり延喜式八田部汝賣神社と見へたり云々

と記るし敏馬の故關の項に

岩屋村にあり此關攝津志に見る所也古歌ある事を知らゝ姑く從ひて更に之を考ふるに關と古國境にありて出るを察し入を親く所也古歌に須磨の關を讀みたるは今も是國界にて能當れり敏馬も又古の國界にてありしか當考ふへし和名抄道路の部に播磨國大和田の泊とあるも兵庫の事にや今古國界沿革も多きものなれは是須磨の關より古きもゝらす

三書とも斯る疑問の存するにも拘はらす只一二の和歌記文によりて斯くも斷言せられたるは何故なるや其自ら引證せる敏馬の故關なるもの果して攝播の國境にありとし汝賣神社の八部郡に在りたりとせは昔の攝津は界川より西岩屋村までも延長し居たる事となるへきの理なるに還つて其引用せる例証を自ら抹殺せしは公平なる斷案としも思はれす全く千載集の歌詠に迷ひたる其上に須磨の明石郡と接するを以て東鑑の意をも誤解せしならむ或は又關屋跡に東西の兩說ある事を知らゝして今の關屋跡と唱ふる地を目し顯照及名所方角抄の記を曲解せるにてもあらむかさるにても和名抄の播磨の國大和田の泊とあるの一事を以て直に八部郡までも播州に屬せりといへるに至りては大ひなる誤りとこそ云ふべけれ近刊の播磨名所圖繪に瑯琊はもと明石郡と記せるも東鑑なとを誤解せしにあらされは播州名所巡覽圖會を直寫せしものならむまた八部郡及ひ須磨村について諸書を見るに

攝津志　兵庫至濱須磨一里十八町（所歷曰西代曰東須磨曰西須磨等）濱須磨至界溪（播州明石郡界）

所歷日記　ゝくて須磨の里に來ぬ東須磨西須磨濱須磨とて三所に里あり（攝津名所圖會播州名所圖繪の二書も上に同し）

遊方名所畧　須磨浦東西二里之間有四箇村中之長各半里許八部郡一作八田部一作無田字也

笈之小文　東須磨西須磨濱須磨と三處に別きてゝあかちに何わさするとも見へす

遊覽勝記　須磨は東西中の三村あり

播磨廻　須磨東西中三村あり

東須磨とは鳥池までを云ひ鳥池より西千守川迄爰中須磨と呼ひ千守川より西小天井川迄爰濱須磨と唱へ小天井川より西を茶屋と云ひし由傳ふきと東西中の三村ありと云ひ四箇村ありと云ふも二書とも誤まれるにはあらすしうし三村四村ふわかちしは里人の一時の呼ひ名にして中須磨より西は只須磨一村なりーなるへし八部郡も延喜式にも八部と記ー側らにヤタベと訓ーあり和名抄には八田部と記ーて見ゆればもとと矢田部郡なるへー東須磨は昔辻堂村と呼ひーものなれは古へより須磨そ浦といひしは西須磨のことなると明けし

須磨そ解

此地を瑕瑾須摩陬麻諏广須麻須磨なと諸書に記るせと延喜式には須磨の字爰記しまたもとは瑕瑾と書冩りとあり播陽群談にも須磨或は須摩に作る正字瑕瑾とするものかとありされ

は瑕瑾の字は既に奈良の朝の冩とより用ひーものと思はる諸國部内郡里等の字を擇ひて二字に改め書きしは必す延喜式より始まれるとにはあふす瑕瑾の字を須磨に改めしも延喜式以前おるとは同書爰見て明かなり須摩おとの字と正字にあらさるへしまたすまの浦とは人皇十一代垂仁の朝に始まれる由傳ふれと何ゆへすまと云ひしやの意は諸書に見へす八雲御抄に源氏物語須磨の卷のこりすまのうちのみるめもゆかしきをしほやくけのまやいかゝおもはんそ和歌爰解まそこりすまとは不戀と書なりまの字心なし須磨の浦にいひかけすとも云々こりすまのうちなと云かけたるはこりそ住と云心によをかなへりすまにかきるへーたゝこりすまと斗はこりぬことなりいつくにも讀むへしとあれとたゝ歌を解せしのみにて須磨そ意義を解かす一説によれは津の國西南の隅に當れるを以て始めは隅と唱へし爰瑕瑾の二字に改めしとと里人の傳ふる所は今の綱敷天

神そち側にある諏訪れ社は東向き諏訪とてひかしはその名高くこれ社あるによりて始め諏訪といひしのと星霜を重ぬる其の中にいつーかすまと轉訛せりとなひこは暫く讀む人れ判斷に任せん

須磨の風景

風光のたくひなきと云ふまてもなく須磨の友にも

昨日よりなかめくらせともわかぬ所なり涙靜かる海の冩しき松の色山のすかた熱海鎌倉なとそおよふ處にあらす此處にこそ吾家ををつくらめと思ひそめぬ

と見えたれと今とやかくいはむと殊更光けと後ろに峰つゝきの山々あり前へには茅渟の青海原横たはと同ふ遙かに東南に連りて紀泉の山沖合に走り出て西南は淡路の岩屋眞近く青み渡り白帆と遥ちこちに連り鳥の浮へる如く磯うつ波は沙子を洗ひ松の緑りのうつろふ樣

得も言はす夜は漁火舷燈の海上わたり四五里か程と星の如く或は明かに或と幽かに數えれす殊に後ろの山の花上野の臺の月鉢伏鐵枴の峰の雪なと四氣折々の景色を添へもし釣舟に棹して遙か沖合よと眺ひれは青松白沙遠く連りて茅屋その間に見ゆる漁村の光景また一段の趣あり夫の春有萬樹之花夏有百尺之泉秋有千里之月冬有數重之雪とは此地をいふへきかされとも亦此浦の秋の景色の如何に歌人の心を動かしたるか左の數項を讀まは寂寞たる秋景と天下に比類おき此浦の眺めなる事を知らるべし

源氏物語　沖より船ともの謠ひ言りて漕き行くなとも聞ゆはのかに唯小き鳥の浮へると見やらるゝも心ほそけなるに雁の連ねて云々　須磨ふえいとゝ心つくしの秋風に海は少し遠けれと行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦波よる〳〵と實にひと近く聞へて又なくあはれおるものはかゝる所の

秋なりけり

笈之小文　此浦の實は秋をひねとするなるへし悲しさひしさいはん方なく秋ありせは聊心のとしをもいひ出へき物をと思ふそ我心匠の拙きを知らぬに似たり淡路島手に取るやうに見えて須磨明石の海左右に別る吳楚東南の詠も斯る所にや物知れる人の見侍らは樣々の境にもおもひなそらふへし

扶桑名勝詩集には

若木櫻花　上野夏草　關屋間月　武峰晴雪
須磨寺鐘　兵庫歸帆　一谷古城　鹽屋暮煙
磯馴松風　後山歸樵

の十勝を擧り出し或い上野櫻花天神濱納涼月見山明月鉢伏山暮雪なと記するもあるまた須磨名所獨案内には

關屋跡秋月　内裏跡夜雨　鐵枴峰暮雪
淡路島夕照　上野落雁　鵶越晴嵐
須磨寺晩鐘　明石歸帆

の八景を記せり皆眺むる所に就て擇ひ出もたるものなれは其品目據ところありといふへし

須磨の人家

西須磨の人家い後ろに上野の臺を負ひてその麓に帶の加く建て並ひ東須磨の地は平かふして人家はその中央を貫きて殆んと西須磨につゝけり概せと西須磨は漁村にして東須磨は農家なりといふも不可なきに似たり古へは月見山の麓字本屋敷に僅かに十七軒の住家あるしか後ち上野に移り漸後に及んて海邊に住ひたるものなりと傳ふ

須磨名所畧記　抑も當村は往古須磨寺山谷に小屋か谷とて五六の家ありたり源平戰ひの時月見山の麓本屋敷より此谷に隱れたりといひ又或老人は口碑に足利直義湊川の役須磨の上野に陣せし時百姓皆驚きて亂を避けたりといふ

又今上道と唱ふる細路は鉄枴山の北の方より播州へ越せし舊道なると傳ふれは今西須磨の人家あるわたりは海潮の打寄せし處なるへし

源氏物語　かのすまと昔こそ人の住家なともありけ今はいと里はなれ心すこくて海士の家たに稀になと聞き給へと人繁くひたたけたらん住居はいとはいなかるへしおはすへき所は行平の中納言のもしほたれつゝ侘ひける家居近き邊なりけり海面はやゝ入りて哀に心すごげなる山中なり垣のさまより初めて珍らかに見給ふ萱屋とも葦ふける廊めく屋なとをかゝうしつらひなしたり所につけたる御住居やう變りて斯る折ならすはをかしうもありなまと云々住居給へる樣言へん方なく唐めきたり所のさま繪に書きたらんやうなるに竹わんめる垣まわたして石の階松の柱疎翠なるものからめつらかにおかし

所歴日記　蠶の家たに稀にあん有けるし源氏物語には書たきと今は萱葺數多たち双てありされと人氣絶へていと物さひしき所なり昔の人も物やさひしき須磨の關もりなと讀みしも理りとれもひて「すまの浦物さひしき所とも知らてやあまの住おれにけん」心あれは心なき身と成にけりと詠したくひにはあらてれのつから心おそ身もうき事をしらぬはとり所成へし

遊蠡勝記　所のさまはあおかちに是ぞと目留まるはかりとなけれとも山方かけたる家ともの物墓なけなるに柴垣打しつゝ竹の簀垣のふしにくけに見えたるも彼昔の御座所の樣思よそへられたり

須磨名所畧記　凡て家は藁或と茅をもて作る富貴の家は其周圍に柴垣を爲す各門口に圃を設け家代内に小便所を設けていと穢たなけに見へたり上り口は貴きも賤きも火爐を作り其前に廊廡を立て側に大なる壺を据えて水を貯ふ人の來らは自在竹に土瓶を吊るし茶を沸して進め薪を燒きて暖を取らしむ俗に之を御馳走とせり

又貧富若くは血統によりて家屋の構造に上中

下の習ひありて其上なるものは家々擂へ方自由なるも中なるものは皆廡を中に設け下なるものゝ外簷にて雨戸の中に廡を設くるを許さず或は二階を建て中敷を設くると能はず移住せる家には屋根に瓦を葺したり其瓦を始めて用いたるは今より百年前藤田九左衛門と云へる人なりしとそ

されゝ昔しより人々住家ありしにもかゝはらず海邊の煙も跡たへて數年か前までは月卿雲客の閑居壽永建武の戰ゐなと千歳のひかし忍はれていとも凄しかりしゝ今に始まりたるにはあらし富士拾遺に淋しさの極は須磨の浦といはれたるも理ありと云ふべけれ

須磨の舊家

此浦の舊家として昔より子孫繼續せるものゝ

前田、貴苔、岡田、林、鶴廣、
原田、友好、志賀、

の八氏おるか村井丹治鶴廣の諸家も亦舊家なりと傳ふ林氏ゝ仁和年間須磨寺開山の聞鏡上人の生れたる家にて古書いと多く藏せり前田氏の事は後の項に記るせり此里は昔より藥師統人衆とて毎年正月村人相會そる古式あり又烏帽子勸導の儀式あり外より此浦に移住せる者には獨り家屋の構造に制限あるれみならす氏姓にも制裁あり〻右衛門の稱のみ許され左衛門兵衛の名は浦人に限れりとかや

須磨名所畧記　藥師統人衆　當村は昔より村人の血統を正さんか爲に例年正月八日必す祝儀として子孫結統して村人の資格を得るおりこの座敷ゝ松竹梅の三寶を飾り付け又謠曲の興ありて誠にれゝそかなり上座の床には藥師如來を祭る統人衆は皆裃を着ていかめしく其式を終る又其夜鬼追の興あり

烏帽子勸導　家名を相續するには必す此儀式を行はさるへからすされゝ門口ゝ掃清めて「御用」の高張提灯をともし又幕を打張り上座中座下座の班位に座す云々

風土氣候

天然の風光と古跡に富み土地は砂礫にして深層は堅きと履の如き粘土斜に海に向ひて傾ゐる故以て後の山々より流るゝ水も溜まらす故に海邊と雖とも沙子を穿ては水いと清ー空氣は絶間なく自然の交換行はれ毫も不潔の物を交へす冬は後の山々凜ゑき朗風を禦ぎ特に黒潮の餘波は紀淡海峽より來るを以て海風温く夏ゝ涼風南北より吹き絶へす四時の氣温にさしたる變りなくいと適當にして乾燥または温潤に失せす氣壓は一樣なるも其の度甚た低からすー て平均七百五十七八ミリメートルの間にあり暴風陰雨常に少なく其の上に鉢伏鉄枴一帶の松の林には的列並底の芳香を吐き大氣の中には多量の飼料を含み居ゝ種々の黴菌を撲殺し空氣殺清くせり斯く天候平和なるを以て實に避暑保養若くは隱士閑居の所として適當の地にしあるは近ころおちこちより四時の客しめなくつとひあつまりかくも繁榮の勝區とはおりぬ療病院々長に請ひ得たる風位及ひ氣温比較表を左にしるしぬ

須磨		
春	午前	東南　午後　西北（微風）
夏	晝間	南　夜間　北
冬	晝夜共西	

明治廿七年七月平均氣温比較表

時 ＼ 攝氏温度	東京 午前六時	東京 午後二時	京都 午前六時	京都 午後二時	大阪 午前六時	大阪 午後二時	須磨 午前六時	須磨 午後二時	岡山 午前六時	岡山 午後二時
32										
31										
30										
29										
28										
27										
26										
25										
24										
23										
22										

地名 ＼ 時刻 ＼ 攝氏温度：三十二度、三十一度、三十度、二十九度、二十八度、二十七度、二十六度、二十五點、二十四度、二十三度、二十二度

明治廿八年一月平均氣溫比較表

地名	東京		京都		大阪		須磨		岡山	
時刻 / 攝氏溫度	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時	午前六時	午後二時
七度										
六度										
五度										
四度										
三度										
二度										
一度										
氷點										
氷點下一度										
氷點下二度										
氷點下三度										

明治廿八年一月至十月自氣象摘要表月

月 / 種目	溫度百分率 平均	雨量 總量	雨量 一日最多量	雨量 日	風 速度平均	風 最多方向	阿蘭 平均	天氣日數 快晴	天氣日數 曇	天氣日數 雨雪
一月	65	77.9	35.5	15	2.4	NE	10	3	6	10
二月	62	77.1	27.6	21	2.9	WN	10	2	6	13
三月	71	50.5	18.6	12	2.8	N	9	3	12	7
四月	62	80.7	25.6	9	3.6	NNE	9	3	9	10
五月	73	157.1	33.7	8	3.1	SW	10	2	10	13
六月	75	165.6	18.0	4	3.0	NE	7	1	10	11
七月	76	57.4	15.5	5	3.2	WS	5	6	2	7
八月	72	52.7	27.4	31	3.2	SW	3	5	4	9
九月	70	81.0	27.3	30	3.1	NE	7	5	3	10
十月	62	34.4	13.6	24	2.6	E	9	6	8	5

備考　風ノ速度ハ二十四時間秤ナ一秒時間ナ改算シタルモノ
天氣日數表ハ雲量平均8以下ヲ晴ト雲量ト墨ト以上ヲ曇ト中快晴ト
雨雪トハ一粍以上ノ降雨降雪アリシ其他ノ日數ノ晴ハ知ルヘシ

須磨の繁榮

西須磨の療養遊園の地となりてより人口月に増し戸數歳ゝ加ゝ遂に警察署郵便局の新設を見るゝ至りしその由來を尋ぬるに明治十八九年ゝころおひまでは里人と漁農のみを營みしか不景氣うちつゝき地所を賣り拂ふものゝみ多くして最上ゝ田地すら坪三拾錢より貳拾錢に下落せしも廿年の春頃より他方の人々此地を購はんとするもゝ多く某氏は八本松の邊を坪貳拾五六錢に購ひ某氏は内裡跡の傍を坪五拾錢内外に求め某外人なとと小天井川の邊りを坪六拾五錢にて購ひたると聞く然るに山陽鐵道ゝ設けられしよりまゝ〳〵騰貴したれは今と海邊にて坪六七圓の賣買を見るに至りしとなむ西須磨の繁榮なるに東須摩と海濱ゝ別業散見する乃みにて別に地所ゝ騰貴おもさと風景の西須磨に及ばさるか故おるべし

須磨ゝ旅館

この浦に遊はるゝ旅客を數ふれは毎年一萬二三千人もありと聞ゆれと旅館はたゝ海月館保養院松ゝ家敦盛樓海山樓あるのみにて海月館は一ゝ谷の麓に松の家と軒を並へて海ゝ向へり保養院は二の谷と三の谷の境老ひたる松の茂みか中ゝ幾棟とおも建て並ひ實に須磨浦第一の旅亭なり敦盛樓と敦盛塔の南にあり海山樓は境川の西にありて眺望また自ら趣をことにせと何れも皆な海水温浴及冷浴場の設ゝあり其の他に下宿營業をなすもゝ林貫兵衛志賀新左衛門藤田芳次郎森本政次郎鶴谷松左衛門原田虎吉岡田喜平志賀傳左衛門岡田小三郎友好捨次郎仝吉左衛門等にて農家漁家なとも暑中にと悉く客を以て滿たせり而して此友好吉左衛門氏は夫の金玉均朴泳孝氏等の止宿せー家おり

須磨名所零記

昔八文字茶屋と松本茶屋の二軒ありて頗る繁盛せりと童謡あり「返りませうかれくられませうかせめて松本の茶

屋さて」中興に至りて大ひに衰へたり或る翁代發句に　來て見れと夏から寂し須磨の茶屋とあり

須磨の漁業

昔より漁業は振ゑさり一由なれとも五六月の頃より十一月頃まては鯛、蛸、きすご、ぐち なとの好時期にして盛夏最も宜しけれは此浦に避暑保養の文人墨客ゑ釣り舟を遙か沖合に棹して漁村の光景を賞し一日の消夏を爲すものいと多し

攝津志　土產海魚海味上品輸之京師又有黃鯛魚北小品下包諸藁席貨于四方故謂之裏子（カヤコ）

須磨名所畧記　非戸莊西須磨村は人皇十一代垂仁天皇の御宇創めて漁業を營み須磨浦と稱一古浦人新浦人の別を爲して每月廿八日殺生止めとて月每に一度漁業を休む又年行司頭人ありて之を指圖せり破船又は不意の災禍に罹るものゝある時ゑ互に援くるを常とす若これに背かゑ古浦人ゑ艫揚（トモアゲ）とて赦免の日まて漁業を禁し新浦人ゑ村外に放逐するの定めと誓ひたり古浦人は當村にて漁業を面目とせるものなり新浦人は他國又は他村より來る者か或ゑ當村住人にして中興漁業ゑ組入れを請ひしものあり又四艘張とて淡路の漁人當村に來りて「いかなご」を漁すされは家々其宿屋を爲せし事とて頗る不潔なゑし云々此浦ゑ百年前まて魚を釣る術を知らさりしゑ其後播州明石の人來りて始めて釣針を賜けり今尙其家を釣屋といふ云々又當時ゑ鮹壺を山田村より買求めて鮹を漁り或は「ごち」とて鯛を漁れり殊ニ漁場は八郎左衞門の漁場佐右衞門の漁場ありと畧定まり居たゑ近頃に至りて遊舟（ナグサ）とて兵庫あたりより來るもの多し

笈之小文　東須磨西須磨濱須磨と三處に別れてあなかち何わさするとも見へす藻鹽たれつゝおと歌にもきこえ侍るも今は斯る業

すゐなとも見へす「キスコ」と云ふ魚を網して眞砂の上に干し散らしけるを鳥の飛來てつかみ去る是を惡みて弓をもてれとすゝ海士の業とも見へす若し古戰場れ名殘を留めて斯る事を爲すにやいとゝ罪ふかく云々

新古今　須磨れうらのなきたる朝ぢめもはるに霞まさかふ海士のつり舟　藤原孝夫朱

須磨の浦釣せし人もけふよりや　惠慶法師

千とせの松の之にわたるらん

後撰　すまの浦に網くり卸すうけふねの打かたふきて世を歎く哉　源親房

慈照院自歌合　釣舟ぞおのか浦々歸るなる

須磨の友　明石も須磨もくるゝ淡路に

須磨の浦沖ふは魚の山なしゝ磯へゑ人の波を立ける　何多仁子

仝　須磨の浦目見のてふゑ舟花して閃めく魚を釣ゑ得たる哉　同

海水浴

海水浴ゑ避暑の人々か主とする所ふして潮清く海淺ふまて波のいと靜かなるは鎌倉大磯小田原或は興津なとの比ふへくもあらす朝な夕なに幾ひれとなく海邊ふ出てゝ色くろ〳〵の裸ゑ童等うち交りて引網せる樣なと眺先つ海水浴を試ゑもあり小石を拾ふもあゑ遙か沖合に游泳するもあり斯る繁業を見るふ至りしゑ明治十四五年の頃兵庫縣廳より保養院ゑ前の濱ふ浴場を設けたるに始まれりとそ抑海水浴は其の初めの瞬間に於て寒戰悸動呼吸短儘なりと雖とも忽ち爽快の溫氣を覺へ神身和暢し四肢活潑となゑ食慾增進の偉効あるものふして生理的試驗に據る時は大ふ皮膚蒸熱を增し屎素分泌を增して尿酸鹽及ひ燐酸鹽れ分泌を減し人身に酸化作用を促かー其の新陳代謝を旺盛ならしめ食機乃ち生活機能を興奮し体量を增加す斯の如く人体に効力あるゑ恒に均一なる海氣の助けあるゑ冷涼なる海水及ひ其の波動の皮膚を刺戟するゑ幾以て末梢血管の血

行活潑と神經末梢の興奮作用とに因るものなりとそ左れと神身に偉効ある此海水浴も一般の藥劑ふ於けるか如く之を濫用すれは還つて健康を害すへけれは其体力に應し病勢に準して醫師に之を諮るへし只一般浴客の注意すへき浴前浴中浴後の注意すへき二三を記るし擱くのみ

潮水の外聽道内に竄入して耳病の誘因と成る事あれは游泳に當りては綿花を以て豫め外聽道を栓塞すへし○入浴時刻は肚者と午前八時より十一時迄虚弱（ヒステリー）性の婦人は午後四時より六時迄を可とす日中極熱ゑ時と入浴すへからゑ○食後卅分後にあらさきは入浴すへからす又浴前に疲倦する事及ひ神思挑動ある事あるへからゑ空腹も又大に忌む○浴前手巾を濕ゑ全身の皮膚を摩擦し次に頭部等上身を濕ゑ然る後入浴すへし○一日の入浴度數一回より二回迄なるも病勢体力に關係するもけなれと醫士ふ諮るへし入浴時間は三十分を經過すへからす浴中第二の寒戦を覺へ又と不快の現症乃ち例の窒迫動悸眩暈嘔氣等を發する時は速かに中止そへき事○浴後卅分以上散歩を勉むへし但し疲勞する運動と避くへし○浴後も皮膚を摩擦すへし肚者は常水浴を行ひ然る後又皮膚を摩擦すきと大に効を經系に奏そるものなと

幾度か沈みほつへくなりなかふ　坂　正　臣

猶こり須磨に波かつくかな

療病院

三れ谷ゑ上松林の中に幾多の洋館一段と一段よ了高のく聳ゆるもゑそと即ち療病院あり海を扳く事百八十尺面積一万餘坪に達す是れ明治廿二年八月今の院長鶴崎平三郎氏か須磨の氣候療養に適せるを驗して姫路人士と謀り此眺望佳絶れ處に設けられたるものにゑて病病に罹りてこゝに來れる人々は皆な治療を受くるか故にまゝ病室の不足を告くるとありと聞く院内通常浴蒸氣浴室あり世の避暑療養地と多くは良醫を欠きたゝ風土温泉或と海水浴なとに任せて還つて大患に陥るもれ尠からねどこの里に遊はるゝ人々は療病院の設ゑあれと此上もなき事といふへし院長鶴崎氏より寄せられたる同氏の著書「須磨療養地」を見るに中に左の如く記るせりこゝに擧々て讀者に紹介せむ

須磨の氣候は呼吸器病者れ療養に適するゑゝならす身體組織成分ゑそ新陳代謝を旺盛にゑ食慣を興奮せ一先營養を増進一體質を改良ゑ皮膚及ひ神經を強固なら一ひるを以て慢性胃腸病者腺病其の他營養的諸病患者神經衰弱其他一般れ虚弱者等の療養にも良ろ一且古來世人の熟知する如く脚氣ふ向て殊効あるは其れ風土清潔に一て該病々素の存在するなく而一て體内れ病素と旺盛なる新陳代謝ふ由りて速ふ排泄せらるゝに職由れる者とす云々

須磨浦療病院の實驗に徴するに有熱なる肺療患者ゑそ該地に來りて速に解熱する者實に百分れ六十七ゑそ多きを算す是れ蓋結核黴菌と共働れへき黴菌の極めて僅少なるふ歸すへきか云々

此里れ沿革風景氣候より最近れ實況をこゝに述へ來りて榮へゆく太平れ御世とはいへ外つ國人ゑそ高樓こゝかしこに聳えて見なれぬ草木生ひ茂れると此里ゑそ面目にや海邊に別業軒を並へて見もると此浦の眺めふやまた療養閑居地ゑそ資格を害ふなきや今れ如くに推し移りゆ

西須磨村

明治十七年調査			明治廿九年調査		
宅地	七町七反五畝歩		宅地	十町一反六畝九歩	
他所有地	方人	五反八畝歩	他所有地	方人	十八町四反一畝十五歩
戸數		二百〇八戸	戸數		三百三十八戸
人口	内	九百五十八人	人口	内	千六百六十人
	他方人	三十六人		他方人	三百〇二人

き遂には名稱古跡影を失ひて俗地と化し終ふ
ひとゝいとゝいと口れしき事にこそ

徳富蘇峯須磨も鮮子灣も今と第十九世紀文明れ勢には敵し兼ね村雨松風れ故事も秋色の淡きか如く今は尋ぬるに衰なく目ふ立つもゝそと坂神ゝそ紳士とか紳商とか申す人達れ別墅れ松際砂邊に隱見するゝそみに御座候鐵道は致し方なく候へ共賣めて別墅の爲めに俗了せらるゝ丈と用捨あり度事と存候へとも金力れ向ふ所江山も膝を屈せさるを得ん心外千万に御座候去る明治十九年ゝそ夏當て須磨に遊ひ浪枕松風誘ふ須磨れ浦に君と一夜をあかしつる哉と歌ひーこそ殆と十年の昔ーと相成申候思ひ廻せと天然も隨分ゝそ變化有之候事と存候

赤松椋園　余客歳重過此地石壁煉瓦之家屋鱗次相接無復當年之風景浴了亦甚矣

是より名所古跡ゝそ記に移らむ

須磨れ雜詠

須磨里須磨浦須磨海須磨沖須磨泊須磨濱或は須磨入江なとゝそ古詠いと多し攝陽群談に須磨海西須磨村に屬す　須磨浦須磨村に向へり　須磨濱須磨村に屬す　須磨入江須磨村にあり　海浦にれなし　村と讀先る歌未考へすと見ゆ

古今
すまのあまの塩やく煙風をいたみ　讀人しらす
思ひぬかたにたなひきにけり

仝
すまの海士の鹽燒衣おさをあらみ　同
まとをにあれや君かきませぬ

万葉
すまの海人の塩燒くきぬのなれなはか　赤人
ひと日も君忘て思へん

拾遺
白波はよてとまろもにかさならす　人丸
明石も須磨もれのかうら〳〵

詞花
すまゝそ浦に燒しほ竈のけふりこそ　俊頼
春よりさきのかすみなりけれ

すまゝそ浦をけふ過ゆくさしかたの　能宣
かへる涙にやことを傳まし

千載
さみたれはたくもれ煙うちしめり　俊成
ーはたれまさるすまのうら人

新古
須磨れあまれ袖そ吹こす塩風の　定家
おるとはすれと手ふもたまらす

仝
馴行と浮世なれはやすまの海士の　女御　徽子
塩燒ころもまとをなるらん

仝
待とをに都れ人やおもふらん　惠慶　法師

續古
須磨ゝそ濱邊とすみよかりけり
すまゝそあまの浦漕舟ゝそ棹ゝそ絶　小野　小町
よるへなき身そかなーかまける

風をいたみくゆる煙ゝそ立いてゝ　貫之　朝臣
なはこりすまれうらそ戀ーき

鶴塩くむ袖ゝそ月影おれつかち　定　家
よそにあかさぬ須磨ゝそうふひと

鶴塩やく煙になるゝすまの蜑は　讀人ーらす
問ともまたーすまゝそなみ風

旅寢する須磨のうら路の小夜衛　同
ゐるにそ袖れなみとかけれ

煙たに及とぬ空にきえわぬ　經　通
いかゝはすまゝそ海士ゝそ鹽竈火

立登るもーかれ煙たへせねは　藤原　經衡
そらふもーるき須磨れうら哉

すまの浦に蜑のとりつむ鹽竈木の　藤原　清正
からくもーたにもへ渡るかな

淡路かた追門ゝそ汐干れ夕暮に　西行　法師
すまよりかよふ千とりなくなり

後京極殿白歌合
行船れあとれ白波きえつきて　良　經　公
うす霧ゝそこるすまゝそあけはれ

すまゝそうふ波路の末と霧晴て　藤原　宗泰
ゆふ日にのこるあわ路島山

鹽竈やく煙なたてそすまの海士　津守　國冬
ぬるゝ袖にもれきは見るふん

あやとはなきさに歸る白波の　頼　政
なはより見るやこりすまゝそうら

國夏
もーはやくすまのうら人打たへて　通　俊
いとひやすらん五月雨れそら

閑窓獨歌合
れのけから移ふ花に人問はゝ　前摂政民部卿

老若五十首歌合
すまゝそうち風わふとこたへよ

須磨のうらにとともなき煙哉　後鳥羽院女房

内裏名所百首
雪れあーたゝそ海士ゝそもーか火
すまゝそ浦に秋やくあまゝそ初塩ゝそ
けむりそ霧れ色をそへなる

水無瀬殿秋十首
もゝのあまどもれ衣夜や寒き　家　隆
うら風なから月もたまぶす
豊原統秋自歌合
いつもあれと須磨の塩焼なれしそ　豊原　統秋
哀れと思ふ秋ぞうゝなる
明白内大臣家歌合
戀をれみ須磨の浦なる濱ひさき　親　隆
たれかはしらぬしほれたりとは
すまれ沖の霞に衣たちぬれゝ　盛　方
いつれか浦とみえまかひぬる
かりそめに關もる夜半の寝覺迄　沙彌　寂蓮
袖にふれたる須磨ぞうら風
万葉
須磨人の海つぬさらそやく塩ぞ　讃人まらす
からさ戀をも我はするかも
影供歌合
吹過る須磨れうら風怨ひなよ　女房小侍從
秋のけまれはとゝめ置とも
須磨ぞ蜑のもしほれ烟忍ちに　藤原　良經
ひせふ思ひを問人れなき
すまれ浦もしほれ枕とふ螢　定　家
かりねぞゆめ路わふとつけこせ
藻潮たれ干る間もなきをわくらに　家　隆
問ともまたしすまぞなみ風

旅寝する須磨のうら路の小夜衛　同
こゑにそ袖ぞなみとかけけれ
煙たに及はぬ空にきえわひぬ　經　通
いかゝいすまぞ海士れ藻塩火
世を絶て波に浮寝をすまの蜑の　範　基
かくやは袖ぞかわく時なれ
すまのうらや波の千里は立をめて　信　方
かもみふれこる淡路しま山
もまの海士の波の枕に鳴千鳥　藤原　經京
幾夜ぞゆめのせきとゆりけん
ほしあひの手向ふ須磨のゆま衣　安禪寺宮
かもてふこともまとをなるらん
須磨のうらの藻塩の煙つかさて　冬　良
思ふかたにやたちなひくらむ
定家自歌合
蜑人れたつる煙は見えわかて　定　家
このすみそほるのもしややきける
新古
藻塩やく蜑のとまやの夕煙り　藤原　秀能
たつ名も苦を思ひたねなて
いつくもと誰か言けむすまの浦や　似　雲
かゝるところぞ秋の夕暮

あま人の塩やき衣須磨に來て　同
浮世をいとふ身をもかくさん
絶〻見ぬ藻塩のゝふり立返り　同
ひかまにかすむまをかまぞ浦
塩たれまを昔の人のこゝろまて　同
今日くみてーるもまれうらなみ
須磨ぞうら物さひしき所とも　石出　常軒
しらてやあまぞ住なきにけん
後拾遺
播磨路やすまの關守る身なりせは　待賢門院　長門
わかぬ別とゆるささふまし
仝
戀をぞみ須磨ぞならはに塩垂て　前齋院安藝
燒とも袖をくたす比かな
玄玉
すまの蜑ぞ塩屋も雪に埋もれて　藤原　公仲
ふくもぞけふりゆく方もなし
続集
汐路より秋や立らん明かたは　俊　成
まろかとるなり須磨ぞなみ風
仝
いとゝしく都戀しき夕くれに　俊　頼
なみの關もるすまぞうら風
後門集
あま小舟月と共にや出ぬらん　阿闍梨運暁
きりふきとらふ須磨れうら風

臨永
すまのうふや汐燒衣うちわひぬ　法師　長舜
あまの苦屋のあきの夜さむに
爲家卿千首
須磨の蜑の苅ほを磯の玉藻たに　爲　家
さらにーはるゝ五月雨の空
もまれ蜑の藻塩の煙一かたふ　師　兼
なひかぬさきを何なけくらん
夫木
秋風を松浦のうふふ聞そへて
さらにねさめを須磨の中山
宗良親王千首
すまの浦は蜑の苦屋もたゝりて
きりのたへまに海少ーみゆ
亀山殿七百首
須磨の浦や蜑の衣のほす日さへ　侍從中納言
まとをふはるゝ五月雨のそら
正治二年百首
すまのうらのあまの漁火たき捨て
くもる煙を空にたてつる
内裏名所百首
旅衣またひとへなる夕きりに
煙ふきやるすまぞうら風
同
藻塩やく煙と霧にまきれねと
行ゑもみねすもまの浦波

同
明渡るすまのすらほの霧のまに
たえ〳〵みもるとつ雁の聲

勅撰王五十首
淡路島ゆふしほ先や立ぬふん
けまよりむかひゐ千鳥なくなり

同
須磨のあまの燒く鹽煙尋ねても
靡なふひをいかてしらまし

最勝四天皇院障子和歌
馴ぬとて袖にや遊き夜よりなみ
すまよりの浦かせ秋ならてたて

同
秋は尙衣手さむみもーはやく
あまりゐふくやすまよりうら風

同
こどそとて詠なれたる色もなー
あきーもしるき須磨のうら淚

雲葉
幾度かれなー寢覺に馴ぬらん　行平

苫屋にかゝる須磨のうら波

松の梁
すまのうら通ふ衛の身にしめらは　紫子
ゆきてみまをを淡路をを山

立かへり見れは懷し昔しわか　稅所敦子
そてぬふしつるすまの浦波

須磨の浦つゐひ往かふ人々よ　松原貴遠
開け行く世に關守もなし

まかね路の音たへはてたゝ芝の　鈴木重嶺
浦邊にしはし千鳥なくなり

獨りもの思ふ夕ゝそ須磨の浦に　竹の里人
西風けさ淚たつらーも

須磨の浦や磯打波の音絶て　同
松れ木末に白帆行く見ゆ

舟にーて家やはいつくもたつみの　同
見もるのきりは見るもれもなし

すまの浦の時雨る陰を入日さー　青桐れ舍
白帆ゑきゆく淡路しまのな

風誘ふすまのうら波ゐち騷き　同
ーくれてと行く棚なを小ふね

一をきりふる村雨に程ちのき　何多仁子
淡路の山も見へす成にき

村雨はあとなく晴れて須磨の浦　同
岸うつ波に松風のおと

鶯も海ひいて鳴け須磨の里　芭蕉
秋やすまやすまや秋しる麥日和　同

月はあれと留守のやゝ也須磨の夏　同
海士の顏先見らるゝやけしの花　同
すまの蟹の矢先に鳴か不如飯　同
やとときす消ゆく方や　島一つ　同
月を見ても物たらはすや須磨の夏　同
冷汁やすまみ淡路の帆のけ舟　同
すまのうらの年とりものや柴一把　同
見渡せを眺むれは見れを須磨の秋　同
力をう入かゝる日や須磨の秋　涼菟
ほろ〳〵と雨うふすまの蚊遣哉　瓢水
元日やたひゝとは　われをまのうら　西月
おもーろき雲也月の走り入り　同
師走哉餅搗く音の須磨のうち　凡兆
いとりせし蒲團干したりをまの里　蘇村
道はたに稻ほす須磨の日和哉　瓢水

來て見れは風か吹也すまの秋　子規
すまの海士れ弓矢飾りー雜哉　永機
冬のをま尙青〳〵と寒けなり　鍋來獨去

すまのうらやけふを御祓の立明波　菟好
海士の子も娘盛りや磯わか菜　露城
明やすき窓にほふや松の風　同
我吹てわか聞く笛もすまの秋　同
一夜荒〳〵わからさま也浦の冬　同
思ひ出て須磨の一夜の明易き　猿人
盤渉にをくるゝ須磨よりの板屋哉　子規

北條露亭

一方雲樹問須磨、關趾何邊渺碧波、浦上秋風衣袖冷、行人幽唱納言歌、

梁田蛻巖

鐵枴峰頭纖月低、故關雲墨水禽啼、漁舟一去無消息、夜半火來蘆竹西、

小畑詩山

海上風恬浪不生、齒牙爲盾筆爲兵、蟬聲蝶影山村驛、馬載詩人隨意行、

源季融

須磨浦口雨晴天、淡島縹糊半銷煙、一片藍

帆卍字白、傍人共說是阿船、

岡　壽　鄰

海門斜日落平沙、葦箔蕭然幾十家、不識何人今夜主、蒼々夏木總無花、

何　醴　之

昔人遷謫地、歌詠被神京、烟浦瀟々雨、松林謖々聲、千秋仰高韻、今日有餘情、勝蹟知何處、清風伴月明、

白沙涵曙色、夢覺已天明、遠帆烟中影、春濤枕上聲、蘆搖雙鷺擧、瀨淺一舟横、隣翁不期至、相約釣魚行、

前山收夕照、緩步出松杉、獨倚沙邊石、閒看雲外帆、月華浮雲浪、龍氣蟠秋衫、靜極人將歸、怒潮來噛崖、

屋依青嶂麓、門對白沙濱、談話多耕釣、往來忘主賓、筍羹聊代肉、村釀可濡脣、愛此幽居樂、翛然出世塵、

小閑欄前景、空明望欲迷、陰晴山遠近、潮汐水高低、帆影夕陽外、櫓聲煙渚西、沙禽不知數、泛々與波齊、

撲面紅塵拂又生、滄溟好去濯塵纓、松風村雨須磨浦、烟島雲帆明石城、閒落關心花處々、眠餐隨意驛程々、沙邊鷗鷺知無恙、應喜來尋海上盟、

消夏何憚千里遐、須磨浦上臥青沙、江山古蹟源平夢、蓑笠生涯耕釣家、遠島蒼茫留夕照、輕帆趁參伍晴霞、秋風不用催歸興、鱸膾蓴羹辨咄嗟、

紀山連淡島、嵐翠如屏張、遙隔一江水、蒼波何渺茫、青松覆白沙、松下結小莊、時際春潮漲、一村漁事忙、擧網聲軋々、挽索人行々、老妻理絲綸、稚子守釣航、餌多鳧鷖集、響開跳鱮舫、觀斯眼前景、欣然命杯觴、膾切銀鱗細、酒斟葡萄香、漠々晴靄曳、葉々雲帆颺、空江日將暮、遠峰留夕陽、微風拂々至、襟懷清以涼、江山入圖畫、幽致似瀟湘、滄々京華座、不到水雲鄉、夢寐自怡曠、奚勿住滄溟、

金本摩齋

威揚海外載西轺、識察奇袤護主尊、今日匆々屯戍計、春田何處古關門、

松南皇朝絕句類選

万馬如潮來己急、一塊之肉竟何歸、可憐松影濤聲裏、着得詩人立落暉、

同

柳影蘆花各々秋、松林斷處晚村幽、風寒竹箔黃昏月、曾是清光上玉鉤、

橋本海關

海色蒼茫隔岸流、松間遙漏夕陽幽、一帆如蝶一帆鷺、看目阿州到攝州、

漁舟遙破水烟歸、松樹陰深鎖落暉、海面無風波不起、一禽影作二禽飛、

萬鱗入網客聲譁、賣到東西南北家、猶有餘腥留地上、滿汀無處不飛鴉、

松風隔海歇胥波、坐見漁舟載網過、風雨今朝難問古、水禽聲送納言歌、

大庭景陽

白帆遠傍白沙多、十里松籠十里波、笑我風流緣不盡、一年三度過須磨、

草場佩川

時運蕩關廢、兵墟蕭寺深、垂簾非御殿、破宇寂名琴、風雨黃門夢、文章紫史心、海波添客淚、瞑作鼓鼙音、

股野藍田

遷友離憂空復情、鑾輿駐蹕跡分明、竹簾家詫王孫裔、蕎麥店呼公子名、劉谷沙痕猶異色、走崖雲影似爭衝、無腔樵笛帶清怨、吹入松風村雨聲、

赤松椋園

沙禽啼度淡州雲、万頃波濤自閃銀、日暮須磨浦頭路、松風村雨送行人、

直井關山

獨臥南樓夜不眠、起看山月照簾前、初覺今宵春已老、杜鵑啼度海南天、

在原行平侘住の事蹟

千種日記　福祥寺を出て東の岡に松の多く立るを稻葉山と云ふ昔中納言行平の住給ふ書跡なり

須磨名所記　中納言行平配所の蹟いつかたともしる人なし

遊方名所略　行平所遊上野里也常愛梅菊親植之又持驛路鈴於舟中常遊海邊

攝陽群談　村雨堂の地を指し行平卿愛に配流し云々

攝津名所圖會　東須磨西須磨の間字を菖蒲小路といふこれ也

播州名所巡覽圖會　一說に東須磨西須磨の間字を菖蒲小路と云ふ所其蹟也といへとも其證たしかならす

今里人の傳ふる所と攝津名所圖會ふれなし

仁和二年十二月光孝天皇嵯峨の芹川野に行幸し給ひし時こゝ卿供奉せしかおのか齡己に六十九歲（攝津徵書ニハ七十一歲ト見ユ）の高齡なるに袂に鶴ゝ紋ある狩衣冠着けたる老の身に適はぬとて

翁さび人おとかめそかりころも
けふとかりとそ田鶴もおくなる

と讀みしの帝時に五十七歲に涉らせられ須磨ゝ配所に祥なりとて須磨の浦に謫せられ須磨ゝ配所に三歲住これ終に赦されて再ひ都に歸りしと傳ふこの卿ゝ謫せられ事と記事と右ゝ諸書にも見ゆれと古書を搜索せさに

古今集　田村ゝ御時に事にあたりて津ゝ國ゝ須磨といふ所にこもり侍るに宮のうちふ侍けふ人につかはしける

わくらはに問ふ人あらはすまの浦に
もしほたれつゝわふと答へよ

伊勢物語　昔仁和の帝芹川に行幸し給ふける時なま翁ゝ今はさる事似けなく思ひけるともとつきふ事なれは大鷹飼にて待せ給ふける摺狩衣の袂ふ鶴のかたをゝくり書つけゝる「翁さび云々」帝の御氣色あしかりけりたのか齡を思ふけれと若からぬ人は聞きれ

ひけりとかや

とありて流罪のこと見えさるに

四行撰集抄　行平身にあやまつ事ありて須磨ゝ浦へ流さるもしほたれつゝ浦つたひしありきたるにあるあさにいつくにやすひと尋ね給へこ「白波のよする渚に世送すあすあさの身なれこ宿も定めす」とよみてなきれぬ云々

帝王正統錄　三品彈正尹贈一品阿保親王御子大江音人在原行平守平業平五男也行平仁和三年配流須磨號正二位民部卿中納言權師在納言云々

とあるこ古今集伊勢物語ゝ記事ある其上に源氏物語ふ

須磨ゝ卷　れはすへき所は行平ゝ中納言ゝもしほたれつゝわひける家居近き邊なりけり海面はやゝ入りて哀に心そこけおる山中おり垣のさまより始めて珍らかふ見給ふ萱家とも葦ふけ乱廊めく屋なとをかしうしつ

ふひなしたこ云々

と記るされたるを見てかくこ附會せさなれ里人ゝ傳說はこゝ撰集抄なとより出てしこ事ならむも多くは謠曲によれることなるへさ然る時こ流罪のことは無根にして行平自ら謫を引きて須磨に蟄居せしこと眞なるへし三歲この地に住ひさとの事は諸書に見ふされこ恐くこ源氏物語より附會さたる說なるべし

西岡宣軒

出屋湘龍鎖浦烟、黃門瓚跡定何邊、松風村雨須磨夕、哀響依稀譜古絃、

大沼枕山

能通吏務孰能倫、忘却皇孫至貴身、絹布薄家眞死友、餱糧給國是良臣、須磨當日無雙艷、斐學終生只一貧、美貌善歌皮相耳、將言正士更才人、

松井河樂

遷謫懷悲敕感恩、古今榮辱共無痕、只因三十一言詠、須磨名蹤万世存、

葉箒

東須磨のもとの村役場のあたりの地名なり其ゝ故を聞くに昔し長州侯參勤の途次此處に休まれけゝる時葉なりの箒を以て塵を拂ふものあり侯其れ箒の名を問ひけれは此者葉箒と答へぬ後の人その智を稱へ遂に地名となりまとそこの處にて葉箒脚肝なるものを鬻さて名産となせし由なれと今は見えす

葉箒て案内とりて西東　蜀山人
すまかふすまへちりものこさす

行平衣懸松

西須磨より駒か林に通する東須磨ゝ辰濱いとへる處にあり此松明治廿三年七月村人斫て薪とおしたれは今は切株ゝみ存す

須磨名所記　南濱邊に行平松あり此松を松風村雨の舊跡ともいへり石塔もあり

本朝俗談志　行平松須磨の濱邊小松原ゝ中にすくれたる大松あり俗傳行平卿手つかふ植玉ひし松也行平歸落れ名殘をおしみたりとて枝葉悉く東へ垂たりもとゝ半より相生なゝしか今ゝ老樹となりて梢枝とも朽て幹は三周ゝとなるか控に成さり

播磨遇　行平配所松海道よゝ兩濱東須磨の下

須磨浦古跡記　行平都へ御歸りの時片身の烏帽子狩衣をかけ置玉ひし衣かけ松濱にあり

攝陽群談　行平松東須磨村にあり俗傳み云く行平卿の植えし松歸落れ名殘を惜み枝葉悉く東に靡くとなり本一木に生〜半より相生と成れり

行平配所松　街道より南濱邊東須磨れ下中納言在原行平仁和年中當浦に配流ありし時植置き玉ひ一木也行平松と云太き五ひろ餘あり此ゝとりを松風村雨の舊跡とも云ふ

遊囊勝記　衣掛ゝ松とて濱手にあり

播州名所巡覽圖會　衣懸松因幡遠山松此等皆後世の戯作なり

攝州名所圖會　衣懸東須磨れ濱邊にあり松風れ謡曲によりて名つけ初しならん

諸書概ね行平松と記ー衣懸松と云とす衣懸松と云へはこそ今ゝ行平歸落を惜み此松に衣を懸けて去りしなと云へるなり謡曲に行平歸落れ時ゑはーかた衣を二女に送りー由見へたれは磯馴松を形見松なと云へると同しくこゝ謡曲に基き衣懸松の名も起りまものなれは行平手植ゝ松と云へる方眞なふむ近年まて松れ下に石塔ありしことは今ゝ傳ふれとも二女の舊跡といへるは作り物語にして松の枝の東ゝ靡くとの所傳も磯馴松の項にーるせー如く廣異記ふふひたるもれなり

行平月見松

東須磨の北の尾崎因幡山の前に古き松ゝ茂れるもれを月見松と云ひ此山を月見山と呼へり行平卿賞月亭の舊蹟なるを以てなりと八十年前まては行平の石碑ありし由なれと大風雨れ時谷底に落ち土に埋れたりとて今は見へす

千種日記　稻葉山にあり今も此松を月見の松と云ふ

兵庫名所記　月見の松兵庫より一里半東須磨村の上山れ中段に松十本餘あり行平中納言月見ゝ舊跡也

所歴日記　行平卿の月見の松とて東須磨の北なる山にあり

攝津微書　行平月光亭

攝陽群談　東須磨村北の平山ふあり松ゝ一木にあらす總て並木の森を云ふ行平是に於て月を詠む其景色他に勝れたり

遊囊勝記　稻葉山一名月見山といふ月見れ松とて此山にあり

播州名所巡覽圖會　行平月見松東須磨の北れ尾崎に古松の大樹七株あり

播磨遇　月見の松行平の舊跡也東須磨村の北山の中段にあり

須磨名所獨案内　中古津田大炊頭此山に城を築く其年月詳なふす又慶應年間此山上へ長州候陣屋より哨兵の出張ありし所なり

須磨浦古跡記　行平中納言三とせの程もしほたれつゝ眺め玉ひし月見ぢの松とていあはは山にあり

須磨名所猶案内　月見山と云稲葉山の一名にはあらで一部の名なり昔後ぢの山のうちに屬せり

鎮護殿の項に或説にもと此森は行平卿賞月亭乃跡にて即ち行平卿を祭り有りしを中古より三十番神となせりと云ふ攝津名所圖會に月見松七本あり云々又遠見松云々とあり然るに今月見松と稱る松と昔より七本なく只二本あるぢみ又遠見松なるものと知る人絶てなし按るに今の月見松と名所圖繪の遠見松にして月見松は此三十番神に在る松ならむか又番神の松と今三本あれとも明治五年の暴風まて七本ありしと云ふに符合ひれは旁以て番神の松は月見の松と信す故に遠見松と遠山松の誤りなるへし

帆もまろし廣野をはしる玉兎
ますかけや月は三五夜中納言　貞室

遠山松

上野ぢ後の山一帯の松を總稱して遠山松とはいへるなり

攝陽群談　須磨寺の後れ山にあり土俗の傳へて松風ぢ謠ふ寄ると云へり因幡山後の山なんと云も此邊にあり

播州名所巡覽圖會　遠山松後世の戯作也

攝津名所圖會　因幡遠山松は月見ぢ松より寅卯の方半町計ふあり松風村雨の舊跡ともいふ按するにかれ卿ぢ和歌より名けしならん

稲葉山

東須磨と西須磨の境ふ一段高き小阜ありこれ塊いふあり

攝陽群談　因幡山民家の後を以て一名後の山と稱す行平卿の配所になそらへ世俗松風の謠に寄て號之

遊齋勝記　稲葉山一名月見山と云ふ

千種日記　福祥寺を出て東の岡に松の多く立るを稲葉山と云ふ

月見山稲葉山後の山といふも一の山を指ましていへるか如きも稲葉月見の山々と前にもいへる如く後の山の中に含ふ居れと右の三書の記事と誤れるにあらす所傳ふ行平卿れ立わかをいふと山ぢ峰ふれふる松としきかは今かへりこひと讀まれたるは此山塊いふありと

勝地吐懐編　和名抄に因幡法美郡に稲羽の鄉ぢあり是ふり文德實錄には齊衡三年に行平卿因幡守とあられたれは其ぢ時の歌ふるへし六帖に國とゆふ題に入れたるも武藏國ぢ武蘆野のことく國と山と名を同しくするゆへなり續後拾遺旅親の田舍へくたりけるに送りける藤原相如吹風ふつけても悲しいなはなるいふとにかゝる露ぢ身なれはと讀めり

島山健　立わかれ云々古今集雜別に題知らすとあり因幡守になりて下る時別れに讀めるにて人を慰めたるなり

この契沖か記事による時と此歌と行平卿か因幡守となり京を去る時に讀を殘したること明かにまて要するに此歌を讀まれたる同卿か其歌ふ讀を入れ給ると同し山ふる此浦ふ閑居せしを以て後ぢ人誤り傳へたるものなるへし

攝津徵書　任終て歸洛ぢ時二女ふ玉ひし歌「立別れ云々」と讀みて玉ひし也

行平卿か此山を歌に讀を入れしもぢありといへる傳説の外に松風村雨れ二女に給ひたる歌ありとぢ一説を加へかくも據ところあるか如くに記るせとも義に杉谷氏は書殘寄せし時左の如き解答ふ接したをは撰集抄謠曲なとより

出てゐる附會れ謬說に外ならざるべし

（上略）

立わかれ云々と歌につき御質問相成右之撰津國須磨にある因幡山なる由某書をやらんに御座候との事なるとも貴說れ如く今日迄先哲と說にて決して左樣なる事は無御座候彼と歌之文德天皇齊衡二年正月從四位在原行平朝臣爲因幡國守云々と文德實錄にも相見候へと節京に殘されし人によみて進はされし事に相違無御座候總て古今集に單に題しらすとして載せたる歌は大方京より他へ發足をる時とものにて他國ゐありて讀みたるは其れ故よしを記しあるが通例の樣ゐ御座候又因幡國法美郡に因幡といふ地名あると和名抄にも相見候へは或は其の山をさしゐるにてもあらんか乍併單に因幡國をさして之を歌あまた有之候へは矢張大らかゐ見たる方よろしからんと存候躬恒集にも因幡守の下るに「一日たに見ては戀しき君かいなば年の四とせをいかて過さん」ともあり又後撰集にも家に侍りし女子いかなる事にか侍りなん心うしとてとゝめれきてまかりなれは女「打ちすてゝ君しいなはと露れ身はきえぬとかはそのありとなとひな」とも有之候此等皆廣く因幡國をさして之を云るも れゐ御座候されは行平の歌も廣く因幡國なりさしていへるゐ相違あるましく候彼須磨浦古跡誌とやふんに記し有之候は「わくらゝとゐ云々」の歌より出てたる俗說の松風村雨の古事に附會したる謬說に相違有之ましと存候行平は須磨浦に流されゐる事も何も無之唯古今集ゐ出てたる「わくらはに」の歌は何か執務上に過でもありて自謹身の爲暫く蟄居したるもとゐゐ御坐候へは須磨浦ゐて「立わかき云々」と歌抔なりむへき筈も無御坐候松風村雨と俗說も西行の撰集抄ゐ「一ら波れと云々」とよめる歌より附會したるもれゐて取るゐ足らざる謬說に御坐候右は須磨誌御編纂中との事に御坐候へと委細愚說なりと吐露致し申候御參考にも相成候はゝ幸甚に御座候　（下略）　井口隆太郎改　杉谷正隆

松風村雨堂

村雨之月にとうとーまつのかせ

西須磨の東の端街道より北にあたり大ひなる松のゐる所なり近頃まて辻堂あり里人相傳て村雨堂といへり

須磨古跡記　村雨堂西須磨東の入口にあり笈之小文　後ろの方に山なを經て田井の畑といふ所松風村雨の古里といへり

細見記　須磨町家の出口より右へ行けは松風村雨の跡あり

播州名所圖繪　松風村雨の名は全く作り物語のあるによりて謠ゐも作りしなるへし實事あるにあらす

所傳に行平卿謫居と時村長畑殿の娘にもーに こゝーの二女あり須磨浦に潮なを汲みけるか此所にてこの卿に出遇ひ宿とと尋ねらを彼の女等は返辭なくまら波の云々と讀みしかは卿喜ひ斜ならす折しも村雨のふり來て松風吹きわたりゐれは時にふれたる名なれやと松風村雨と名つけ給ひ遂に二女ともゐ卿と睦しく此處まて相通ひ來れるかこの卿歸洛の後は田井畑ゐ歸れり故に墓と田井畑字畑殿にありと云ふ

播陽群談　須磨村にあり土俗と傳に云く田井畑村と松風村雨二女と舊栖なり行平卿爰ゐ配流し不慮に見て睦ーく通ひ來る處を指て休所亭と號す其舊跡今の俗村雨堂と稱す

須磨名所記　村雨堂重衡こしかけ松も同し所にこれあり又行平松の項に此松を松風村雨か舊跡ともいへり石塔もあり又二女の舊跡は須磨より一里ばと奥田井畑村といふ所ゐあり両所いつれか是ならひ

攝津徵書　松風村雨舊跡　村雨堂　始に謠曲に行平卿二女を愛せし由見ゆれとこれは證ととならすと云ひたきに　行平二女を愛

し玉ひし事若き時因幡へ任國に下り給ひし折から此一の谷の北多井畑村長か娘二人有しを召連き松風村雨と號て召遣れしは因幡ゝ國にての事あり任終て歸落れ時二女に給ひし歌立わあれ因幡ゝ山ゝ云々と讀みて玉ひし也此歌百人一首に出て衆人よく知りたる事也松風村雨をてふ愛せられしは若き時因幡の國にての事也作り物語に須磨の鹽汲海士也と作ゝ出せるか故に甚紛らはし唯物語れ事ゝ作物なれは論するにたらす

遊方名所畧　須磨寺の項に寺邊有松風村雨蜃女墓　昔日松風村雨海女二人有汲潮跡於今此處燒鹽也

准后親房記　鷲尾家久は熊王の父なり熊王か母は田井畑といふ所の美女なり此里は松風村雨れ出し所にて昔より惡女すくなしといふ又一說に松風村雨は元讃岐國鹽飽大領と云者ゝ娘也繼母の讒侯により此所に離れ來りしとも云

摂津名所圖會　西須磨ゝ東端街道ゝ上にあり此地行平卿謫居の地と云ふ即ち菖蒲小路と云ふ字今にあり諺云松風村雨ゝ二人ゝ須磨の北なる太井畑ゝ賤女なりーか行平に召れてゝに給仕ーゝるとゝ近き頃まて辻堂なるものあり土人これを村雨堂と云ふ今はしるもに古松一株あり

以上れ諸說は因幡山の項ことに杉谷氏の書を讀まは何もも俗說なると明けー

因幡藥師

圓福寺は東須磨にあり長一尺三寸の佛像を祭れり

寺記云　行平此浦にれはせし時の念持藥師なり

摂津名所圖會　因幡藥師ゝ京にもあり在原行平と橘行平との混雜も覺束なし此類世に多ー

須磨名所獨案内　歸京藥師成就院の名あり

又壽永の兵燹に罹らざりしを以て火除藥師とも云ふ（書中橘行平と在原行平を混ーあるは俗說として見るへし粟津義圭師述宣唱東漸錄にも橘と在原とを混して因幡藥師の因緣を說けり獨り此書にのみ限らさるなり）

播州名所巡覽圖會　因幡藥師は後世の戲作せるもの也

この名勝圖會の記事ゝ京都に橘行平の祭れる因幡藥師を在原行平と誤り傳へて此因幡藥師は在原行平れ祭れるものなりと云へるか如く見ゆれども遊方名所略に記るせる京都因幡藥師の寺記を見るに京都五條松原通烏丸に祭れる因幡堂なるものは天德三年橘少將行平因幡國一宮に參向の時病あつく諸藥も効なき折輕津ゝ海に天竺ゝ名醫ありと夢み網ーて藥師を得ことを祭りしかは病忽ちに癒へたるにより後まの堂に祭りーか中納言行平一夕此に來り「開帳而請碁盤上以其念信急故也於今座碁盤上」云々と見へたことはまの因によとて行平卿此浦にありし時まゝに祭りーものにてもあらひ寺記に念持藥師とあるは一証とすへし

前田氏

摂津微書　まの塲やはしめて生る眞菅の茅

須磨浦菅家れ一なる前田氏の事を記さんに昔井戸莊中莊下莊を領し世々此地の里長にーて家ゝ須磨寺の前より二町餘り東に當り道の北側にあり家譜由書なるものを見さことも諸書に記るせるものを擧くきゝ神功皇后の頃より子孫繼續せり云々須磨記の中に菅公須磨にて橘季茂の家に立寄らせ給ふと記るせるゝ前田氏か祖先のまとなり云々同公菅原の姓を賜ふ云々されと摂津名所圖繪には「然れとも其証詳かなられ」とあり家に藏せる重寶の大要として同書に載せたるは　菅公自畫影（同公此里に泊せる時の筆なり）　弘法大師石像（自作）　後陽成院御宸翰　秀吉公筆　三尊彌陀（惠心筆）　古證文（増田右衛門津田ノ惠閑）　三夕和歌（六條宰相有藤卿冷泉二位爲久卿藤谷三位爲信卿）　菅家須磨記（從二位實積卿の筆）　一休和

尙筆　西行法師筆、制札　瀧川左近松平武藏守　六字名號　元祖上人筆　なるも今は散逸して保存せるもの少しとそ

菅公手植乃松

同氏の庭内にあり

東須磨村前田ぬしの庭に菅公御手つから栽玉ふものゝあるとけれと讀みて奉まつる

庭もせにまけりて根はふ松の枝　松原貫速

千とせ八ちとせとさは也けり

汐風にかはかぬ袖をかけまくも　同

かゝゑしとのみいつかれにゝ

昔雲助馬子なとの「須磨代前田のゐさつの中にあやめさくとはまらなんた、さいてまはれてまたさく花はすまの前田のかきつはた」の歌を歌ひし杜若も今尙はあり

長田社

前田氏の邸後にあり家譜に神功皇后三韓より凱旋して御歸の途次こゝに立寄らせられ出雲國よりと事代主命を迎へ祭るへしと詔あり前田祖先勤請せり後に及んで今の長田の神社に遷し奉るとあり今と長田社と唱へまた元宮と稱す昔と祭典ふ蒙人形三千三百三十三個をつくり三韓討伐の狀なりとてこれを散々に伐りしとそ長田村の長田神社にも同樣の事あり此時前田氏を客家と稱せ由左れと元宮の名壇滅に附すへからす播州名所圖繪に源氏物語の上巳の祓に船にこと〳〵しき人形載せて流すを見給ふ云々とあるを見て藁像を切捨る事是昔の祓の遺事なるへし云々とあと和泉式部六月祓ひの歌に思ふ事皆つきねとてゐさの葉を切りきりてもはらへつる哉とあり考ふへし

此神と釣を司り賜ふと聞いて

土佐針にかくるや土佐の初松魚　溶海

釣さゝの糸にさとるや夏の月　加賀千代

つり人にならひて阿鹿さく夜哉　闕更

菅之井

前田氏の邸内にあり菅公此浦に泊せる時この井の水を酌み送りしかと公喜ひ給ひて自畫の肖影を贈られしといふ此肖像を綱敷天神として祭れりとの說あり近年まて此の井れ水にて酒を釀し菅の井と銘せる由なれと眞の菅の井とこれにもあらすと里人はいへり

すまに泊りー時前田氏より菅の井といふ名酒を贈らる

菅の井をくむともけさし大自在　湖夕

名まへたのもし神のめくみよ

頼政藥師

須磨寺の人家より東半町程にまて道の北に字下樋詰ふあり淨福寺と號す前田氏の抱所なり長一尺の藥師を安置せり傳へて聖德太子の作と云ふ

攝津名所圖會　須磨記に「なにくれとせしまゝに暮ちかふなりそこら上野の岡といふ所何かしの寺あるよしにて鐘さゐかへりて耳頭うれふを催せり」とあるとこの此寺のことなりとそ

須磨古跡記　頼政御建立正月八日に鬼踊あり

所傳に古へは立派なる寺ありーか其の後退轉に及ふ頼政此殿再興まに依りて頼政藥師の名ありしとなむ毎年正月八日にと夜鬼踊（サニヲイ）とて數人假面を冠りて鬼に扮し火を點したる竹の束を手毎に持ちて里人を追ひ狂ふ由にて今に廢せす備中笹沖村東京龜戸神社にも此事ありと聞く其故殘知らす

重衡腰掛松

須磨寺の前の街道の北に大ひなる老ふ松の株ありこれをいふなり左近衛中將重衡と平清盛か五男宗盛知盛等の弟にて壽永の戰ひに生田の副將軍ありしか軍敗れ西を指して落ちけるに此處の松の下にて高家景季等れ爲ふ虜となり其の時に里人須磨の名物なる濁酒を捧奉しのと

さゝぼろや波こゝもとをうち過て

須磨てのひこそにこり酒なれ

と讀まれたる由

攝陽群談　腰掛松須磨寺門前ゐあり俗傳に云く本三位中將重衡卿の腰掛松なりとろ今と枯て名ばかみ殘せるも猶哀なり　又苅藻川の項に　此所壽永年中の戰場重衡卿を生虜の所也

須磨浦古跡記　須磨寺の馬場先にあり重衡卿須磨の浦を去り玉ふ時松の根に休ませ玉ふとて年ふりし松一株あり

兵庫名所記　腰掛松須磨寺の馬場先街道の際今と植繼の木なり本三位平重衡須磨の濱遠淺ゐて庄の太郎家長に生捕れて此松に休み玉ふ

須磨名所記　村雨堂の項重衡腰掛松も同し處にこれあり

平家物語　主從二騎助船に乘らんとて渚の方へ落給ふ所に庄四郎高家梶原源太景季好敵と目をかけ鎧をあわせて追懸奉る渚ゐ助船共多かりけれとも後より敵と追懸たり乘へき隙もなかりけれは港川搔藻川を打渡り蓮の池を馬手に見て駒か林を弓手になし板宿須磨をも打過て西を指てそ落給ふ云々

東鑑　元暦元年二月七日本三位中將重衡於明石浦爲景時家國等所生虜

頼山陽と其著日本外史に「範頼實平破東西門而入三面合擊斬平通盛等十人擒平重衡」とあるとと重衡捕虜の地と苅藻また須磨にとあらすして明石の方眞ならむ腰掛松は落ぶらひし途次休みたる所と思ふる

近藤鐸山

聞說才流比牡丹、飄零時失恨殘闌、一曲琵琶數行淚、夜帳歌休燈影寒、

藤田吳江

黃門策何壯、卓識冠軍英、乘輿一西駕、誰復守神京、失策晉南渡、亡國隋東征、幸有中將在、旗鼓與賊爭、身入萬軍裡、鏖戰風

雨驚、箭竭乃爲虜、寡左雖不行、李陵竊漢北、文山落胡城、湯沐頼先德、侍御豈素情、絃咽虞兮淚、吟哀楚歌聲、特謝泉下鬼、闔門獨耻生、

橋本海關

囚室燈昏夢屢驚、脫身無復報讐情、西溟空有老尼泣、不獨楚歌四面聲、

赤松椋園

悲歌一曲聽琵琶、屬盞佳人仰面嗟、昨日殘樓飄落盡、欄中尙護牡丹花、

上野山福祥寺

墨染の袖もつもけく思ふらん　何　多仁子

まつの雫のかゝる須磨寺

大庭景陽

青山如夢咽寒潮、秋入蘆花酒易消、遺恨何人吹玉笛、須磨寺古草蕭々、

攝津徵書

淋しさの氣もすさ寺や初村雨

須磨寺に女客あり土　用　干　梅　宝

須磨寺や鶏もなかぬ秋のくれ　好　笑

須磨寺と春のつき夜と成ふ鳧　狸　伴

須磨寺の入相近し鳴いとゝ　文　龍

西須磨の上野にあり眞言古義派高野山蓮華三昧院の末寺なり仁和二年開鏡上人勅を奉して開山せーものにして本尊と長三尺五寸の觀世音を祭れり世に須磨寺といふは此巨刹をいふなり林氏の古書に依れは天長年間に海中より此觀音を得北峰山に安置せしを仁和二年勅により開鏡上人この地に移ー開基せりとあり一書ふは兵庫惠倡山に在りしと見も又頼政再興の後慶長七年震災にかゝり豐臣秀頼之を興し十六石の御朱印地とおせー由を記るせり今と廢頽ーて十二坊も僅かに蓮生正覺の二院を存すのみ二王門の力士と運慶湛慶の作と傳ふ敦盛堂ハ本堂の側にあり甲冑を着けたる敦盛の像を祭る其の前に老松あり幹一木にして雌雄の二枝に岐れたる奇ーき相生の松なり義經腰

掛松と本堂との西にあり

難方名所略　寺邊有平相國清盛石塔及越中前司盛俊塚又有小松内府重盛遺骨又有松風村雨贄女墓

敦盛と首塚もあり盛俊の塚と併せ考ふるも消夏の一法なるべし

馬盥乃額

中門と明治廿四年本堂の階下に移し猶は馬盥の額を掲けありこは敦盛の用ひしものにて木は源平躑躅なりと云ふ上野山の字も今と讀み難し

細見記　二王門あり惣門の額と經盛公の馬盥なりといふ

漢竹

本堂の西に小藪あり

兵庫名所記　漢竹境内にあり昔神功皇后新羅征伐の時肥前國松浦川にて鮎を釣り玉ふ

釣竿を其處に捨て玉はす歸朝有て爰に埋む枝葉榮へ今尚根本とひこれり

播磨廻　神功皇后松浦川にて鮎を釣り玉ふ竿を植へ玉ふ也といふ竹あり

攝津志　土蕃觀音竹

攝津微書

須磨寺伽藍開基記

攝之坂陽成西去十余里抵須磨鄉有觀世音聖跡號上野山福祥寺世稱須磨寺後擁群巒前臨南海長風時至浪花接天漁舟商舶或王者樓船來往蕭鼓棹歌白鷗鴛鴦出沒其間平沙鹽鹵綠雲丹々其風景絶出未可以筆舌陳非南海補陀之梵刹乎昔此海中每夜有光遠寘漢衆人異之既而有漁父下網捕魚得一檀木所造觀音像乃締小宇以安置之其靈應特甚凡有所求靡不隨意由是遠朝廷光孝天皇仁和二年敕文鏡上人營寶殿丹青爛絢照映林岳遂成梵刹於是懷香瞻禮者日接踵於道迨今八百余歲而聖跡猶存厥後至久壽年間源三位頼政公重新修葺殿宇

支提鎮守神社等煥然一新山川增色靈感益盛

先是平城帝之玄孫黄門在原行平者有故謫此地期七晝夜謁像期滿夜夢一白衣異人告曰我非不護汝以汝夙業所感自作自受如響處響如蛾赴燈若能修善積德三歲之後必得遂心覺而忻然感激無何有蜑女姉妹來給侍左右儀容端麗柔順慈仁一日松風二日村雨經三年果蒙恩歸京嗚呼觀世音菩薩悲心無盡愍念衆生猶一子是好現種々形利益衆生使非大悲方便力安能爾乎臨別手栽松樹以志之曰磯馴松至今猶存焉云々

須磨寺縁記　西須磨林八郎左衛門氏藏

夫惟弘誓深如海之秋月焜燿三十三身變作之天善應諸方所之春花芬芳二十八部眷族之地于茲攝津八田部郡須磨鄉上野山福祥寺聖觀世音菩薩者靈驗不思議之尊像玄妙未曾有之慈容也彼孝出自淳和天皇之御宇攝津國兵庫和田御崎漫々滄海夜々放光照徹碧虛人以爲奇一日漁郎下網得閻浮檀木端正微妙觀音閻

國郡黎尊信安之一堂利生接物捷於影響可謂機緣純熟函蓋相應者也嘗聞在原黄門行平卿平城天皇之孫阿保親王之子也有故著謫藉而遷斯境初先諸寶前悲述歸落懷謹俯牀上祈還鄉願欷耳於鐘磬之響則破顛倒妄想之迷澄心於經呪之聲則忘戀慕愛執之念跏趺玉帳金簾之下個匐薰烟明燈之邊不離場一七晝夜將滿之曉夢有白衣眞人來告曰卿依有所感夙因暫貶此地更勿勞身焦思三年之後要須錦旋枌里自經寂寞無聊之寡々送悲歎有結之起居不若用之安慰謫所之枕席賜寸木十八斤卿驚愕夢醒于時風雨蕭然松葉滿座歡喜之涙外溢如無所思感激之情内動似有所待從是僑寓蟄家果見松風村雨姉妹之婉妁有仙子之態以爲左右侍兒送迎春秋手自栽松以遺芳躅今磯松俗曰磯馴松是也卿始終不違夢托是豈非即現婦女身之謂乎厥后　光孝天皇御宇仁和元年丙午勅聞鏡（或作文鏡）上人開山爲大梵刹直到如今七百七年變更幾何元暦之古平氏築城一

谷佛宮亦旋交兵馬塵是故寺院財產經典爲群黨被虜掠雖然嫩木櫻每春花開依稀想像源大將之粧小枝笛自昔葉落髣髴直視平太夫之質義經奏後河白法皇使澄憲僧正作笛記獻之寶坊願滅罪生善之志直實隨彼黑谷上人改道生法師爲衣休入于鼎峯會修因感果之理亦普明照世間之意也蓋夫爲斯境也東望雲頭縹渺布引瀧漲落湛盧峯三千尺之銀河水面滉瀁生○流出醽長江數百匹之白練而顧官吏守函開之嶮巇障大藏谷之幕雲歌仙卜詞塢之蹤跡內卓明石浦之朝霧桂櫂蘭槳浮九紫萬○船金波銀浪疊二丹千秋雪南海淼茫紀陽淡山凝文君西子之眉黛北岸岩巉摩耶武庫戴應神聖母之首鑿氣万千不可具狀實是鑾蹟此上者遊目騁懷忽脫利鎖名躔現世達人々所求之風望假亦歸仰此像者樂性怡神速離污垢穢塵未來開各々所願之素懷者必矣何況寺僧每經三十三年拈斗帳開闔之印鉦挑方牀多少之燈油結化度利益之好因緣亦大悲圓滿之妙智力也最可嘉尙矣

什物

保呂衣名號　熊谷直實の筆其側に和歌あり

敦盛畫影　直實の筆

法とく水すゑと硯て書をくも
　心行具足阿彌陀佛力

敦盛赤旗名號　法然上人の筆

爲敦盛空顏隣清菩提書之源空　側らに和歌あり

昔壽丸世にこそすまてたへいりし
　彌陀の邊にともに生るゝ

敦盛の和歌

題麁とく雪

よしやたゝとはれても又おくさまん
　なのゝ跡なき庭とく白雪

寄松祝言

みとりなる松に千とせの色みせて
　久しかれとやのきの山風

敦盛の鎧　高麗笛　學祐僧正の作　青葉笛

青葉笛

寫書とその笛竹の世々かけて　庭田中將
　おとをのみつたふ須磨のふるてゝ

松の葉

笛竹の世のうき節に枯にけん　滋子
　青葉もいまは名のみれこりて

世々へても青葉の笛をとゝせて見る
　袖に涙の雨こそちれ　松原貴速

須磨寺や籟ぬ笛きく木下闇　芭蕉
　梁川星巖

須磨浦上吊王孫、芳草斜陽古寺門、忽被山僧勾引去、一枝湘管認啼痕、

所傳に僧空海入唐とゝ時自ふ作りしものなるか不思議にも二枝生せしを以て時の天皇に獻せしかは青葉の名浪給ひ　後鳥羽天皇より平氏に下し給ひたりといへり

平家物語　件の笛は祖父忠盛笛の上手にて鳥羽の院より下し給られたりまを經盛相傳せられたりしか敦盛笛れ器量たるに依りて持たれたりゝるとかや名をは小枝とそ申しける直實御首を搖落す云々色おつかしき漢竹の笛を香もむつましきを錦の袋に入て鎧の引合せにさゝれたり云々後馬鎧笛ともに首を取添て父經盛へ送られける

千種日記　須磨寺に敦盛とく寫眞と青葉の笛あり「うつし書云々」と庭田中將れ讀玉ひしは是おり又青葉れ笛寒竹とく笛を包し袋は蜀錦おり

遊方名所略　青葉笛天下三管笛隨一也薄墨笛義經所持蟬折笛高倉院茂仁親王所持其笛素質似蟬節半折故名蟬折青葉素質無彷又蒼竹笛此小笛也

本朝俗諺志　青葉とゝ笛一管歌口のうらに笹の葉のやうなる葉あり近きころまて色青ゝりしと云へり生の葉にてなし彫物也

寺說　當山とく寶物は貞享年間江府寶鄕寺より貽納せり

常山東行筆記　今須磨寺に敦盛とゝ笛とて傳へたれとも笛も父經盛とゝ方へ送り返しける

事盛衰記に見へたれはあらぬ贋物にそ有へき

攝津徴書　經盛唐土より漢竹を取寄せ比叡山にて三七日是を新られ作りたる笛成と諸書に出たり此須磨寺の笛を見るに和竹也又鎧を見るに大將よ着せし鎧なる事覺束なし一ゝ谷落城よ時青葉よ笛燒失したる成るへし

須磨名所畧記　寺僧よ傳說に壽永三年二月六日一ゝ谷に於て熊谷次郎直實御首打奉つり首と笛とをもて熊谷か源義經公へ差上らる公其首を實驗ー伊勢の三郎義盛と申使者を以て當山へ納め玉ふ

松よ榮　須磨寺へも詣ふて給ひて敦盛の筆よ跡其外昔の由あるものとも御覽す云々

落合直文歷史讀本　抑もかの敦盛よ持たる笛といふと父經盛特よ外に笛よ上手なりけるか嘗て砂金百兩をもて宋より漢竹よ一枝を購ひ其一節を切りて天台座主明雲僧正に托ー て秘密瑜伽壇に立ちて七日か間加持して彫ふれーもの也經盛の子多かる中ふ敦盛は器量の仁にてことに管絃にも妙なりしかは其七才よ時に讓られしとうされは敦盛は此笛を父の如くに思ひて暫も身を放たさりーなり初はさえだといひーを後に青葉よ笛と改めさといふ云々其由大將軍に申ー て首を桶に入れ馬鞍兜弓矢さてはかの青葉なと一も殘さす一紙の消息嶽かきそへて雜色二人水手二人つきそはせて釣船に乘せて屋島の磯へ送りける

青葉の笛れ眞僞のほとは右の諸書に徴して讀者自ら判斷し得む尙くさ〳〵乃寶物あれと開帳の時あらては許さすとかや

辨慶よ鐘

本堂の西ふあり鐘かけ松れくゐりに記るせる鐘とこれ鐘なりと云ふ銘に攝津矢田部郡丹生山田庄原野村安養寺とあり

土人傳曰元暦の役武蘭坊辨慶の携へ來る處なり

諸國里人談　鐘樓よ鐘すくれてちいさし銘ふ安養寺とあり須磨寺よもとよ寺號なるやと尋ぬしにこれは三里はかり山奥の寺也壽永よ亂に武藏坊かの寺の鐘をとりて陣鐘ふーけるよしにて今當寺にとゝまるといふ

手ごろなる釣鐘草やつばものゝ　沾涼

有明の別れ惜むや須磨の鐘　蹉青　玉

時雨るゝや舳先ま鳴るは須磨の鐘同　琴糸

須磨寺鐘（八景の一）　渡邊林菴

緬出梵宮餘韻長、遍通萬戸散悠揚、驚回殘夢動人事、冥路亦應安李王、

松風は折しも絶へて鐘の音を　逸見氏

月に數ふる須磨よ山寺

若木櫻

本堂より石階を降りて右側にあり

攝津徴書　忠度は腕にものへしてくら哉

攝西奇談　花咲と聞はさくらよ哀れかな　離島

六々集　葉櫻や指をきらるゝ人もなー　忠貫

須磨寺や若木櫻も冬木　立信漉竹　圖

千種日記　寺の前に櫻ふり須磨よ若木の櫻是なり

所歷日記　西須磨を過きて上野山福祥寺に參る若木よ櫻も此寺にありとて志るへよ敎へ侍りける立よりて見侍りけれと竹の林の中にふん有る須磨の關屋のとよめーをれもへは爰にはいかゝとおもへ侍る

本朝俗諺志　若木櫻上野山福祥寺境内にあり幹は朽て根はかり方三間程にはひこれり廻りに垣をむすふ也其株より梅よ花はへれことく若生きもとも生たり古へより若木の櫻といへは其幹と久しきむかし朽ふるなるへし今とても少れいたてと必朽る也されといつまても若木よ名はむなーかふす目出度さくふあるへし

遊方名所畧　八部郡須磨寺及山岳有若木櫻寺中櫻花別得名老樹又如若故名

名所方角抄　磯馴松若木櫻蟹の噂り松の柱竹れわめる垣石の橋源氏物語の詞なり

遊囊勝記　須磨寺に參詣すれゑ若木ゑ櫻花は散果て後れ山は草茂りぬ

攝津名所圖繪　嫩木櫻源氏須磨卷の言葉書によりて後世に植へて號けしなるへー

攝津徽書　忠度ゑ行くれて木ゑ下かけゑ宿とせゑ云々ゑ歌は旅宿といふ兼題の歌なるへし此花ゑ許にわつて讀みたるにあらす

細見記　本尊觀世音敦盛ゑ御影青葉の笛辨慶化れ制札等後堂にて開帳百文なり少し行は茶やれ前に若木れ櫻あり義經の寄附狀ある由

敦盛れ首を義經此寺に埋めたるより辨慶憐み其名を後の世ふ傳へんか爲に櫻を植へて若木櫻と云へりとゑ俗說あれとも名所方角抄ふも云へる如く源氏物語れ言葉にもとつき植へおきしこと疑ひなし

源氏物語　すまに年かへりて日なかくつれ〳〵なるにうへーわか木の櫻ほのかにさきそめし空のけしきうらゝかなるみよろづのことをれほしいてられてうちなき給ふれり〳〵多かり二月廿日あまりいにし年京をわかれー時心くるーかりー人との御ありさまおとこいたく南殿れさくらはさかりになりぬらん云々

行くれて木の下かけを宿とせゑ　忠度
花やこよひれあるしならまし

家集櫻花たか世の若木ふりすてゝ　定家

須磨名所記須磨れ關屋のあとゑうゑむらん
花さくら老かはれとも植初し
むかしの春の色もわれれす

立よれゑ下かけゆかーもみ出る　松原貴速

櫻におもふ花の言の葉

若木櫻花（八景ノ一）　渡邊林庵

英々粲々厭枝垂、想見江南万玉妃、名入倭歌長艷麗、風人千載寄幽詞、

何　禮之

一指要償花一枝、豪僧軍令太清奇、風流欲比廣平賦、鐵石心腸護艷姿、

橋本海關

櫻陰露臥客情窮、吟入英雄行詠中、夢在名都香雪底、覺來衣上落花風、

土佐　野島信光

寄宿花邊舊洛春、山櫻解否感懷人、東風落盡知何日、一片餘香千載新、

嫩木櫻制札

須磨寺櫻

此華江南所無也一枝於折盜之輩者任天永紅葉之例伐一枝者可剪一指

壽永三年二月　日

攝津名勝圖會　此花江南とは梅の制札也詩話曰在江南寄梅花一枝詣長安又云江南何所在聊贈一枝春又云北人江北望不見隴頭梅、然る時は此制札ゑ籠梅抔にゐりたし若木櫻ゑ制札といふは辨慶れ大ひなる龜なるへし又所無も所務なり辨慶ゑ三塔にてゑ博識たる人には似合さるへし

攝津徽書　一ゑ谷落城ゑ壽永三年二月七日なり何そ櫻ゑ花咲くへき時節にあらす謠に出せる故俗誤をり又辨慶か制札を見るに此華江南所無也云々此花江南れ所無とあれは是櫻にあらす梅に立るれ高札なり又曰薩摩守ゑ平家の大將なり寵愛の櫻源氏方の武藏坊辨慶なれゑ一枝をきらゑ一指をきるへしといふ高札をなんそ立へき理あらんや俗語誤れり案するに境川の西播州の分に梅の鼻といふ所あり此地甚名物にして二月七日の頃あれゑ梅花は盛なるへし辨慶此梅か鼻の梅に立たる高札成へー故に此花江南ゑ所無

と書り此制札須磨寺にある故若木の櫻の高札なりといひ傳へしか甚非なり然れともかく改む時と風雅なし（此花江南云々れ前書きに嫩木櫻の三文字あるは此說遽かに信すへくもあらす）

本朝俗諺志　當寺に武藏坊辨慶當山の花を制すの書に曰く此華江南云々右自筆なと至極能書也ける

諸國里人談　一年攝州須磨寺へまかりけるに什寶數盛の鎖青葉の笛若木の櫻の禁制と辨慶の筆を殘せり

播磨名所圖繪　辨慶の筆若木櫻の制札あり

といへり

諸書斯の如く辨慶を非難ま或は辨護せしも辨慶の筆にあらすといはす然るに四五年前史學會場に於て重野安繹氏は辨慶と題し左の如く演へらる

彼の腰越狀と如き若木の制札の如きは其の擬物たると已に故人の定說あり

編者と其の質問をなせしか史學雜誌第四十一號の紙上ゐ於て同博士れ解答に接しぬ第一に新編鎌倉志鎌倉攬勝考十新編相模風土記稿百五平泉雜記二等より例證を揭けて今腰越村滿福寺に存せる腰越狀は辨慶か筆ゐあらさるこをを明かにし次に前に載せたる攝津名所圖會の論難殘かゝけ終りに

平泉雜記四

辨慶筆跡

攝津須磨寺の寶物の中に、辨慶か筆跡とて古き制札あり、其文章に曰

此華江南云々下略

壽永三年二月二日

一書に辨慶は廣才にして智慮深し、行狀みな人知れり淸貧ゐして今に殘れる文書多くは鎧馬具等迄借用るれ狀也

鎌倉實記の作者評ニ辨慶ニ曰辨慶か武勇天下後世に至て童子婦人まて辨慶と稱す此亦其實なきと有へからす然其義經起兵と初より

今日に至て辨慶か勇力武功れ事實を記しる

る實錄を見す博識の人を俟て可し散し疑也

されは櫻の制札なると梅の制札なるとに拘はふす誤字と非難も還つて博識れ辨慶か筆にあらさること殘證するものとなるへし

西月翁句碑

須磨寺大師堂の前にあり門人の設けたる句碑なり

ふる雨もまみすになるや花の奥　西月

翁は尾州名古屋の俳人なりけるか此里に來り東須磨警察署と東濱邊と毘沙門堂に住ー（此堂今は見へす）須磨燒なとを嚮きける事は須磨燒の項に說けり墓は平松原にあり前後の項にも載せたる翁の發句一二を記るせは

元日や旅人はわれ須磨と云ら

池水に輪をなす　花　の　雫　哉

おもまゝわき雲也月の走り入り

上　野

須磨寺の西東より鐵枴山の麓まての田野にして月見の臺の名ありと傳ふれともとと今字上野と呼へる內裏跡の邊をのみ上野と云へるものゝ如し上野の雉子薄雁月時雨螢郭公櫻は和歌の名所なり

須磨記　上野の岡といふ所何かまの寺あるよし云々

笈の小文　卯月中頃の空も朧に殘りて果なき短か夜の月もいとゝ艶なるに山は若葉に黑みかゝりてほとゝきす啼出へき東雲も海の方より白らみそめたるに上野とれはしき所は麥の穗波あからみあいて漁人の軒近き芥子の花たえ〳〵に見渡さる

海士の顏先見らるゝやけしの花　芭蕉

須磨名所記　一の谷二と谷の間に平家諸勢こもれり爰を須磨の上野といふ

所歷日記　二の谷の間二町餘此間道より十間程上は皆野なりきゝす鳴也と讀し須磨の上野爰なるへし

承應四年記　一ハ谷ハ間に平家の軍勢屯する由此所須磨の上野と申なり

遊方名所畧　八部郡須磨上野有傍駒松里南濱也云々又須磨後山前海其中之里云上野又行平所遊上野里也

攝陽群談　安德天皇遷幸陣所須磨上野の地にあり

攝津微書　内裏跡は須磨の上野にあり

須磨浦古跡記　山そはに見へ渡る野をすへていふ

攝津名所圖會　須磨の里ハ山組にある田園をいふなるへし又内裏跡ハ項にこゝも須磨の上野といふ

播州名所巡覽圖會　須磨上野かみハ野一面の名なり古歌あり

此地は壽永の古戰場なるのみならす建武の兵亂にも足利直義等か戰場と爲りしは太平記を見て知らるべし

太平記　（松岡城周章の項廿五卷）

蓑を身に纏ひ福良の渡淡路ハ迫門を船ゐして落つる人もあり或は草苅をハこに蓑をつゝ竹の簀を肩にかゝ須磨ハ上野生田ハ奥へ跳にて逃くる人もあり運ハ傾なれとも臆病神ハつきたる人程見苦しき人はなし

兵庫海陸寄手の章

又須磨ハ上野と鹿松岡鵜越ハ方より二引両四目結直違左巴倚せかゝりの輪違五六百流差し連ぬて雪霞の如くゐ寄せかけたり海上ハ兵船陸地ハ大勢思ひもよりも霞くもて聞きもにも猶過ぎたれと官軍御方を顧みて退屈もてそ覺ゑける云々

正成兄弟討死の章

左馬頭ハ兵ともを菊水ハ旗巡見てよき敵なりと思ひけれは取籠めて是を討たんともけれとも正成正季東よと西へ破りて通り北よと南へ追ひ靡けよき敵と見るをは馳せ雙へて組みて落ちてと首をとり合はぬ敵と思ふをは一太刀打ちてかけちらす正成と正季と七

度合ひて七度分る其心偏に左馬頭に近つき組んて討たんと思ふにあり遂に左馬頭の五十万騎楠か七百餘騎に懸靡けふれ又須磨の上野の方へそ引返もける云々

新千載　波かけぬ須磨のうへの露にたに　淨海　法師
　　猶もはたるゝたもとろも哉

鈴舟のよする音にや騒くふん　顯昭阿闍梨

閑白内大臣家歌合　須磨の上野にきゝすなくあり

風早み上野の尾花をきふすを　上　總

須磨のうら波たつのとそ見る

月にふゝ須磨の上野の秋の風　似　雲

尾花のおみにはゝくうらなみ

上野夏草（八景の一）熊谷　荔齋

野開一面接天長、千草鮮榮生霑香、風度自南吹彼綠、炎雲消郤逸懷涼、

後北山

上野より北の方背谷高倉柴山因幡おと唱ふる山々を總稱もて後の山といへり

遊蠶勝記　須磨寺ハ參詣すきは若木の花と散果て後の山と草茂りぬ

攝陽群談　因幡山の項　民家巡以て一名後の山と稱す行平卿の配所に准へ世俗松風の謠に寄て號之或と月出る後ハ山なんと須磨の庵に結ひ讃める歌を取て歌の名所とす其證不詳凡て山の前に居て之直に山ハ後とするものか遠山松ハ項に因幡山後の山なんと云も此邊にあり

源氏物語　煙いと近くとき〳〵立くるをこれやあまの鹽やくならんとおぼしわたるとはします後ハ山にしはといふものふするなりけりめつらかにて「山かゝのいはりにたけるまは〳〵もとゝひこなんとふる里人」

兵庫名所記　須磨寺の山の上なり

攝津名所圖會　上野より北手の山を凡て後ハ山といふ土人の稻葉山といふも此中にあり

夫木　月出るうしろの山と雲はれて　家　長

千載　須磨のいはりにかへるうら風

問人のれもひよかしと柴菴の　爲　尹

うしろゝ山にみちつけてけり

此歌一書ふは「柴の巷の」「みちはてきにけり」とあり

後山歸樵（八景ゝ一）　熊谷　荔齋

前水後山歸路遐、翠嵐掃跡日將斜、樵蘇自業風流事、秋憩楓林春坐花、

馬塚

上野新池ゝ西にあり近年まて小丘ゝ上に藤原守忠度愛馬之墓と刻したる石標ありし由なれと今ゝ其跡詳ならす

綱敷天神社

千森川より二町餘り東に老ひたる松の林ある所なり天神社ゝ西字下宿の社は東向諏訪明神を祭れり又境内の東ゝ隅に松ゝ切株あるは天神松なり

須磨記　淡路島もはるゝふ見わたさるゝにはや走らせ一舟も須磨の關近ふちかつけて

あん涙山をれこゝ志くゝ志ふあとといふうろくつのおさもこゝにあふはれぬへくれとろ〳〵一うゝみなりてまつ此浦にとからうゝてつくふいかりといふもの塩さへいつちとらをてゝあやうきとたとへーなゝ爰につきぬる日はゝや夕日西にかゝやくゝとゝもゝ侍らねともあみのゝこりもはれゆくやうあれは云々

攝陽群談　綱卷天神社須磨村ふあり祭神菅公也筑紫に向ふ時此濱ふ於て船を留む漁者船人纜を曲て遷座なさゝめ暫く當浦の景色を令ゝ見ゝなり時ゝ人其神像を寫し祭を綱卷天神と稱す今ゝ世に畫工の所ゝ作因ゝ之

兵庫名所記　行平松ゝ西菅相公を祀ふ申社なり筑紫に赴き玉ふ時に此浦に船を留む漁者船人纜を曲けて遷座なさしめ暫當浦ゝ景色を詠め玉ふ時の人神像を寫ゝ祭て綱卷天神と稱す

須磨浦古跡記　綱敷天神とも又一夜白髮の天神とも申ゝ菅公筑紫へさすらへの時波風

荒く辛うしてゝ此須磨ゝ浦にあらせ玉ひゝに浦人あみゝつなを敷て奉れるふ座し玉ふ又白髮とゝさなきたに心苦志き御旅に斯る波風の憂目にあひ玉ひ一夜に御くしの白くならせ玉ふとかや云々

攝津志　須磨神祠西須磨村今稱綱敷

播州名所巡覽圖會　綱敷天神所々ふ多ー

攝津名所圖會には綱卷天神綱輪天神の名ありと見ゆ

案集に陸子の繪に須磨の浦の歌書たるに神の社の寄行濱の高けれはたよせろ御てくら祭る所を讃める

たよ世とは思はさふなん滄海の　慮惠法師
　　斬るこゝろは神そ知るらん

白波の色にみまかふゝてくらを　同
　　たよせにうけよ神のこのかみ

漁ゝ舟ゝ大つなくりよせて　松原貫速
　　いとひまし〳〵もあら波の爲め

君この爲ふこたりまさす御心を　同
　　つくゝ志れ空ゝ旅路なれとも

天神松

攝陽群談　須磨村民家より南海西の方森ゝ中にあり俗傳に云く菅家筑紫に遠流せらるゝ時此濱邊ふ船を留め風波ゝ難を凌く纜を此松の下に曲て坐する事暫くあり仍て以て天神松と云ふ其後夜々に海中より燈を捧く此故に一名龍燈の松ともいへり

今は影向の松とも傳ふ龍燈ゝ說は筑紫より附會せるものなるへー

諏訪社

須磨古跡記　濱邊乃森にあり祭日霜月八日也村民獸肉を食する古式あり長田神と此神は須磨ゝ浦ゝ大昔よりの靈社ふーて長田の神は漁を守り給ひ此神は山狩りを守り玉ふ此二神は山海の守り神也此社を世に東向ゝ諏訪と云ふ

須磨名所獨案内　祭神は武甕槌命勸請の年月詳ならす本社東に向へる故に東向の明神

と稱へ有名なる當村れ氏神にして近村近郷より參詣あり云々祭典は毎年舊七月廿七日須磨ゝ意解の項に諏訪の社あるを以て此地を諏訪と云ひしかと後代諏訪を轉訛して須磨とありしとの傳說を載せたるは此社ゝ事なり

現光寺

千森川れ東街道の側ゝ一段高き地にあり直井元介氏ゝ手記を見るに

康永二年大内伶人紀州日高城主湯川安藝守族將監敎方者授於本願寺第三世主覺如上人化剃髮染衣住此村焉蓋攵之舊地也乃於光源氏藩架建立小宇號勸堂因是本願寺贈南無阿彌陀佛一幅曰永以爲本尊焉其後永正十一年始稱中興僧淨敎繼之云此歲地大震勸堂破壞始移現光寺以爲寺號云　又天正七年瀧川一益贈井戸之庄建禁札於此寺云々　或傳往昔稱聖源寺寛政九年改聖源寺爲現光寺閏七月廿七日使僧了瑋入于此寺云々天保四年遂逝丹治了敎繼世以至今也云々貞享二年門徒清左衛門孫左衛門再建之云々

須磨名所記　光源氏の配所は道よりすこし北ゝ方と云傳ふ

名所方角抄　源氏れ住玉ひし所と宿より南海きわにうちあかりたる所あり宿を西へ濱に出きと南に岸の高くある跡也

攝陽群談　光源氏舊亭須磨村にあり俗傳ふ云く光源氏の君須磨明石の景色にまとひ暫く爰に春秋を送り給ふれ古跡也と云へり源氏須磨明石の卷に因る歟其證不詳

遊方名所畧　醍醐帝皇子右府源光所住里南海濱西高岸是也

續後拾遺　源氏の住玉し所は宿より南海際ふ打勝りたる所さり宿を西へ濱に出れは南に岸の高く有所也

遊覽勝記　光源氏の舊蹟は卽今れ源光寺是きなりといふ

攝津名所圖會　按するふ西宮左大臣の謫居の地か

右ゝ諸書といつれも源氏物語より出たるもれにして同物語ゝ光源氏は西宮左大臣をさせるもゝなりとと古へより傳ふ所なれは同大臣の跡なるへ一側ゝふ檀跡なと云へる地あるを以て源氏陣所の跡なりと云へるは非なるへ一僧願正住職の時火災に罹りたる由にて建立後五百五十余年の古寺なるに什物と一て傳ふるものはたゝ桶の如く板片を以て合せたる塗太鼓あるのみ次に記るせる一書を以て直に此寺なりと云ふにはあらねと聊か疑存ふるを以てこゝに掲けて讀者の敎を竢ゝ

巴戟天主人　須磨れ源氏寺八犬傳の古跡なとはいかにもありなん身大臣の貴きに上り國家の重きに關したるわとをも考へす一時ゝ便宜にそを抹殺するか如きは祖先に對する吾人の義務を失ひ國家の長計を考へさるとは甚しと云はさるへからす

似雲風月庵乃跡

同寺境内本堂の右に方り近年まて似雲の寓せし風月庵あり一由なれと今は石ふ系を建てゝ舊趾を表せり其の碑のうらにいつこもと云々の和歌あり一書にと此庵もと上野にありたを此に移せるものなりとゝのり似雲は廣島の人也和歌に長たる天下を歷遊するを以て樂みとせたは今西行の綽名及ひ伊勢桑名の海に和歌を讀みて難を免れたる一話ふ依て明かなり延享四年の頃此浦にゝのりて鹽濱の再興を謀りたかといくはくもなく又もたはの煙絶へたれは身に捨しむまたこり須磨にやく鹽の煙りもたへたは跡の浦風と詠して此浦を去りしか示寂地は泉州蹞尾村にて墓は河内國弘川ふあり

須磨浦古跡記　似雲法師といへる人菴をしめて住せり

前田小右衛門氏が磯馴味噌の添書の中に上野の小松原に餘波を留光給ひし似雲法師の云々

播州名所　源光寺境内ふ小菴遺れり

芭蕉翁句碑

同寺の門前ふあり裏に見渡せはるかむれは須磨の秋の句をしるせり翁の此里に來りしは四十五歳頃と思はる

播州名所圖繪　芭蕉翁句碑源光寺の門前にあり近世豐後の俳士芳蘿坊これを建つる

橋本海關

道衣遺世送餘生、隻字微吟善寫情、雖識芭蕉秋夜雨、古來滴作一家聲、

須磨乃關屋跡

現光寺の邊茂藤架（マセガキ）と云ひ道茂挿ひて南に一堆の臺あるを樓跡と云へり此邊より關守神社の地まて茂關屋跡と云ふ傳ふまた所傳に今路傍ふ建てある石碑は三四十年前現光寺の裏より堀出せし由此石碑を見るに一面に「川東左右關屋跡」と記せりしかし關屋跡に東西の両説ありてこれか爲に攝播の境茂も誤れるとは須磨の位置の項に記るせとも両所何をか是ならむたゝ諸書を掲ゲて讀者の參考に供ふるのみ

紀聞集　三十七代天智帝時置四境關鈴鹿關在近江伊勢逢坂關在山城近江境龍田關在大和河内境須磨關在攝津播磨境

所歴日記　關屋茂跡と云ふ所二所ありちもり川茂東道より南と鉄枴峰茂下なる山と也海路茂關なれは浦近き所なるへし

顯昭阿闍梨　攝津國播州境に關はあれと須磨は攝津茂國れ方なり

名所方角抄　須磨茂關屋といふは今之はりまのうちと見へたり歌にとたゝ須磨あり

兵庫名所記　須磨茂關屋須磨寺馬場先在家西川端左右の高ミ也

須磨古跡記　ちもり河の左右の臺なり

遊臺勝記　須磨關と其臭廢史籍所見なし唯和歌に因て其梗槩を知るれと今茂關屋村あと云ふと其名の遺れるにや又爰ミ關屋の跡とはかりいへと此頃と荒たる板屋たになくまいて守人もなかりき

攝陽群談　須磨關矢田部郡須磨村にあり

遊方名所畧　須磨浦東西二里間其西際古有關所此云須磨浦關

須磨名所記　須磨茂關屋茂跡濱須磨と西須磨の間川あり此川の西北の方に在り

攝津志　西須磨村戦延喜式關趾尚存

播磨廻　須磨の關屋南の馬場崎川瀬乃左右及ひ高見をいふ也

細見記　須磨寺門前を右へ砂川を渡れは左の方に天神の森須磨の關屋茂跡あり云々敦盛討死の處五輪茂石塔義經腰掛石あり此邊惣て右と山左は海にて波うち際ふ道あり最西國茂關所といふ淡路島手に取る如し「淡路島かよふ千鳥茂鳴聲ふ云々」とよみ玉ひしも此邊なるべし

攝津名所圖會　延喜式出古跡源光寺茂西街道茂左右に一堆れ臺ありこれをいふ（上野圖書館の延喜式に欠本あり關屋茂項見當らず尚は四版を期して記載すべし）

須磨乃月

此浦は遊方名所畧に云へる如く天下風月勝地なり中秋茂月を賞せひとて今も尚は兵庫神戸若くは大坂京都よりわさ〳〵來り遊ふもの數ふれす月見臺茂名ある上野茂臺ふ登りて眺ひれは盆大の月は波間より湧き出てゝいと廣き青海原も殘る隈なくきら〳〵しきと黄金を散そか如く淡路島わたりに浮へる小舟まてさやかに見ゆる景色茂幽秀にして清麗なる石山田毎年との及ふへくもあらす祭式部と石山寺に籠り中秋の月湖水にうつたりるを見て水想觀を成就し自然智を得て源氏物語を作れる時須磨明石の卷より筆執り始めしとなりかくも此景の式部か心茂醉はしめたる茂見て其茂風光れ常ならさる茂知りぬへ一播州名所圖繪ふ須磨明石と日本の美景昔より古詠多し殊に月をもてあそひて秋と殊さらに掉さし一度たに騒人茂筆を採らさるとなかりき其昔の有樣と源氏物語須磨茂卷茂文体に見るへし是作り物語にまて事實茂證には取かたまされとも景地乃

樣を書きたには逢ひ侍らすと實にさあり編者と式部か須磨に月に對して書々る節々を掲けて讀者に便に供へむ

明けぬれと夜深く出で給ふみ有明の月いとをかしう花の木ともやう〳〵盛過きて儘なる木陰にいとれもたろき庭に薄く霧渡りなるそこはかとなく霞みあいて秋れ夜の哀に多くたちまされり云々　月いとあかうさえ入りてとかなき旅のれまた所と奥まて隈なき床の上に夜深き空も見も入方の月すこく見もられに唯これ正に行くなりと獨こち給ひて「いつかたの雲路にわれもまよひなん月の見るらんこともはつかた」とひとりこち給ひて例のまどろまれぬあか月の空に千鳥いと哀れになく云々

詩　歌　須磨の關及ひ月

事更にこの一項を設々關及ひ月の詩歌を併せ記せたは古人既に關屋の間月とて八景の一に數へ古詠亦關屋の間月と題して讀まれたるもの多くして詩歌を掲くるに月と關の二に分ち難けれとあり

金葉　淡路島かよふ千鳥なく聲に　源　兼昌
玉葉　淡路島とるかに見つる浮雲も　家　隆
千載　播磨路やすまの關屋れ板ひさし　師　俊
　　月もれとてやまとらなるらん
　　雪のもる須磨に關屋の板ひさし　定　家
定家々隆歌合　わ者ゆくつきもひかりとめ者り
　　須磨に海士の馴にた袖も鹽垂て　同
　　せきふきこもるあきに浦風
　　すまに浦や波に面影立そひて　同
　　關ふきこゆる風と悲しき
影供　宿とはん人にもかくや須磨の浦　同
　　せきふにこゆる秋のはつかせ
新後拾　旅寝する夢路にたへぬすまのせき　同
　　通ふ千とりのあけはのゝこゑ

須磨れうらへ岩打波の聲はして　土御門院
　　人を止むる關はなかりき
新古　れまれ關夢を通さぬ波れ音を　慈　圓
　　おもひもよらて宿をかりけり
三輪山老等宮川歌合　朝思ふ須磨れ關路の貸まくふ　素　昭
　　はめをとをすなみれまゝかな
慈鎮和尚自歌合　月澄てふくる千鳥れ聲となり
　　こゝろくたくや須磨れ關もり
打よする波に有明れ月さへて　釋　阿
　　秋やかおしきすまれせき守
山風に浦傳ひする紅葉かな　實　定
影供　いかゝはしへきそまれ關守
　　うら通ふあき風淋しすまれ關　源　通　具
　　ふきこす涙れたとにつけても
時しもあれ秋の旅寝を須磨の關　沙　彌　釋　阿
　　身にたむかせのかへるたふ波
　　忘れなん思はしとすれたいとまる　頓　範
　　須磨の關屋の秋かせの聲
關の戸も雪より明て須磨の浦や　堯　尋
後京極殿自歌合　猶雪ふかしあは路しま山
　　須磨の關ふけ行波の浮枕
　　ともなふ月ろ浦つたひぬる
　　秋は尚すまの關路の夕まくれ　藤　原　季　景
影供歌合　うらふくかせのなみのねとまて
　　關守のまさもとへなる衣てに　女　房　越　前
同　いたくなふきうすまの秋風
　　もしはやく烟も霧に埋もれぬ
　　すまの關屋の秋の夕くれ
地下歌合　須磨の浦關の旅人とまるまて　讀　人　しらす
　　なみなりかへる夕あらしかな
旅人と袂涼しくなりにけり
　　關ふきこゆるすまのうらかせ
　　一條兼良と花鳥餘情に關吹越る須磨の浦風の歌は壬生忠見か集に侍るなり行平中納言の歌の由此物語に載たりゝるを續古今に源氏に本つき卽行平の歌と入たり儘なる忠見か歌にて侍る○源氏物語　須磨にはいとゝ心つくしの秋風に海は少し遠

けさは行平の中納言の關吹き越もるといひけん浦浪よる〳〵は實にいと近く聞へて又おくあはれなるものゝかゝる所の秋なりけり

月澄てなきたる海のれもてかな　西行法師

雲のなみさへたちもかゝらて

月宿るもゝはの袖を人とはゝ　源通光

わふとこたへよすまのうぶなみ

夜を寒みけさの入江に立千鳥　公猷

そちさへ氷るつきになくなり

和田の原をさの浪路を見渡せて　經尹朝臣

うらつたひして月もやとゝる

消ゝてぬ須磨のもしほの夕烟　前座主

月ふうれしきあきのうらかせ

鑑葉　月ならてすまのせきもる友そなき　寂蓮法師

しはしな過そあまのつけふね

同　假初に關もるよはの寢覺まて　同

そてふれわたる須磨のうら波

爲尹卿千首　月陰のすまのせき路ふみあくかれて

亀山殿七百首　なか〳〵人やとまらさるらん

昔より須磨ゝ關守せきとめて　亀山殿

あきゝ月夜れなかきなりけり

内裏名所百首　もしほくむあたりの空の月影に

ゝゝむりをとめよ須磨ゝ關守

同　月もられ風も戸叩々須磨れ浦の

あれたる關屋あきにまのせん

爲忠百首　雲井より歸る雁をゝ止めねと

我ためかたき須磨のせゝもり

同　なのりして古里へゆく雁かねを

なとかとゝめぬすまゝゝせきもり

後成五社百首　聞渡る關れなかにも須磨ゝ關

名をとゝめけるなみの音哉

最勝四天王院障子和歌　もしほやくすまれ關守我からに

おはれもひそふ秋ゝゆふくれ

同　朝なきに習はぬ波に夢も見す

なれなゝいかにすまれせきもり

樓門葉　心なき蜑となともすまの浦ゝ　權律師兼覺

もしほゝやかて月をこそみめ

藤葉　須磨れうらや瀧くむ蜑の袖にのみ　邦省親王

よおゝ〳〵やとる月のかけ哉

爲家卿千首　播磨路の須磨の關屋は荒にしを

板間の月そひとり漏りぬる

師兼卿千首　すまの蜑のもしほれ烟り立登り

月もまとをゝゝ袖ゝ秋風

内裏名所百首　すまゝゝ浦蜑れ戸渡る雁かねれ

こゑすみゝゝ鳴るいさよいれ月

同　久かたゝ月澄よはゝすまのうら

あきおきなみに秋そみえける

同　すまゝゝうら瀧くむあまの衣手に

濡てそやとるありあけゝつき

同　月影を秋とやこのすまの蜑の

鹽くむ袖の波にぬれても

同　秋よまた月ふ幾度もゝはたれ

たえぬなかめそ須磨れうら人

同　すまゝゝ浦ゝ蜑のたくなは暮行と

人とたのめす月そ待るゝ

最勝四天王院障子和歌　すまの蜑のしたれ衣うちはへて

同　來てはなとみぬ波れ月か影

定めおき心一つをすまのうらの

月にいてたるあきのあま人

同　あきの夜ゝ重て袖も朽やする

月をの〳〵見る須磨ゝ浦ひと

同　須磨のゝらになか雨あかす晴に鳬

月は西へもいらぬ物ゆへ

慈鎮和尚自歌合　人こふる我眺先よとおもひ鳬　大乘院

須磨の關屋のゝり明のつき

浦つたふ月は明石の空はれて　藤原忠良

なみにあきふく須磨のゝはかせ

永福門院百番自歌合　月ゝゝや遠島影にかたふきぬ

しゝしとゝめよすまのせゝもり

なかめやる心いつくに通ふらん　藤原公經

もろこーまてもすまの月かゝ

冴のはる須磨ゝ浦ゝの冬の月　家隆

關ゝもしほのけむりたにおし

すまの關波風寒みそよ千鳥　後成卿女

ふけもくつきにこゑうらむおり

須磨の浦に秋を止めぬ關守も　藤原信實
のこる霜夜の月はみるふん
そまの浦や蜑とふ雲の跡晴て　後堀川院女房
なみより出る秋の夜の月
幾歸りそまの海士人我ための　爲家卿女
あきとはおしゐ月をそるらん
月すきはのたに過行人もあらし　實持朝臣
こよいはたゆめ須磨どせきもり
和田どの原八重どの汐路に雲消て　兵部卿有教
月ぶみ代ほる須磨のうらかせ
廿六大歌合
あきどの夜はすまの關守をみかへて　通成
月やゆきゝ代人とゝひらん
久方の月に夜船もいてやらて　沙彌禪信
なみふきよするすまのうら風
すまどの浦や遠き汐路の波の上ゐ　源資平
明かたちかくやとる月かけ
すまのゐのまほ汲袖に宿る月　關白
とてとけふりのくもるなげけり
もしほやく煙をすまの浦人や　大僧都義觀

みるめも月にまとを成ふん
月にうき煙をまたやこりすまの　前大僧正義
海士のーとさももしほやくらん
鹽々ひと思はぬ方に疊らーな　沙彌春譽
なひけは月のそまのうら風
かたみとて殘す鏡をすまのうらどの　釋正廣
波より出す秋代夜代月
月宿るもしほどの袖を人とゝ　源通光
わふとこたへよすまのちふなみ
地下
人どの世と幾代變りてなみなれむ　直繁
月とひかーもすまのせき守
すまれ浦や蕩盡れ煙り風はらへ　直家
なひくにくもる關乃月影
外としも明石の名をとしらしかし　隆信
月にこゝろをすまれうら人
とりま潟すまどの月夜どの空さめて　前參議親盛
繪島かさきにもきふりにけり
源氏物語
とも千鳥もろ聲ふるくあの月は
獨り寢さめ代床もたれも

立つゝく松の煙も薄墨どの　紀綱
ゐーまか磯ゐくるゝ夕波
須磨の浦傳ひ往かふ人々よ　松原貴遠
開け行世に關守もおし
月かけも須磨代浦波のさゝ波ゐ　三宅三枝子
聲打そへて千鳥なく也
關守も絶てし須磨の浦千鳥　黑木茂矩
誰に寢さめをせよと鳴らん
須磨代浦關屋は絶て淡路島　益清亭成齋
昔しに通ふさよ千鳥哉
さまくどの虫代音高く月さえて　何多仁子
心すゝしきすまれうみへや
あや錦れり出そかと思ふまて　同
月影きよきすまれうらなみ
書くともおよはし秋代月影に　同
あやおり出すすまれうらなみ
月の照すまれまさこを踏分て　同
きよきこととれたまをひろとん
歸るべき時は來たれとすまのうら　同

月にこゝろれのこりぬる哉
松の葉に置たる露のまらたまを　同
ゆきの雪とれもひゝるかな
桜風に雲はふとせてすまの浦　同
ひかりをはなついさよひ代月
すまの浦ちりも疊ぬ月かゝに　同
れきの小舟の數そしらるゝ
すまどの浦月の夜ごろの景色をと　同
いひつくすへきことどはもかな
高殿のをすかゝくれは月影み　同
須磨や淡路のはて迄も見も
鹽みちて月影清き須磨代浦　同
舟みのりてもみまはーき哉
舟子ともから櫓はやとなさやかなる　同
月に明石の浦つたひせん
數つめし玉代上ゆく心地ーて　同
眞砂に清き月を見ふ哉
須磨の浦濱代眞砂を白金の　同
玉になしても照らす月哉

雪に問ひ花に契りしふる郷とて　同
友なつかしき須磨れ月影
須磨の浦にかりすまいして淡路島　同
由良とて港を月に見る哉
月清く岸とて松風音たてゝ　同
心も須磨のやとと楽しき
須磨の浦月の夜ごろはたのすかふ　同
ことのもさへも浮ひ出なり
須磨の浦にかゝり清き秋の夜の　同
月を殘して歸へるわびーさ
須磨の浦夜毎になれし月影の
あとかゝかりに樂しかるふん
あすかとくたんとたもくは須磨の浦　同
今宵とて月にねられさりなり
鹽垂るゝ蜑となりても秋毎に　同
飽迄見たき須磨とて月影
海人も舟漕きやめて眺ひらん　福岡　片岡芳昌
須磨の浦わの秋の夜の月

須磨の浦や波路ふるかゞ見渡せバ　東京　吾妻春子
霞みて遠ー淡路島山
須磨とて浦や霞れ底に聲すなり　上毛　萩原精一
釣する海人や漕き歸るらん
風そよ〳〵須磨の浦わの夕波ゞ　岡山　石川糜山
聲抒そへて千鳥なく也
立ならふ松の木の間に月澄て　筑前　片宗稻直
漁火遠し須磨の浦波
たり〳〵に打ち越す波の白き哉　東京　蔓月
松よりこめし須磨の浦霧
見る内に月沈みけりすゑの雨　關更
名月に旅たつ人はすゑへかな
中〳〵の景色は茲そすゑの月
后の月すゑより人の歸り來る　士朗
ふたゝ出んとの言の葉や須磨の月　紀州　滝列

關屋跡

いそ際や柴山子もたゝぬ砂畠　露城

松影を離れてひろー月のいそ　露城
浦ひとは寢たり靜に月のすむ　同
居所のすゑも忘れてけふの月　同
月のみを名所土産や須磨戻り　大坂　笹の家
梁川星巖
六幅高帆十八洋、舟師乘夜大怒忙、須磨明
石佳風月、枉付蓬窗夢一場、
藤井竹外
行盡攝山望播山、貪程夕過亂松間、一聲漁
笛不知處、月白須磨灣又灣、
關屋間月（八景とて一）渡邊林菴
月滿江村風淚收、皎然心境別清秋、秋光底
惹征夫怨、說無姮蛾解旅愁、
北條霞亭
往事悠々何處尋、不知人世幾昇沈、須磨關
外秋宵月、一片清光千古心、
村墟人定砧聲起、沙步禽呼波響幽、誰知須
磨今夜月、天涯孤客不禁秋、
丹羽花南

夕陽吹恨落微波、村雨松風夢影多、水佩篇
々人不見、消魂月上古須磨、
卓齋
夜色茫々不見山、水禽鳴度海雲間、客心寄
在一痕月、舟泊須磨茅蔑灣、
氏名不詳
前是滄溟後是山、須磨晩景海雲開、思往
昔流遷客、暫爲明月來此浦、
何禮之
老樹陰森野寺隣、漢關遺跡已成陳、沙禽掠
水鳴寒夜、無復戍樓欹枕人、
深井飯山
滿目江山望欲迷、興亡一夢轉悽々、最憐明
月無今昔、又照征帆向鎭西、
赤松松亭
此地從來月有名、何須戰迹嘆榛荆、行程未
晩先投宿、爲賞金波一夜清、
桐山龜江子
積水連水眼界空、扁舟回掉對清風、一痕明

月須磨浦、十里松青沙白中、

須磨江隱江

所傳に現光寺の西北の田圃を指して隱江の地なりと云へど今審かにしる由なし

攝陽群談　須磨の入江須磨村にあり海浦に同し隱江同所の一名とするか

攝津名所圖會　古跡源光寺の西にあり今は田圃となりて名ばかり殘れり

須磨古跡記　今は田地となる大もり川の邊也浦海と同しきものとせは古へはこの邊まで入江なりしなるへし

万葉
こりすまは隱江に生る浮草
うき身にもの思れもふまろかな

六帖
おもり江に隙なくうきる浮草の
きなくそ人はこゝしかりける

千森川

關屋跡の西ばの小川にして源を青谷山より發し東須磨の境を流れ字須磨寺門前に至り高倉山の流れと合してこゝに流る渡せる石橋を關守橋と呼ぶ末流の橋を路守橋といひし由ひゝ濱須磨中須磨と云ふしと此川を境とせしなり壽永の戰ひに一ば谷城と此川を外據となし一の谷を內據とせり云々川の北の小高き岸を櫓跡と呼へるは當時東門の櫓跡あり云々又傍ら字新田と文祿年間に村井氏の埋めたる處にして其ば東は端は濱濱れ蹟あり云々の所傳あり併せてこゝに記しおきぬ

播州名所巡覽圖會　遊羅川須磨山澗より流るゝ關屋舊跡西にあり其由緣をしらす

所歷日記　ちもり川

攝津志　遊邏嶽源自須磨山澗流注于海

遊囊勝記　乳守川

攝陽群談　通盛川此所壽永年中ば戰場たるを以て越前三位通盛の名あり土俗上畧して血盛川と稱す

攝津名所圖會を見るに千鳥路守關守と書し兼昌の淡路しまかよふ千鳥云々の歌に基き千鳥川眞なりと云へり今い千森と書けり或ば千守と記す

磯馴松

この浦の濱松をいふ

攝津徵書　そもれ松とば磯馴松ば畧語なり

名所方角抄　そなき松は里より南濱邊に有之

遊方名所畧　傍馴松八部郡須磨上野有傍馴松里南濱邊也一云形見松一云舊蹟松行平左遷時二妾一號松風一號村雨此須磨浦蜃女也行平寛平五年卒後二女追念不止掛形見物於此松常見之故云爾於今存

遊囊勝記　磯馴松といふは總して此磯の松也又俊頼乃須磨ば浦や渚に立る磯馴松下枝い云々里より南濱邊にあり

本朝俗諺志　磯馴松は一木にあらす此浦邊の物名也是も行平卿の歸落をれーみて枝葉みな東へ垂れ幹また東へかたふきあり

攝陽群談　東尻池村にあり並木の松ば總して云へり行平卿須磨に配流せられしを以て袖馴松とも云ふと云へり

須磨寺開基記　行平臨別手栽松樹以志之曰磯馴松至今猶存焉

諸國里人談　須磨の磯馴松と云は此浦の松ば總名也昔行平都へ歸り玉ふ時此所の松名殘を惜ーみ枝葉都ば方へ垂ると云接此地常ふ西風强き所なれは砂地ゆへ東へ吹きのたひくるもば也

須磨浦古跡記　總て須磨の磯邊ば松をいふ

播磨遇　東須磨と西須磨との濱邊れ松ば云ふ

攝津名所圖繪　都て須磨の浦の濱松を云ふ

播州名所巡覽圖會　磯馴松と何れふも磯に馴たる松をいへり此所に限る可かふす

この外攝津名所圖會にも本朝俗諺志諸國里人談と同ーく廣異記より出てたる牽强ば俗傳を

戦す片見松袖馴松など云へるは衣掛松といへると同く謡曲より出てたるもれなり

（摂津名所記）

すまのうふや渚に立る磯馴松　俊　頼

たつえは涙の打ぬ日そなき

須磨れ浦や磯邊の松も袖れ宛　少兵衛督

（摂津名所記）

磯馴松か枝の千歳をまたて枯ふ鳧

それもつねなき風や吹らん

仝

面影を月に殘して須磨の浦や

夢路ゆるさぬまつかせけてえ

もーほくむ須磨れ浦わの磯馴松　橘　道　守

からくも獨り千代やへぬらん

渡邊林菴

松頭逸韻卽笙簧、海若泛兮仙鶴翔、自是清風存大雅、正聲今尙不微茫、

何　禮　之

松青沙白幾灣環、十里晴波鷗夢閒、歷々人家師指顧、夕陽斜照淡州山、

（摂津徵書）

滿潮や濤とつかとあふまつのかけ

村上帝社

千森川の西側にあり

摂津名所圖會　土人云昔太政大臣藤原師長公と琵琶れ達人にて渡唐ーー妙手を得んとて絃上れ名弦を携へ此浦まて來り給ふを村上天皇梨壺皇女れ靈魂現れことを止め龍宮より獅子丸といふ名弦を捧けーかとこれにて天皇より妙手を授り入唐をとゝまり賜ふとなん絃上といふ謡曲の趣を聴にいひ傳へり其證詳かならす

摂津名所圖繪　村上帝の靈蹟千鳥川の西端にあり上に小祠あり天皇の尊靈を祭るなりとぞ、

須磨名所獨案内　師長の塚社の後にあり琵琶宗匠師長の塚とも又名弦獅子丸の塚とも云ふ都て事實詳かならす

金剛作の絃　弦上といへる謡曲より出てたる事明けし但し梨壺の女御とて村上帝の女

御芳子の事にて宣耀殿の女御と呼はれ琴の上手なりーー由と梁花物語などに見ゆれと梨壺に住ーー事と物ふ見へれ作者の誤りなるへし又絃上は玄象にーて獅子丸青山と合せて三面れ琵琶唐土より相傳せし由と平家物語にくわし古今著聞集に昔玄象の失せたりけるに公家驚き思しめして慈法を二七日修せられけるに朱雀門の上より首に繩をつけて落しける鬼の盗みたりけるにや修法の力によりてれろーたりける云々と見へたるも同し琵琶の事なるべし今松の切株あるは枝葉南ふのみ向へる奇しき木なるか故に片枝れ松と唱へしものにて別に故あるにはあらす社の後ろに塚あり名弦獅子丸れ塚とも又師長の塚とも云ふ

關守稲荷

村上帝社の西の路を北に登れと老松の茂みか中ふあと此邊を字下澤と云ふ往時と此里れ鎮護社なり矢張此處も關屋跡れ地なりとて關守稲荷の名あれと今は只稲荷神社と云へり己日稲荷の所傳は源氏物語より出てさるもれあり

蛇窟

稲荷社の側にあり古へ里人れ穴居せし處なりと傳ふまと信するに足らす

摂津志　蛇窟俱在須磨村管内

摂津徵書　口廣八尺横幅八尺奥入る事六間是より穴小さく成と凡三尺四方にーて其深き事二里にれよひ播の境田井の畑村へ貫通りは是を蛇穴といふ然れとも古へ誰人か退治せしとも聞す案するに若銀を堀りたる跡ならんか

（蟻もとるらん雲れ餘の色）

摂津徵書　今は此奇談を説くもの絶てなー

摂津名所圖會　蛇窟村上靈趾の奥にあり此額北攝津所々にあり奇とするに足らす

須磨名所獨案内　蛇窟是と人民居住の初め此所に穴居せしと云ふ今窟内ふ土砂落ち往

古れ形あり
今は村人と雖とも攝津徴書の奇談を說くもの絶てなし

疝覺菴

西須磨本道より上野にあかる半腹に在りて最眺望に富り今は菴主露城翁は設けられし正風俳諧は一道場あり其の建築の樣此浦に適切あると他に比を見す翁姓は瀬川名は正夫風に俳諧を以て世に顯れ今や文學界に於ける一方の勇將なる事は普く世の人は知る處なり順路は爲めに特に茲に載けて文墨は士に紹介しぬ

八本松

西須磨れ西の端の字あり古松數株街道の傍にありひかーこれ松の下に八文字茶屋となん呼へる店ありーと云ふ（今れ新田平次郎氏れ祖也）これによりて西須磨を三分して烏池より千森川までを中須磨千森川より小天井川まを濱須磨と云ふ一時は小天井川より西塊茶屋と呼へりと傳ふ彼の彦山權現に京極内匠か吉岡一味齋の娘れ菊を下男友平なるもの東須磨に駕籠やとひあ行けるあとにて殺せーとては所にてこの事なりと云ふ定かあらぬことあれと里人乃所傳なれはこゝあ記し置きぬ

一乃谷

一の谷川は北の方字上野より發しこ字一の谷を經て海あ入る常に水を見あ

須磨名所記　一の谷長さ四町餘横二十間高さ十二間餘但えこれはのり七間はとあり（諸書皆な同しなれと省畧す）

遊靈勝記　一は谷地勢させる嶮岨ふはあらあ但壽永れ昔しと其榛莽幽僻極て鑿平は今日ふ異なるへきれみ

承應四年記　一の谷の間に平家は軍勢屯する由此所須磨の上野と申なり又二は谷又二町程過て一の谷なり

東鑑　壽永三年二月四日癸亥平家日來相從西海山陰両道軍士數万騎搆城廓於攝津與播磨之境一谷群集云々

平家物語　一の谷の城廓と申は北は山屏風の如くに立て入違ふ間に山は懷抱弘く西は大藏谷口狹く山際の岸高き所より南れ海遠淺にて大石を疊大木塊寄て逆木に曳深き所には大船を摸合搔楯をかき五所に高樓を搆へ西南の海に大船二艘を浮めて時々組樓を揚て砦の物見と定む云々一の谷は北と山南は海口は狹くて奥弘ー岸高くまて屏風を立てたるふ異ならす北は山際より南の海の遠淺まて大石を重ねわけ大木を伐りて逆木に引き深き所にと大船とも塊そはたてゝ搔楯にかき城れ面の高櫓には四國鎮西の兵とも甲冑弓箭を帶まて雲霞の如くに並み居たり櫓の前にと鞍置馬とも十重廿重に引き立たり常に太鼓を打ちて亂聲す云々是より平家の城廓一の谷へ落さんと思ふは如何ふゆめゆめ叶ひ候まし凡三十丈の谷十五丈の岩さきなとをは容易ふ人の通ふへき樣も候わし云々

攝津志　一の谷二は谷三の谷俱壽永中城墟其城東門址存大手村

播磨廻　一の谷東須磨より六丁程西也長四丁余横七間高十二間二は谷須磨寺より此谷へぬけ道あり谷れ長三丁余横八間高九間谷口より波打際迄四十間一は谷より三丁あり三は谷谷口より波打際迄五十間余二の谷より三丁余此峰を鉢伏峰と云ふ也

阿州祖谷山阿佐家系圖　業盛藏人太夫攝津國一谷にて土屋五郎重行と組討死す云々

遊方名所略　一谷烏崎一里烏崎攝州播州境也昔平家城廓跡又一谷者北山南海口狹奥廣岸高如立屏風

西遊日記　抵一谷又有二谷三谷此間皆平氏古壘也

須磨名所獨案内　是は皇城の内壕なりと云ふ

松井河樂

廢起不仁興起仁、天時地利豈離人、平家若有守文素、廷尉功名陸奥麓、

吉田松蔭

敗餘人離破、一谷更無何、莫道平家屠、未曾向仇和、

一の谷討死とけ一壯士を　仝

たこーて旅の道つきにせん

戰のありし昔のあとゝ先て　松原貴速

殘る血潮の紅葉はの色

夏草の露も乾かす一の谷　羽後吟風

鶯の響や一の谷おろし　讀人もらす

內裏蹟

摂津微書

塚の間や雲の上野の天津雁

一の谷とゝ右とゝ上に老松數株ある所を云ふ四方廿餘間とゝ處は今もなほ土地高く老松立並びてそゝ遺跡存せり昔は五百餘坪免租れ地なりしとゝ今紫雲殿跡とも云ふ

千種日記　三とゝ谷を過る左れ山ゐ安德天皇の內裡の舊跡あり道よゝ山に上てみる東西三町許南北二町餘の程平かにして築地の跡井の跡所々に殘れり其東西七八町とゝ間古屋敷の舊跡あり

承應四年記　一の谷二の谷とゝ間山とゝ平地に內裏屋しきあり皇居並に陣屋廿四間四方程土手れ跡あり

摂陽群談　安德天皇遷幸陣所須磨上野れ地にあり陣屋の威儀方廿四間餘封疆とゝ古跡今にあり

須磨古跡記　內裏跡一の谷二の谷の間上の臺にあり四方土堤形今にあり

細見記　一の谷是より右れ方に須磨の都跡うーろゝ鉄梶が峯鐘かけ松鵜越の逆落尤も海邊なり少し行ゝ砂川あゝ

摂津名所圖會　內裏蹟一谷の上にありこゝも須磨とゝ上野といふ古松二十本計ありて不毛れ地なりこれ一谷の城墟にして安德帝行宮とー給ふ今方廿四間計官家より租稅免除の地也とゝ

平家物語　落足れ事　（上畧）凡東西の木戸口　時移る程にもなかりしかは源平數を盡ゝて討たれにゝり櫓の前逆木の下にゝ人馬れ肉山の如し一の谷小笹原緑の色を引き替へて薄紅ゐそなりにゝる一の谷生田とゝ森山のそゝ海の汀に射らを切ふれて死ぬるゝ知らす源氏の方に切りかけらるゝ首とも二千余人なり今度一とゝ谷にて討たをさせ給ひたる宗徒の人々には先つ越前の三位通盛弟藏人大夫業盛薩摩守忠度武藏守知章備中守師盛尾張守清貞淡路守清房經盛の嫡子皇后宮亮經正弟若狹守經俊其弟大夫敦盛以上十人とそ聞ゑし軍敗れにゝれは主上を始め參らせて人々皆御船に召して出させ給ふこそ悲しけれ汐ゐ引かれ風に靡ひて紀伊の地に赴く船もあり蘆屋の沖に漕き出て波に搖らるゝ船もあり或ゝ須磨より明石の浦つたひ泊さためぬ掛枕片敷く袖もゝ濡れつゝ朧に霞む春れ月心を挫かぬ人ゝなき或ゝ淡路の追門を押し渡り繪島か磯に漂へは淚路遙にをきわたり友まよわする小夜千鳥是も我身のたくひかゝ行末いまたいつくとも思ひ定ゝぬかと思しくて一の谷の沖に休らふ船もありかやうに浦々島々に漂へは互の生死も知りかたー國を從へるとも十四箇國勢の附くことも十万余騎都へ近つくことも僅に一日の道ゝれは今度はさりともと頼もしうこゝ思はれつるに一とゝ谷をも攻ゝ落されていとゝ心細うゝなられける

逆落し

摂津微書

山からや落せゝ谷のわれくるみ

承應四年記　岩石落の山は二谷の迫詰とも云又一說ゝ一の谷の上とゝ山とも申又鐵梶峰の下に逆落あり此下卽內裏屋敷あり

千種日記　鐵梶峰の東れ尾上に鐘掛とて老

木あり云々此松と峰との間は義經の落し玉ふ所也

須磨浦名跡記　逆落とは、一の谷に奥なり

岩石落とは二の谷の奥なり

雖方名所畧　一谷者北山南海口狹奥廣岸高如立屏風自高嶺巖碎石落故此邊言巖石落

攝陽群談　一の谷より二の谷に至る代間二町四十間餘り隔て險阻の地世に逆落とと稱す

平家物語　逆落の事

是を始めて三浦、鎌倉、秩父、足利黨には猪股、児玉、野井よ、横山、にーたう、鈴木黨、惣して私の黨に兵共源平互に亂れあなや喚めき叫ふ聲は山をゆるかー馳せ違ふる馬の音は雷に如く射違ふる矢は雨に降るに異ならす或は薄手負ひて戰ふもあり或は引組み指し違へて死ぬるもあり或は取りて抑へて首を掻くもあり掻るゝもあり河れひまありとも見えさりけりかゝりーかとも源氏大手はかりにてはいかにも叶ふへしとも見へさりしに七日の日の曙に大將軍九郎御曹子義經其勢三千余騎越に打ち上りて人馬の息休めてれとしなるか其勢にや驚きたりけん牡鹿二つ牝鹿一つ平家の城廓一の谷へそ落ちゐりける平家の方に兵共是ゆ見て縱令里近からん鹿谷も我等に恐れて山深うこそ入るへきに只今の鹿の落樣こそ怪しきれいかさまにも是と上れ山より敵落すにこそとて大に騷く處に爰に伊豫の國に住人高市の武者所清章進み出てたとひ何者にてもあらはあれ敵に方より出て來りたらんするものゆ通すへきやうなしとて牡鹿二つ射とめて牝鹿ゆと射いてと通しなる越中に前司是を見て詮なき殿原に鹿に射樣かな只今に矢一筋にてと敵十人をと防かんするものを罪つくりに矢たうなにとそ制ーける程に大將軍九郎御曹子義經平家の城廓遙に見下ーてれとしけるか馬共落して見んとて少々落さ

れけり或は中にて轉ひて落ち或と足打ち折りて死ぬるもありされとも其中に鞍置馬三匹相違おく落つきそ越中の前司か館に前ゐ身振してあそ立ちたり者を御曹子馬は主々か心得て落さんには痛うと損すましかりけるそ只落せ義經を手本ゐせよとて先つ三十騎はかり眞先か者て落されけれは三千余騎の兵共皆續きて落すそこしも小石まーりの砂なりけるは流れたとしに二町許颯とおとして壇なる所に扣へたりそれより下を見渡せは大盤石の苔むーさるか釣瓶下に十四五丈そ下りたるそれり先は進ひへきとも見ゆす又後へ取りて返すへきやふもなかりーかと兵共奚そ最期と申してあきれて扣へたる所ゐ三浦に佐原の十郎義連進み出て申まけるは我等か方にてと鳥一つたちてたゐも朝夕かやうの所嶮は馳せあるけ是は三浦の方に馬塲そとて眞先駈けて落しけれと大勢皆續ひて落す後陣に落するものゝ鎧の鼻は先陣の鎧甲にさはるはとなりあまりいふせさに目を塞きて落ーゝ者るそい〳〵聲をまのひにして馬ゐ力をつけて落す大方のまわさとは見えす只鬼神の所爲とそ見なし落しもはてぬに鬪を咄とそ作りける三千余騎か聲なれとも山彦答へて十万余騎とそ聞えける村上判官代康國か手より火を出ーて平家に屋形假屋を片時に煙と燒きはろふ黑烟既に押し懸りけれは平家に兵共若しや助ると前なる海へろ多く走り入りける渚には助船とも幾ふもありけれとも舟一艘にと鎧ひたる者共か四五百人千人許籠み乘りたらんゐなーゐはよかるへき渚より三町許漕き出て目に前にて大舟三艘沈みにけり後はよき武者をは乘るとも雜人原乘そへからすとて太刀長刀にて打ち拂ひけりかくする事とと知りなかち敵に遇ゐては死すして乘せしとする船にとりつきつゐみつき或は臂うち斬らん或は肘うち落され一の谷の汀に朱になりてそな

みふしたるさる程ふ大手にも濱の手にも武藏相模の若殿原面も振らす命も惜ますあゝを最期と責め戰ふ能登殿之度々ゝ軍に一度も不覺を給はぬ人れ今度は如何思はれけん薄墨といふ馬ふ打ち乘りて西を指ーてそ落ち給ふ播磨れ高砂より御舟に召して讃岐ゝゝ八島へ渡りたまもぬ

摂津名所圖會　鐵拐嶺一ゝゝ谷の峰をいふ此峰より麓までを坂落し巖石おとしの名ゝり義經一谷嶮攻落されしより名とせり

播州名所巡覽圖會　鐵拐山一れ谷の峰をいふ此峯より麓までを坂落し巖石落しの名あり義經一の谷を落されしより一説に手つがひゝゝ峰といふ坂落しれ手ッガヒなるへし名とせり云々評曰そは谷と云ふものは大雨毎に流れ埋みて凡五十年程にて山の相合變るもの也何れにもせよ直道樣には落さまと一一騎落乃所より砂とまりに落し着たるものなるべし今其樣を見るにかの一段臺の平場ありろれより下は屏風を立たる如し恐ろーなんといふ斗なーたとへ鉄を以て作りなる人馬たりとも落すへきやうなし然るに其如くなる巖壁凡二三十間左右のはつれより一騎に落さと落さるへき所あり故ふ案内者もつれたるなるへき

梁田蛻巖

浸氣一抹紫微星、海岸忍留舟韓青、冠蓋春寒風度谷、劍瓊雪暗夜忖度、鄧卿蜀嶺九天下、宋主崖山幾月經、赤幟光消空返焰、無人對酒泣新亭、

賴山陽

播之首、攝之尾、吾視其地何雄偉、山勢北來迫海陽、松柏露根亂蘆葦、怒潮淘沙出白骨、啼小鬼兮哭大鬼」聞說平氏曾此窠赤斧、座巖爲城澎湃爲溝、左控王畿右甸服、舊業自斯墜手收、何料東人有機智、要害早已被耽視、九郎一身渺是膽、伏旗仆鼓出不意、蜀道雖難不用氊、懸崖絕壁如平地」組練劃山訝懸瀑、蹄間三尋眞是鹿、秦宮殿宇從一炬、晉人爭舟指可掬、桓伊弄笛終貽禽、劉琨嘯歌亦遭戮、」勝敗有機少人知、繪畫徒傳娛童兒、一自貂蟬出介冑、上下文恬又武熙、豈知養虎自遺忘、羽翼既成猶守雌、敢忘越人殺其父、白旄一出雖能支、宛如翡翠遇飢鷹、不怪毛血紛離披」獨有武州能捐軀、婦人群中見丈夫、吁乎諸君皆能學之子不將賓劍附天吳、

小林至靜

廿餘年夢饒浮榮、豈曾三公與九卿、歌詠何曾資治國、驕奢終是忘修兵、史中豪傑今邱墓、望裏煙巒舊帝城、驚地海天風雨起、怒濤髣髴戰聲聲、

高橋白山

海山形勝尙依然、下馬低徊暮春天、湘竹淚寒青葉笛、戎衣夢冷落花篇、王孫遺恨迷芳草、帝子冤魂哭杜鵑、一曲琵琶度平語、榮華說盡二十年、

稻本陽州

攝山落水々連天、不鎖關門七百年、青葉笛殘人那處、依稀明月照無邊、

一休

萬騎下山源氏兵、平家運盡出堅城、長江不洗英雄恨、日夜風濤戰鼓聲、

梁川星巖

二十餘春夢一空、豪華吹散海曛風、山排殺氣參差出、潮迸冤聲日夜東、憶昔瀟宮悲去鶴、欲將往事問飛鴻、爛斑剩見英雄血、暫樹鵑啼朶々紅、

鼓聲聲死鐵沈沙、往々漁人網戟牙、靈壘今爲狐兎窟、僧居嘗是帝王家、骷髏有限何能識、草木有情也自花、欲把一盃聊酹汝、幾行哀淚落烟霞、

梁田蛻巖

鐵騎三千雲厭山、翠華一去慘龍顏、艨艟赤幟春風色、留在夕陽松嶋間、

古壘鳥啼不見人、嶺雲澗水共傷春、誰知夜

牛風前宙、吹落梅花作戰塵、

鵜飼石齋

平公曾此擁先皇、十萬軍兵不可當、後嗣丹
崖乃天險、前廻蒼海自金湯、九郎神策乘無
備、諸戎震驚迷所防、五百年來只佳土、迷
魂長在白雲鄉、

渡邊林菴

茲徙嚴城蠻觸饒、俱呑四海両雄心、旌旗影
作野花去、原上年々紅白深、

九皐

春霧朦朧日矢紅、可憐孤楫是行宮、須磨浦
上烟波裡、吹落梅花一遂風、

内田貞

一自蒙塵潛玉輿、普天無所寄王居、六軍憑
嶮終何事、可恨丞相廟畧疎、

日柳燕石

海甸腥風吹翠華、諸盛衰逼附長嗟、三軍下
嶺如飛雨、一族漂波皆落花、笛朽古城驚續
曲、宮荒寒浦鬼乘車、憑誰爲問水濱事、枯
髑無言坐白沙、

片山冲堂

舟過須磨嶺、左指鐵枴峯、危壁削千仞、猿
猿斷行蹤、憶昔源延尉、躍馬下層穹、勢如
急雷擊、何人敢折衝、叱吒撼山壑、風怒海
洶々、走者相蹂躪、進者殪於鋒、一箭盡飛
鳥、安復事良弓、茫々六十州、眇軀無地容、
倚舷長大息、此意有誰同、

鐵枴山

月かけて我影やとく峯の色

一の谷の上に聳へたる碧峯にして攝津の堺を爲せり東は高倉山に接し西南は鉢伏山に連なり海を扱く事百七十二メートルなり

攝陽群談　俗傳に云く鉄枴仙は吐氣現我相仙境を出て暫く此峯に遊歴す因て鉄枴と名あり或る勇壯剛力の樵夫鉄枴を以て山に入數駄の薪を荷ふ時の人彼を號けて鉄枴と稱す遊方名所畧　鉄枴峯在須磨西一里鉄枴峰一名鵜鵜越北是一谷也枴者杖也此峰壁立數仞嶮岨不可言不鉄杖鉄鎖貫於木石而攀緣難登此峰故名焉是故有鉄掛松

承應四年記　一の谷の上の鉄枴峯に云々此山は火れ山とも申鐵枴峯とは此山の北と方れ山を申との一説あり

千種日記　内裡と上と山を鉄枴峯と云ふ

須磨名所獨案内　嘗明石侯世襲と都度此山嶺に登りて烽火を擧け其合圖を以て領内の各地に烽火を擧けしめ我領分を一覽せり

攝津志　鉄枴峰俗傳昔有樵夫多力以鉄枴採薪於此因名

笈之小文　猶昔の戀しきまゝに鐵蓋か峯にとゝはらんとするに導きする子の苦しかりて兎角いひきらとすを樣々にすゝめて麓の茶店にて物くらとすへきなと云てわりなき躰に見えたり彼と十六と云けん里の童子よりと四とはかりもおとうとなるへきを數百丈乃先達とーて羊腸嶮岨の岩根をはものはきはそへり落へき事あまた度なりける遂つつに根笹とり付息戔切らーー汗をぬたーー漸く雲門に入るにそ心もとなき道師と力なりけらし

須磨の海士と矢先に啼や時鳥
ほとゝきす消行方や島一と

須磨古跡記　内裏やまきと上の高山なり

攝州廻　鉄枴か峯一れ谷の後なり

攝州名所巡覽圖會　義經一の谷を落されーより一説に手りかるとと峯と云ふ坂落しと手ッガヒなるへし名とせり

今此山を火と山と呼へり義經烽火を擧けたるによると傳ふ

小畑詩山

紅白旗分十萬軍、炎々兵氣裸煙氛、千年人
説英勇夢、空作山林一帶雲、

源平躑躅

攝津徵書
白雲も味方顔成るつゝじ哉

戰川乃ち一の谷川の奥を源平つゝし咲わけの谷と傳ふ此谷を一町餘り溯れは二岐にわかれ西の方を赤旗と云ひ東の方は一の谷川の源なり赤旗の土赤色にして源の方は白色あり攝津徽書にも源平躑躅は一の谷にありと見ゆ

波鷸曰　杜鵑花攝津須磨一の谷二の谷より權現山に至て三四里許甚多く夏月盛りには滿山錦の如し云々

鐘懸松

近年迄て鉄枴山の半腹にありし由なれと今と見へす判官鐘松とも云へり

攝津徽書　義經一の谷を攻むるとき時此地に至る比寅とき刻に及へるといふ敵に未夜深く思はさんとて此松ふ鐘をかけ遠寺の鐘に數たして九つの時を突せりとなり

千種日記　内裏とき上とき山を鉄枴峯と云ふ此山乃東とき尾上に鐘掛とて老木あり義經坂落の時鐘を掛玉ふとなり

須磨浦古跡記　峯に鐘掛松とき古木あり鉢伏のぞき逆落しなと恐ろしき名のみ殘りて鐘懸松より見下すに一の谷内裏屋敷目の下に見ゆ其代は亂れ其時とき騒きさわから心に浮ひ佛につとひて二位の尼君皇子を抱き奉り女院の御裳に御足もたれ船やかたにまろひ入らせ玉ふ御有樣内侍局女嬬曹子の類ひ樣々の御調度もてあつかひ琵琶なんとしとねふとんふくるみて船中に投入供御はこはをてうろくつの餌となり櫛笥は亂れてあふの捨草となりつゝ千歳の悲しひ此浦にとまり素波の音にさへ愁多く侍るそや

承應四年記　一の谷の上の鉄枴峯に九郎判官の鐘掛松あり此松根本にて六尺廻延三間餘巽の方へ靡く中古植たる由

遊方名所畧　鉄枴山原有鉄掛松胡簾梅其樹類尖峻也

攝津名所圖會　鐘懸松一谷とき半腹にあり近年古松は枯て今は植繼なり古松の株を伐て

額板とし前田氏とき軒に掲る

蜂とき巣に今は手をかせみねの松

鵜飼石齋

義經天性暗通兵、勇畧兼該誰復爭、馬上一編何用學、江都七尺未爲輕、三千逆下鵜山險、十万悉燒平受情、白骨已成千歳土、生田原上不埋名、

松井河樂

倒落巖崖今古功、營兵一潰葉飄風、千年遺愛依然在、嶺上遙看鐘掛松、

鵯越

鐵枴山とき北に當る峯續きの山を云ふ

攝陽群談　鵯越峠鐵枴峰とき牛腹北より南に開き出る所也人輙く越る事を不得道狹て大鳥の羽を慰そと雖し是故に鵯越とき名あり自是播州三木室山ふ至る所なり夢野長田両村の間に本道あり

承應四年記　鵯越の道鐵枴峯とき麓北より南へ向ひ出る道あり

東鑑　九郎王相具三浦十郎義連已下勇士自鵯越此山猪鹿狐の外は不通險阻也被攻城

攝津名所圖會　鵯越鉄枴嶺とき北にあり本道は兵庫より丹生山田郷藍那村を經て播州三木の往還也九郎判官殿三草山より筋違に越て一落鉄枴峯ふ赴けり此道險岨にして樵夫も通ひかたし又夢野より南二丁坂口あり播磨三木又室へ出道也たやすく越る事を得す

播磨廻　鵯越鉄枴の南へ行道也

千葉縣嶺岡牧場ふ産する馬を雀飛と呼ひ小馬なるも頗る強健なり源義經鵯越の難所を經て逆落しに落したる名馬も此牧場より出でし由ふて其馬尚ほ牧場にありける時或る日誤つて土穴の中に陷り漸くにして飛ひ出てしか後屢穴とき中に飛ひ入り又飛上ると居りしとそ其土穴今尚存在し常に七五三を張り廻りありと云ふ

長梅外

出人意表使人驚、自古用奇功乃成、夢裡神兵若天降、鵯越一着勝陰平、

長　三　州

鵯嶺之險猶可跋、屋島之溝猶可絶、腰越之驛不可越、十万平軍一鼓拔、難拔讒豎三寸舌、讒豎之舌有所恃、兄家岳翁如魑魅、獨怪帷幄張子房、不安劉氏助呂氏、李廣兵法渾是奇、一生數奇亦可悲、芳野風雪衣川水、英雄末路無所歸、多情空得兒女憐、娥眉唱斷繅絲詞、

須磨寒　一　鵯越は雪催い　讃岐慶　雪

熊谷扇松

柴山の峯に見ゆる松を云ふ京華要誌に熊谷ゐの處より扇を以て敦盛を招きたりとの傳說を記せとさみとあらす須磨名所獨案内に云へる如く松そ樣扇に似されはかくは云へるなり

勢揃乃松

鐵枴山れ後柴山の麓にあり義經ゐゝに兵塊揃へ玉よりゐそ名ありと傳ふ

古跡塚

二そ谷の西三の谷そ東にあり傳へて但馬守經正城の四郎に伐れたる所ありと云ふ戰そ濱とは是より東一の谷そ石橋あさりれ濱をいふ也

須磨名所獨案内　經正最後そ松保養院の西の上にあり但馬守經正討れしより名付とろ

細見記　二の谷經正最後そ松あり

戰乃濱

一の谷石橋より以西を戰れ濱と云ふ是も一の谷攻城れ時源平二氏最も激戰せ一所もへ此名あり云々と須磨名所獨案内に見も

鉢伏山

鐵枴山の西南ゐ當る尾崎海に出たる峰をいふ

攝津志　壽永中源軍擧烽之處俗傳曰神功皇

后埋兜鍪于此

攝陽群談　鉢伏峯須磨村れ後三そ谷れ上にあり所傳に云く昔し神功皇后三韓征罰して歸朝の時先つ武庫の港に至り此山頭に登り給ひ士卒を集む各群參して甲を禊地ゐ伏せ暫く軍功を語れり因て以て時の人鉢伏峯と稱す冑の盔を伏たるに因れり

永應四年記　火の山れ向に當る山を鉢臥山といふ

播磨名所巡覽圖會　鉢伏山鉢を伏せさるに似たるよつて名つく

須磨療養地　鐵枴山脈れ一峰なる鉢伏れ山嶺は海面戍拔く事百七十二メートル直立以て須磨療養地の背後を擁す故ゐ狂風怒濤に遭ふも能く微風の裡にあり云々

播州廻　三の谷二の谷より三十丁餘此峰を鉢伏峰とふい也

熊谷平山一二乃懸

鉢伏山の麓にて三そ谷より西そ濱をいふ熊谷父子田井畑そ古道を經て一れ谷波打際に出て一れ谷れ先陣と名そり平山ゐ魁せし由平家物語に記せるはこそ所乃事なりと傳ふ

攝陽群談　熊谷平山古戰場須磨村境川等ゐあり

須磨名所記　熊谷平山一二そかけといふも盥屋村ゐての事なり

所歷日記　平家一そ谷ゐ籠城せし時大手は生田れ森搦手は此盥屋村を限る熊谷平山一二そかけは此處ゐてれ事也となん

東鑑　武藏國住人熊谷次郎直實平山武者所季重等卯兢倫廻于一谷之前路自海道鏡攻于館際爲源氏先陣之由高聲名謁

須磨浦古跡記　熊谷平山一二れかけ塊爭ひしは播州盥屋村れ邊也東は生田川を大手と一西盥屋を搦手として其間三里餘を城とせしと也

平家物語　一二のかけの項

六日より夜半ごかり迄は熊谷平山搦手にそ候ひつる（中略）主從三人（主は熊谷父子）打つれ落さんする谷を弓手になし馬手へ歩ませ行く程に年頃人も通はぬ田井畑といふ古道を經て一の谷波打ち際へそ打ち出てける一の谷近み鹽屋と云ふ所あり未夜深かりけれは土肥より次郎實平七千餘騎にて控へたり（全書老馬より項に六日の日の曙に大將軍一万餘騎を指し添へて一の谷西の木戸口へ指し遣はすとあり）熊谷夜に紛れて波打際よりそこをつと馳せ通り一より谷に西に木戸口にそ押し寄せたる其時も未夜深かりけれと城の内にと靜まり返つて音もせす云々搦捕より際に歩ませ寄せ鎧踏張り立上り大音聲を揚けて武蔵國の住人熊谷に直實子息より小次郎直家一の谷に先陣ぞやと名乘りゐる云々稍ありて後より武者こそ二騎續きされ誰そと問へは季重と答ふ問ふと誰そ直實とかし奈何に熊谷殿といつよりぞ宵よりどこそ答へけれ季重もやかて續きて寄すへかりつるを成田五郎にたばかられて今まては遲々たりつるなり云々さる程に東雲やう〳〵明け來けは熊谷平山彼此五騎にてそ扣へたる熊谷と先に名乘りたきとも平山か聞く前にて又名乘らんとや思ひけん搦捕の際へ歩ませ寄せ鎧踏張り立ち上り大音聲を揚けて抑以前名乘りたる武蔵の住人熊谷の次郎直實子息の小次郎直家一の谷の先陣そやとそ名乘る云々

林道春

熊谷平山老名士、聲蹟從前相並馳、一谷競攻多斬獲、諸兵逆戰悉披靡、平山未至登還早、熊谷先來進稍遲、千戦論功名優劣、在今雖復點銖錙、

敦盛塔

三の谷より西へ一町街道の右側あり

須磨名所記　敦盛の石塔あり高さ一丈一尺土臺四尺四すゝのり

攝陽羣談　敦盛塔高一丈一尺臺石方四尺敦盛空顔瑞莊大居士と銘す此塔は敦盛靈再來して立之云習り亦熊谷塔に相並て洛東黒谷紫雲山内にあり云々又熊谷平山古戰場の項に須磨村境川等にあり所傳に云直實爰に於て敦盛戍討ち取り云々

東鑑　壽永三年二月七日爲義經戰死云々範頼義經等之軍中に討取る云々首と六條室町に集め十三日入條河原にさらせり云々

攝津徵書　鎌倉北條西園寺入道貞時平家一門の冥福祈らんの爲ふ建つ敦盛一人の塔にはあらす攝津名所圖會攝州名所源覽圖會皆右同しと記るせり

平家物語　直實首戍包みて大將軍の見參に入れ云々後馬鎧笛ともに首を取添へ父經盛へ送られなる云々

盛衰記　敦盛の屍骸を父のもとへ直實送り遣し云々

須磨より友　三のの谷のあため塚戍見る俗に此塚をあつもり塚といふ此塚は平家の人々の首をあつめて熊谷直實主より葬りしより此名ありと云ふ五輪の塔にて半は土に埋もれ苔生茂りていかにもふるく見へたり

本朝俗談志　敦盛の石塔は一の谷二の谷の間海道の端にあり大きさ七八尺はかりの五輪也往來の旅人小石戍以て塔を組供る也前後六七町か程ちゝ〳〵たり

千種日記　敦盛爰にて討れ玉ふとなん今年の二月七日と此人の五百回忌ありとて卒土婆戍たてゝ石なと多く積のけてあり

平家物語（敦盛最後の項中）首を包まんとて鎧直垂を解きて見れと錦の袋に入をられたりける笛をそ腰にさゝれたるあないとほしーまの曉城の内まで管絃し給ふつるは此人にておはまたり當時味方に東國より勢何万騎かあるらめとも軍の陣に笛もつ人はよもあらまし云々是を取りて大將軍の御見參に入

れさりけるとは見る人涙流したり後に聞けど修理太夫經盛の乙子太夫敦盛とて生年十七にそなられける云々又首渡しの項に壽永三年二月七日の日津の國一の谷にて討れ給ひし平氏の首とも十二日に都へ入り云々同一き十三日太夫の判官顧仰以下の撿非遑便共六條河原ゑ出て向ひて平氏の首とも受けとり東の洞院を北へわたて獄門にかけらるへき由範頼義經奏聞す云々

承應四年記　敦盛の石塔より二町程東に三ゝ谷又二町程東二の谷又二町程過て一ゝ谷なり山の尾崎より海邊浪打際まて四十間餘あり此所敦盛熊谷戰場なり

遊覽勝記　敦盛の塔は多年を經て半土に埋沒す此塔北條家より立たりといゝ傳ふ和田れ清盛塔と同時の物にや

遊方名所略　自鐵懸松山館相接有長野此海邊有敦盛石塔

西方日記　渉源平戰川清川戔玉觀平敦盛碑五輪樣而古制也

攝津名所圖會　世俗昔敦盛と稱して往來の旅人追善として石を積塔を建て菩提爲吊らひ者るも多く見へたり

播州名所巡覽圖會　俗ゑ敦盛の石塔と云三の谷ゝ間任遠にあり半と土に埋れたり谷崩れ磯ゑ落る事かくの如しされは古道は上に有へし又此塔の前を過る人下馬或と鎧を伏なとして恭敬し禮を爲せり是と何の故なる事を知るへからす此陣所の上にハ安德帝の行宮にてすなはちこれより船にも召れたり若其義か但し一門ゝ墳塚此戰場の所々に殘せりをかるゑ只敦盛の塔をかくも遺恨なるべし因て姑く俗にをたのひて聊か其傳を附記ル

播磨遇　敦盛の石塔三の谷ゝ西道端にあり

細見記　三ゝ谷敦盛討死の所五輪の石塔義經腰掛石あり云々

歷史觀本　一の谷の麓須磨の浦の松原かく

れに墓碑あり香の烟も絶へて闕伽も涸とはてたれとあたり何とをく打ちめりたるは詣つる人の涙の露にやあらんこれをん平敦盛の墓をりける

須磨名所獨案内　今頼政藥師の側にある庚申塚はもと保養院の地にありて庚申ならて公子塚をり乃ち敦盛の胴を埋めし所にて六字ゝ名號は直實の筆なりと見ゆ　直井氏の手記にはもと一の谷の深林にあり平經正の碑なりとの所傳を掲く

赤松蘭室

公子青春孤白裘、軍中歌吹自風流、當時玉笛今寥落、獨有蕃苔封古邱、

一休

昔此地有戰場名、流血染殘嫩木櫻、須磨浦風散花夕、恰如熊谷打敦盛、

林道春

敦盛清容天下跨、子都粧起玉無瑕、風流横笛墟中曉、力戰交兵海畔沙、一族逃亡自獨後、二郎來襲道終遮、當時雖死猶生日、往々寫圖屏上塗、

新宮凉庭

維昔平氏古營壘、經年七百既泯然、當時元帥無膽略、獨恃嶮巇鐵柵顛、秋夜月明嘶戛驥、春晝花紅酒如泉、絲管宴休眠未覺、一炬灰燒滿營煙、東兵如鶩一敵万、流血十里山川赬、八歲天子付女子、御幸不須畫龍船此時舟中指可掬、一瓢難獲代万錢、白旗逐北如鵬翼、艨艟遙遥八島邊、西軍雖敢回馬首、獨有紫騮美少年、沙汀送頭泣敵將、孤碑留得官道前、又有孝子死于敵、行旗揮淚停馬鞭、吾今來此弔往事、松樹瑟々秋暮天、

頼春水

風光慘澹海之濤、想得當年簫笛音、吾愛平門相宴樂、不同鎌府鬪墻心、

草場珮川

玉笛雖圖兆敗軍、梅花零落夜紛々、平家公子知多少、今日路人唯吊君、

丹羽花南

一枝湘管又黃昏、鵑斷春風浦上村、餘恨于今消不得、綠波芳草吊王孫、

玉山集

潮生赤石欲黃昏、乘月扁舟下海門、回首汀洲芳艸遍、不知何處吊王孫、

草場珮川

風鼓潮波噬白沙、海畿遂傍翠屏斜、春深空賸王孫草、日暮雖憐剌史花、

松井河樂

春秋二八命歸泉、剝落塔銘經幾年、無限旅人懷舊淚、爲孫海水接青天、

大沼枕山

公子韶顏避戰埃、城西徙倚宿雲開、暗林風冷帶餘雪、青葉笛凄吹落梅、畫景轉知逃走耻、曉空先表別離哀、被呼强敵能回馬、一笑交刀氣勇哉、

小畑詩山

路傍蕭騷松竹枝、千年猶見舊苔碑、憐君決志迎霜刃、下馬無言延頸時、

岡本黃石

寒潮打岸海雲昏、往事千年跡僅存、更有何人薦蘋藻、路傍古墓是王孫、

寄贈　何　鑑　之

漠々晴烟淺々涉、踏青兒女過輕韡、無端一點傷春淚、倫灑王孫墓上多、

一死堂々重鼎彝、夕陽下馬吊殘碑、英魂千載留苔石、對峙忠臣楠子祠、

仝上　橋本海關

鐵笛聲高鳳戰塵、落花風亂海城春、平軍無復男兒在、一喝回鞭獨此人、

浮み出て其佛を見ゆる哉　寄贈松原貴速

波に散り行く紅葉乞の色

打ふさる敵も味方も磯ゝ波

寄せてとかえす須磨の浦風

吹きおろし鵯越の山風に　羽前香夢樓主人

散りても包ふ若櫻哉

音乞絶ぬ青葉ゝ見乞し今年竹　籬島

ほたろ火や招く扇れ風ゝまへ　衆雲

はかなさの名高し須磨の兒櫻

苔の花咲くや昔の忍はるゝ　紀伊　唫圃

敦盛蕎麥

敦盛塔の前にあゞ昔乞古跡案内人此店に居て旅人れ來る毎ふ敦盛そば〳〵と叫ひ誠は左の歌を歌ひ旅人を呼ひ留先往々奮藩主の駕籠を休ませし事ありしとそ（或る老翁の物語に昔しは十五六人の寶子ありて一日の寶上は百文錢なと三籠もありしと云ふ）

（金凡一斗五升入の籠に一文錢或は百文錢なと三籠もありしと云ふ）

そばは敦盛あんばいは義經盛は熊谷ゝ大茶碗に鐵枴やさもり夫を知ゝ九郎判官うどんは色の白い玉纖姫酒は一ゝ谷源平躑躅ゝもろはく熊谷ゝ大盃て一ばいれめ乞顏は辨慶座敷は千疊敷泉水は帆掛船紀州熊野浦まてやりッぱなしれ茶はせったい薩摩守たゝゝみ喰ふげさら武藏坊辨慶御遠慮れれ方乞悪七兵衛草鞋乞熊谷じんばゝわらじ破れるまて乞受あい

須磨ゝ友　あつ盛蕎麥て名物のそばあり いとさたなく見ゆれともこれも旅乃興なふめと立よりたをともこゝにてもゝそる心地せねはあらんのきり求てかへゞ直ちにつゆを調まて試るふ粉れふるひあまきにやチャリ〳〵と砂のさはりて心わろく互ゝにわろくいひなから思ひゝ外多くあうへさり

須磨名所畧記　敦盛蕎麥乞當時れ貧まき者村頭ふ請ひ受けて糊口饑まのゝり云々

甑山陽

松際旗亭蕎麥香、山當人面古城墻、分明走狗將軍兒、誰把幾杯酹九郎、

永松豐山

舞子濱連海水涯、青松如帶列平沙、行人同吊敦盛墓、蕎麥店開家又家、

橋本海關

大椀銀絲飽客腸、柑皮和處細吹香、箸頭傾瀉空中瀑、万丈無聲落口長、

泉水井

敦盛塔の上の臺にあり其ゝ跡今に存せり

攝陽群談　敦盛卿山莊古跡一の谷ゝ邊にあり土俗傳云太夫敦盛山莊前に山河ゝ流あり號て泉水の茶屋と稱ゑ其跡今にあり又平常盛卿第宅古跡同所にあり俗傳題する如く今至て封疆崩あり方九十二間あり

界川

敦盛塔より西四五町の所に流るゝ小川を云ふなり水源は鉢伏山ゝ西の谷より發す攝播兩州の境にして蝸牛の里の名あるは芭蕉ゝ句によれるなり

所歷日記　攝州播州ゝ境川にきぬ攝津國ゝ方に松あり境ゝ松と云播磨ゝ方に梅ゝあり境の梅といふ

遊方名所略　此堺有相生松大木也播州松有

攝津界攝津松有播州界云々

名所方角抄　播州の境にまつとぢめあり

攝津志　界川源自須磨山中直注于海卽界于播州因名

播州名所巡覽圖繪　界川三の谷より西五丁にあり常は歩わたり也川中に傍示ゝあり是攝播二州の國界也其傍示の頭に鍬目を入三本の釘を打込淡路國高山を極とし海上漁獵ゝ界を知る也此川街道を貫きて西は播州壇屋村へ八丁也山崎關戸より十五里十九丁

誠に須磨明石と艸ひ渡るゆとゝ云ひけゝる源氏の有樣も思ひやるにそ今はまはろしの中に夢をかさねて世の榮花もはかなしや　芭蕉

蝸牛つのふりわけよ須磨明石

蝸牛角ふりむゝよ須磨明石此夕の樣を思へは鍬形打たる甲を着母衣を負ひて波打際に打わたる無官ゝ太夫を遙に隨ゑたる心地せらる　梅室

蝸牛肩に鳴らせとふりかへる　何體之

攝津州接播磨州、一水中分兩界流、樓外千帆萬帆白、往來半是浪華舟、

龜井日和

秋里籬島は左の如く記せり今は里人もこの奇談を說くもの絶へてなし

攝西奇遊談　海濱に出敦盛の古墳を拜しありけるうち早卒として天ゝ氣ゝきかはり暴風雨をまし〻へ且々まつかならす聊茶店ゝ軒にやとりをもとめとても此けゝきにて〻行と能ふまゝと蓑の紐ときけるに亭主の曰旅客さはれとろき玉ふとなかれこれは龜井日和なりといふ更に耳あたらしく聞てけれは其くわゝきを尋に亭主答へて物語りける家日井何某と申ける〻先祖九郎義經公にまたかひ平家を誅せゝ龜井六郎重治か末なるよしよりて龜井侯御通行の時〻かゝらす日和くつれて風雨をさそひまつかゝらす侯過行玉へ〻たちまち快晴するとなり故に風風戔交へ降とも山はれ沖くもりなき時は龜井日和といひゝらはせるよし寔に六百餘年の星霜つひといへとも一念の憤怒わすれさるこゝとおそろしくも亦奇なり

須磨琴

すま琴はすか琴の轉訛にして須磨に關係なしスゲスガ〻清き古語ゑして其音調澄禮おくすかすかまきを以て名つけたる由なれとも己に左の詩文あれは抹殺するに忍ひす姑く採つてこゝに記せ〻

須磨の枝折　行平か須磨琴をゝきて人に聞せける折によめる歌とて汲てゝれわかひとゝおのもたらぬにこ●いれから所　の心ゑかくめる歌　へ

ゝるへをの此一緒にきたりぬ　有　功
心をすませ山ゝ井の水

須磨譜　行平ゝわくゝは云々師顧のはりま路や云々及むきみか代云々四行のしら波〻云々兼昌の淡路しま云々

跋

一絃琴一名須磨琴相傳黃門行平須磨謫居之

日以廂板造之雖正史所不載所由來尙矣云々

茶翁道人

須磨琴一弦十二徽其形象龍日月星辰陰陽五行無不兼備余溫其故以新製之遍告同好之君子云

一すちに心こめたる琴なれと　眞鍋　素齋
千世ふしふへもさへしとそ思ふ

坪谷善四郎氏　琴には一絃琴二絃琴或と月琴木琴なとの種類あれとも先は普通に琴と一云へは須磨琴を指そものにて音樂中ゆ最も優美なるものなり

須磨名所畧記　昔中納言行平卿此浦にわ
せし時會靑川の上よりと古木より流れ來るを拾ひとり一絃を張りて琴を作る後人之を須磨琴或は一弦琴といふ卿日毎に播磨路や須磨の關屋の板ひさし月もれとてやさはらゐるらんの歌を詠みおられたり

廣瀨靑村

操出松風村雨歌、玲瓏一柱小雲和、希音縹緲眞天籟、妙趣元來不在多、

緩檄輕櫳夜向深、一絃能具七絃音、松風村雨仍盈耳、想見當年謫客心、

默庵

宮本元球

雉雛牛鳴出古桐、宮商總寄一絲中、誰將別鶴離鸞恨、苦寫孤峯鵲樹風、繁簡調分來往失、高低響異操縱功、冥海若后驚見、應悔五絃猶未工、

須磨琴は松にも聞や秋の風　豐後　徐　踏

須磨琴に松風添ふや夏の月　豐後　豐　秋

須磨簾

細き竹を棧欄繩にて束ねたるものなりひかし西須磨と家毎にこれをたれゐる由なて今もなほ所々に掲く又遊覽勝記に云へる柴れ垣今も此浦の富貴より家に多く見ゆ

攝津名所圖會　西須磨の家毎に常に表の方簾を垂る也土人曰昔一谷の城未た成らさる乃前安德天皇始め奉り大宮人此須磨れ里海士の苫家に入らせ賜ひ暫く行宮とし給ふ其時家毎に翠簾をかけし也其遺風今ゆありけるとそ

播州名所巡覽圖會　西須磨の家毎にみな常に表に簾をかくる是一れ谷内裡の遺風也といふもさるへき事なから又浦のいにしへより殘りたるにもあるへきか既に菟原蘆屋の名は蘆より家ゆえて和泉式部か歌にすくもたく浦の苫屋より蘆すたき空もすゝけて降時雨哉とあり此遺風ならは猶れかしく侍らんものか

遊覽勝記　巡覽畢て西須磨なる家に簾を揚れは雨歇月清く畫島か崎も近々と見ゆ又山方かけたる家ともより物塞なけなるに柴垣打しつゝ竹より蘆垣のふしにくけに見へたるも彼昔の御座所の樣思よそへられたり又此浦にては内裏の遺風として家毎に簾を垂る是を須磨と云ふ

須磨名所獨案内　此擧簾を苫屋なとにかける好古家の爲往古は商ひありしと云ふ

須磨名所畧記　德川の昔諸大名須磨浦を通行するも未た曾て簾を捲上けし事なく立ちゝまゝ簾より内より見るも苦しのゆすと命せらき居たりと或老翁と云ひき

攝津徵書　澄月や影と二重の須磨すゐれ

赤松松亭

山色蒼然帶暝鴉、古城無迹水之涯、曾聞壽永宮人後、一樣疎簾道上家、

もかさゝや須磨のすたれの朧月　但馬　樵男

佐保姫も簾越なり須磨の里　豐後　丘鳥

靑簾須磨れ昔しを悟りけり　灘　靜園

菊より香や是さへ須磨は簾越　讃岐　如月

立秋の日脚淸けり須磨をたれ　豐後　蘭史

雪のそく窓あり須磨の靑簾　讃岐　月龜

藻鹽磯馴味噌

麥麹に小量の豆を加へて製したるもれなりし中納言行平卿れ始めて製しゐるもれゝ由にてこの地れ名物とて所々に鬻けり始めは西須磨の端なる源左衛門と云へる人之煖賣れりと云ふ(須磨名所畧記)に當時の掛札煖寫せり

味噌舊札辻前

串屋關玉堂源左衛門

攝津名所圖會　名產磯馴味醬麥にて製したる味噌なり近世此里の名物とす

すまの浦わさとも佗て磯馴味噌　籬　島

鍋よりやきおら菓子よりまつかせ

はまの浦や味ひ辛犯磯馴みう　讀人しらす
海人のたはさもわひしかり鳬
汐風やみそぢかふるも秋れ寂　露城

潮雜炊

今も尚此里れ家々に食しぶるとなんこと潮にてゐゆを煎るあり

攝津名所圖會　潮雜汲て粥を煎るを潮雜水とて此里の農家には今も食しなる也

前田小左衛門氏の藻潮磯馴味噌の添書ふ

右麥味噌ぢ義昔此浦ふ詩作り歌讀み或は愚かなる者戯も歌へ論しける人ありけり此人漁翁農夫ぢ食料を助けんと製法を授けられし元是質○淡海を旨とせしもれから浦人忝うして久敷こゝに傳へなのか家ふはむかし〳〵のもかりあるを以て世ふ鬻く事とはなりぬ今其淡海を喜び賜ふにや爲き方も用ひさせ給へは麥のまふゝは固より總ての事に清らに清ーを盡し毎年水無月ぢうち日を撰ひて製造ー侍れは其風味の年々まかわりなきをあめーー賜ひて多少となく求めさせ給はむ事を願ふれと

やんことなき方の歌に
あの宿にいひ傳へすは村雨ぢ
ふりぬる事を誰かきかまし
月ーくれこれか磯馴ぢ味噌屋哉　西月

須磨名所畧記　潮雜炊い潮をもて麥を炊き麥味噌を加へて食ふこれ又須磨ぢ名物也
佗ぬれは身にしむはかり甘かりき　風月庵似雲
須磨ぢ麥とぞうーは雜水

須磨燒

須磨名所畧記　昔名倉山れ土をもて須磨燒を創め之れに書畫又は和歌なとを彫刻ーて鬻けり今を去る四十年前「キカイ」といふ人ありて敦盛首塚の拜殿にて須磨燒を鬻けり其後中絶せーを近頃保養院前の兒島商店より賣り出せり其れ廣告の中に左れ如く記るせり
嘗て行平卿れ閑居し給ひし時自ら製したる須磨燒と世に行平鍋の稱呼を轟すに至れり然ふ其後と名れみ殘りて久敷製造の中絶し

居たるを遺憾に思ふ積年苦辛し漸くふして今般適當の陶土を發見したるに付最も熟練の陶器師戯招き廣く諸名家の賢考を求め風雅高尚なる須磨燒を再興ーー以て行平鍋の緣緒を編續することゝはなせり

白團砂

海邊一帶の白沙の中に黃赤紫黑青白あと種々の小石ゐり就中白石のもぢ最も美なり此浦に遊はるゝ浴客は何れも家の土産と爲すを常とす

攝津志　白團砂用飾家園其色潔白

觀音竹（カン　チク）

今は須磨寺境內に一篁を存するれみ

攝津志　觀音竹（須磨村）

海魚

攝津志　海味上品輸之京師又有二黃鯛一魚形小品下包諸藥席貨二于四方一故謂二之裏子（カヤスコ）一

大師染

紺屋の設々あらさる時の此浦人は須磨寺近傍の谷間よと流れ出る金氣水に木綿を浸して種々の染方を爲し着用せりまは大師の功得なとと時れ人大師染と云へり其の後現光寺の分家始めて紺屋を爲せしより此染方絶へたりと傳ふ按するに伊香保名產湯垢染の如きもぢなりしならむ

吟谷彫

壹長窟吟谷氏と彫刻に妙を得たり近頃須磨停車場の前に高標を揭け此地の名木、松、櫻木等をもてさま〳〵の器物を製し土地の名產としてこれを鬻く併せて世人に紹介しぬ

これより須磨以東の舊跡を略記して讀者の便に備へむ浴餘一遊を試みらるゝも亦妙なり

聖靈權現

東須磨より天井川を渡りて大手村を行かは程なく街道れ左にあり熊野權現を祭る聖靈は熊

野證誠權現の誤りとかや例年祭日に降雨あるを以てもよばゝ權現の名あり

桂尾山勝福寺

聖靈現權の後ろにあり本尊と聖觀音長三尺五寸弘法大師れ作なり永延二年證樂上人一條帝に勅を奉して茲に當寺を創立し七堂伽藍を成効す帝之を嘉せられ桂尾山勝福寺と名つけ玉ふ聖觀音は圓融法皇御即位の時讓と玉ひしもの也と云ふ治承年中平相國兵庫築島に折當寺に歸依し阿波民部重能をして幡十二旗及法器珍寶數品を寄附せり文明年中越後守師泰の士卒亂入放火に事あり永正十三年新建慶應元年寺内遍照院圓滿坊二王門等烏有ふ歸し圖書寶物灰燼に歸せしもの拠からず然れとも本堂鐘樓と古色蒼然として今に保存せり當寺も鬼追れ古式あり寶物あまたある其中著しきものを擧くれと

錫杖弘法大師の作　十六羅漢奥道子の筆　兩界曼荼羅弘法大師の筆　釋尊文殊普賢漢顏輝の筆　大般若經唐本清盛寄送　甲冑龍の王平知章着兵庫築島供養幡十二旗　同供養唐本　大般若經一部　梵鐘延寶二年改鑄

神撫山禪昌寺

板宿村にあり鷹取山れ南麓に位し鳴瀧川其下を流れ得能山に對す延文年中高僧月庵禪師後光嚴帝の勅を奉して創立せし國家鎮護に道場なり宗旨と禪臨濟宗南禪寺派に屬せり足利氏に時地領三十六石あり天正八年秀吉別所氏を三木城に攻むるに當りて兵火に罹りけるか後豐公桃山御殿の中豐國亭を移して方丈と爲す（明治十二年遂に燒失す）本尊聖觀音は安阿彌に作といふ境内楓樹多きを以て楓寺に稱あり中に開基月庵禪師手栽に係る周圍七八尺もあるへき楓樹に枯木あり秋時文人墨客の來り遊ふもの最も多く又消夏の好適地なり庭内開山堂總門豐國亭（新築）あり總門は扉を開閉する毎に笙築れ妙音を發す傳へて甚五郎の作と云ふ寶物の大要を記せは

澳書壁畫狩野永德の筆豐國亭附屬品　月庵禪師の大量器（飯椀）并に袈裟一切經元國より開山禪師に贈られしもの　十六善神巨勢金岡　開山自讃畫像

友待とゝえす紅葉ふ一人哉　芭蕉
本尊は釋迦か阿彌陀か紅葉哉　鄙水

濃うすき紅葉やいつゝ寺の塵　露城

伏見宗淳宮女王殿下

千はやふる神れなつたふ山寺に
御のりはいとゝたふとかりけり
神なての御山を照らす紅葉の
色ふめくみ乃深きおもたる
秋をに時と思ひーに　岩下方平
なつと涼ーき木かけ也ゝ

月庵禪師

万樹千叢變色時、赤心片々露天機、途中無限未歸客、認作吾鄉晝錦衣、

伊藤博文

清時不用問桃源、携酒來尋紅葉村、漫擬當年狂杜牧、青樽相對到黄昏、

蓮の池

聖靈權現より東しせと街道の傍に池ありまれをいふなり重盛の家臣蓮池權頭家綱戰死せーを所なるを以てこの名ありとかや建武の戰に足利直義か楠氏の軍兵に追かけられ危き所を藥師寺十郎次郎の爲めに助けられし所も亦これ池に堤なり

越中前司盛俊墓

名倉池の傍ふありまのあゝとと源平血戰の衝なり盛俊か猪俣則綱に討れたるとは平家物語にも見ゆ

ふんとしも垣紅葉かな男つか

長田神社

攝津微書神かけて鳥をねたむや櫻鯛

夫木

雨露も惠み普ねき時にあひて　兼仲

長田のさとゝ丸早なへとるなり

咲匂ふ花のけしきも見るからに　白河院

かみゝ心そゝぐにまちるゝ

靜かなる長田の村に住む人の　藤原義方

かりつひいねのはかりなきかな

命たに長田の社のなかりせは　爲頼卿

たよりにきみか宿をみましや

かき初め其かみよりや堪さらん　石田常軒

長田ゝ森になかき注連縄

上に記せる歌は何れも長田ゝ社を讀みたる由之所歴日記攝陽群談拾芥抄遊嚢勝記播磨名所巡覽圖會に記るせと獨り名所便覽に長田(田雲)長田なる千本の云々長田里(近江)雨露も云々長田社(伊賀)命たに云々と見ゆ延喜式神祇臨時祭の項ゝ見るに此社も新雨神祭八十五座の中に記しあれと名所便覽ゝ説恐くは誤りなふむ

事代主命ゝ祭る今之官幣小社に列せり

三代實錄　貞觀元年正月授攝津國從五位上動八等長田神從四位下

日本紀　神功皇后元年事代主尊誨之曰祠吾于御心長田國則以葉山媛之弟長媛令祭

和名抄　攝津國八田部郡長田奈加多

拾芥抄　應和三年七月十五日新雨十一社廣田生田長田

社記　村上天皇應和三年七月十五日雨を長田の社に祈る

越前三位通盛墓

盛衰記に「今朝湊川にて討れ給ひぬ」とあり攝津志に佐比江堤の東北に墓ありと見ゆ攝津名所圖繪には佐比江にあらす此所なりと云へり

松井河樂

私恩公義孰難全、何事軍中惑美姸、贏得一杯荒草上、柳風遺臭幾千年、

木村源吾重章墓

通盛墓ゝ側池の中にあり通盛と組てこゝに討死しゝる由平家物語に見ゆ

攝津徵書

喰に來て又喰れけり初鰹

前武藏刺史平知章墓

新中納言知盛ゝ一子にして監物太郎頼方主從三騎兒玉黨十騎に追之れ頼方弓の上手にて眞先の旗差か頭骨ゝ射ゝ知盛に組かゝふんとす此時知章父を討せじと中に隔たり無手と組て頸を搔立上らんとしける所に敵ゝ童落合て知章の首を取り孝死を遂けゝるこの監物太郎又落重り武藏守を討ち一童を討ち遂に忠死す此紛れに知盛逃け延ひける由平家物語に見ゆ敦盛の墳墓に詣つるものは先知章ゝ墓に詣ゝさるへからす

攝津徵書

草に置露ゝ兒玉やともあさふ　小竹

一谷凄凉公子墳、吊來行客炊沾巾、誰問路傍松樹下、又埋忠孝兩全人、　菅茶山

九郎緣屋西師劒、貂蟬詎得當兜鍪、風鶴皆敵將安避、上軍下軍亂爭舟、中有十將能致命、慷慨最推平武州、搏戰遇敵代父死、生氣凛々六百秋、忠孝兩全古所難、況在綺紈乳臭儁、頼賢忠勇類乃主、亦冒亂及復主讎、四尺雙墳官道側、想見英姿悵遲留、野史詳畧竟何意、誇揚平氏只風流、忠孝櫻花敦盛笛、至今猶入市童謳、

監物太郎頼方墓

知章ゝ墓の北にあり攝津名所圖繪には頼方ゝ忠死を稱して齊ゝ華周晉の介推に比せり

附

舞子明石志

舞子の濱

須磨ゝ浦より界川を西に渡れは播州明石郡東の端なる鹽屋村あり尙ゝ西へ二十町はかり行

けは舞子停車場に設けある垂水村にて海に向へる社と海神社とて延喜式に載せたる明石郡九座の一なり此村より西へ大凡十町の所より山田村東の邊までの間東西三十町南北六町餘りの地こゝ風光の明媚をもて須磨明石と並ひ稱せらるゝ舞子の濱にして遙か沖合より眺ひれは一帶の清沙と一條の松林と遠く相連り近く之を觀れと幾万樹に老ひ松は枝幹皆な屈曲して跳るか如く舞ふか如く千態万狀極りなく蒼々ゐる松の綠に皚々たる砂子と相映する景色は高砂尾上住の江と雖とも遠く及とさるは古人の已に云へる所なり風光の妙なる編者の筆の寫し得へくもあらす此地は松露の名産にして七八年前皇后陛下こゝに松露を拾はせ給ひしより其名特に高し

兵庫縣地誌歴史考　俗に潮込の所故廻ひ込とも濱なりと云ふ又清盛童兒を集めて舞を奏せし処なとも云ひ光源氏行平中納言抔伶人か舞とし見給ふ故とも云ふ古歌に播磨なる舞子の濱に乙女らの舞てふ袖のすゝしくも見ゆと有

遊蠹勝記　雪を敷るやふなる上に翠れ松の年古く濱風に靡き馴たる枝に手向草打茂つゝ村々並立り

攝津名所圖會　前に淡路島横たゝり後に小山續き其間に悠然とゑけり淡路南方の風山間に吹きこし梢の空を吹き後の山の峰を吹き越ゑ程よく生育の理を得たる事もや

播州名所圖繪　此地古歌なけきは必名所といふにはあらすされとも名高き事天下に聞へたり是正に砂色松の翠色物に異なるか故なり

浦風に靡くひめ松たをやめの　稅所敦子
　うちかへしまふ袖かとそみる

自から舞子の濱とち松か枝と　何多仁子
　おとるすかたにみえにける哉

里人も酒くみかはし舞子てふ　松原貫速
　濱松かえのかゝに通へり

播磨なる舞子は濱とち乙女ふか　讀人志らす
　立舞ふ袖はすゝしくも見ゆ

はりま路は花より松のやまひかな　露城

秋ゑらぬ舞子とち濱や松の色　長門風雅

飛蝶も連や舞子の濱つゝひ　同　鷗外

涙に踞引て舞子はかすみ哉　同　掬水

月涼し松とち影れく砂とち上　讃岐　蹄嵐

蝶一つ舞子の濱は小春哉　備前　秀翠

涼しさや涙の皷か松か琴　長門　豐雪

頼山陽

亂松相映白沙明、隔水青山對晚晴、鷗背無風細波靜、遠帆如坐近帆行、

菅茶山

青松一帶映行人、赤石灣東舞子津、蛻叟亡來無好句、鷗聲帆影管殘春、

金本摩齋

千帆不動風全死、玉鐘修眉是淡州、夾路青松三十里、夕陽人倚酒家樓、

竹本晚香

暮潮拍岸夕陽遲、對坐樓頭把醉時、隔水青山如有釣、依然春影落吟巵、

福原周峰

碧紗誰護壁間詩、重上津樓憶舊時、隔水青山如有意、依然春影落吟巵、

梅嶺

鷗背揚々帆影孤、濃雲低水午陰鋪、遠風吹送竈窟、隔海泉山淡如無、

高岡香

雪白連邊是明石、烟青横處卽須磨、箇間無限好風景、却恨輕帆卿々過、

小畑詩山

松嵐一里卷砂清、更引濤聲弄鼓笙、借問佳人何處去、彩雲如袖影空輕、

淵上旭江

賦媚多佳景、松抄夕霞曛、仙姬悉舞散、衣桁桂櫛裙、

何禮之

舞子濱邊春草芳、幾家兒女踏青忙、輕篷短

笈繊々手、莫拾沙中松露香、

源　季　融

播洋十八里、波面渺無涯、淡島半籠霧、赤城高映霞、征帆多買舶、矮屋總漁家、官道行人夥、鞋痕印地斜、

永　松　豊　山

一帶行松碧鬱葱、畫樓相映水烟中、風光明媚美人似、舞妓濱名果不空、

明　石

明石浦明石潟明石海明石灘明石濱或は明石迫門泊里驛の名あり赤石の字眞なりと云ふ（和名抄延喜式播磨風土記及び日本紀れ奇談等と省略まて記せす）彼ゝ月山は此浦ゝ眺望第一の地にまて東と畿内紀伊芳野金剛山或は生駒雲に聳へ西は四國ゝ島々碁布まて南淡路につゝきて大和島おゝころ島他にささをり舊松平侯八万石の城下にまあきは其繁榮言も更なり特に柿本人麿れ祠ありて四方の遊客こゝに杖を留先さるものなまに扶桑名勝詩集ゝ明石八景と仙蹤朝霧大倉暮雨藤江風帆清水夕陽印南鹿鳴尾上鯨音繪島晴雪赤石浦月と記せり詠歌作詩いと多まに

はの〳〵と赤石の浦ゝ朝きりに
島かくれゆくふねれーそおもふ

西遊日記　はの〳〵の歌はまこと小野篁かよみたるにて今昔物語又と篁ゝ家の歌集にも明にのせたりこれと古今集に或人か人丸ゝ歌なりといへりと書せまより誤り傳へける

其他契沖の餘材抄顯照ゝ風躰抄おとにハ人丸の歌と爲せと近世ゝ説によれは其調其詞甚拙おく人麿の歌とそへかゝすと傳ふ

万葉

見渡せと赤石のうらに焚る火の　門部王
はにそ出ぬる妹かこふらし
今そ知る秋は南にくるかりの　讀人まふす
明石のれかの月になくとは

續後撰

あかし潟あまの苫屋の烟にも　順徳院
まはしそくもるあきの夜のつき

玉葉

月さゆる明石の迫門に風吹は　西行
氷ゝうへよゝゝむまらなみ

拾遺

夜とゝもゝ明石の浦の松原は　爲憲
なみをころのみよるとしるらめ

家集

かひなくて明石ゝ海の秋風に　中務
こひしきなみそ立さわきける

千載

夜を込し明石のせとに漕出れは　俊惠
遙にれくるさをしかのこゑ

仝

おかめやる心の果そなかりける　同
わかしの沖にすめるつきかゝ

万葉

燈火ゝわかしの灘に入日にや　人丸
漕わかまなん家のゐたりみゆ

新古

ふた聲ときこのすはいて一時鳥　公通
いく夜あかーのとまりなりとも
つく〳〵と思ひ明石の浦千鳥　公經
なみのまくふにおく〳〵そきく
浦風ゐわかまのとおみ霧晴て　豐原統秋
たくもゝ煙あわれゐそたつ

老若五十首歌合明石

淡路潟かもみて歸る雁かねも　左大臣良經
まさかくれゆくはるのあけはの

淡路潟傾くつきにはの〳〵と　細川左京太夫
あかーのうらをいするとも舟

雲葉

舟とむる明石の月の有あけに　俊成
うらよりれちのさは鹿のこゑ

明石潟色おきひとの袖を見よ　藤原秀能
そゝろにつきはやとるもれかは

徒に幾夜あかしのうらなみに　家衡
鹽くむ蟹ゝ獨ねるらむ

明石潟浦よりをちの離れ石の　知家
ひとりもなみに幾夜ねれなむ

明石潟こよひと月も滿一はれ　行能
ひるにかとれは哀れなりけり

曇りなき明石れ浦ゝなひゝにも　頼氏
あきの今宵の月はみてなり

あかし潟名にれゝ浦に澄月も　隆祐
猟のこりける影をみるかな
掛てける秋の今宵の月よりや　爲家
浦を明石の名にさためなん　同
あかし潟昔しの跡を尋ね來て
今宵も月にそてぬらしつゝ
玄玉
明石より繪島を掛て霞めとも　俊成
かすみそ上も沖つしらなみ
同
霧の間ゆ明石代せとに入ゆ鳧　清輔朝臣
うらそそ松風をとにーるーも
雲葉
にほ船はまかちしけぬき急く也　法性寺入道
明石の月に錨りおろすな
雅永
明石潟千鳥しそなく今よりや　圓昭法師
おきつ汐かせさむく吹らん
爲家千首
明渡る明石のとより見渡せは　爲家
うら路代霧に島かくれけゝ
宗良親王千首
明石かた浦路は月に問なれつ
そまひゆかしきおかのいろかな

亀山殿七百首
まとろまて涙の枕に明石かた　源三位
鹽瀬くまなき月をみるかな
正治二年百首
月清きあかーの瀬戸の波の上
うらみをれこすゐり明のくも
同
あかー潟浦ふく風に雲はれて
なみよりにしゆ在明乃つき
同
明石潟月故ならぬなかめまて、
はれてさひしき波そうへうな
爲忠百首
雲拂ふ秋の夜かせに月はれて
ゐかーのうらに海士り釣する
同
となふゑ明石の浦へ思ふとゝ
なかめにゆかひいさよひそつき
道助法親王五十首
あかー潟島たちかくす朝霧に
舟こそ見へね千鳥鳴なり
最勝四天王院障子和歌
袖ぬれて幾よあかーそ浦風に
れもふかたよりつきも出らん
同
秋の夜の月ゆへ曇る浦の名を

同
雲にあかしのつけて過ぬる
あかー潟涙よりおちに雲晴て
すむらん月のはてをまちはや
同
まらぬよの雲井の外れ秋迄も
あかしれ波にすめる夜の月
同
あきの夜の月をあかしれ苦ひさし
久ーくれきて見つる月哉
同
明石潟いさたちこちも白露れ
れかへの里の涙そつきかけ
同
明石潟うらみぬ袖も月や宿る
ねなまし海士のもしは汲つゝ
同
明石かた月は涙路の果もなし
あきをかきりれ有明れ空
同
限もなく澄へきよゝの友なきや
あかしの涙にうつる月影
同
明石かた雲をへたてゝ行船の
待らん月にゐきかせそ吹
ほせきす待こゝろしれ明石かた　石出常軒
島かくれゆくれきをれしみて

あかー潟曙まろきなみの上に　同
あふはれいつるあはまゝまやま

名にしれゝ明石の海にかけ霞む　磯部元實
月や宿らん淡路しまやま
朧夜に明石の海を見わたせは　永田眞文
つきそそみふねのなみにたゝよふ
明石潟あきたる海を見渡せと　松原貴速
島立ちかくす朝霧もなし
朝風れ追手にかよふ舟の帆そそ　同
ならへる海のれもしろき哉
みちゆつき春や來ぬらんほの〳〵と松本高嶺　清明
明石の浦は霞み初けり
明石潟霞に淫ふ心地して　筭浦現遜
浦れもーろき春そ夜の月
札幌
藻汐やく海士のとまやも見えわかす　長谷川紫雲
明石の浦は霞みわたりて
明石潟くまなく晴れてたきつ風　松下矢島の浦人
ふけ行月に千鳥鳴なり

燈火の明石の浦のゆふぎりに伊勢野村　北峰

淡路島山消へて行也

手をうては木魂に明る夏の月　芭蕉

蛸つぼやはかなき夢は夏の月　同

駕籠かりて淡路へのらん潮干哉　如水

林春常

月晴赤石浦邊秋、上下明々一色後、万里蒼波風不起、白雲如洗水晶樓、

赤石浦晴月滿舟、無双光景饒清遊、雲霞倒影層波底、蟾窟鱗宮一色秋、

細山陽

歌舞祠外起朝烟、舞妓灣頭酒如泉、借問行人有何急、欲乘兵庫一番船、

菅茶山

國司舊府定何邊、赤石新城万戸煙、曾是眞龍潛匿地、酒間歌舞憶當年、

入見友元

一輪洗出一江晴、浦邊秋不負佳名、清光千里明如晝、白玉樓高赤石城、

渚館迎舟何處維、廣陵彈壺月夜思、長安不見浮雲外、白馬金鞍想玉姿、

北條霞亭

秋玉山

潮生赤石欲黃昏、乘月扁舟下海門、回首汀洲芳草遍、不知何處吊王孫、

釋五岳

鷗聲帆影各流形、赤石春光與物靈、君騁開年最初句、淡山隔水數峰青、

服天游

紅亭綠酒暫相留、美爾揚帆赤石遊、試見烟波朝霧裏、依微島樹隱行舟、

松浦大麓

海面消信烟曉風、漁舟出浦破青銅、歌仙不會今興、島外鯨波浴日紅、

小畑詩山

風破海雲紫落暉、立沙鷗鷺忽然飛、偃松松岸松聲起、肩網漁翁踏浪歸、

濱上旭江

帆影藏山靈、蒼茫曉霧沈、浦人常歷眼、唫

就價千金、

梁田蛻巖

天吳噴浪浪如銀、採盡石華經幾春、君上海樓應一望、朝々自是霧中人、

仝

海上秋寒赤石城、嵐松十里送潮聲、風流帝子今何處、惟見煙波照月明、

松井河樂

風景無倫明石浦、滔天白浪滿山櫻、當時最惧我才拙、空使旅舟島隱行、

赤松松亭

播海東西慣往還、相迎相送淡州山、紫家才思猶堪想、月照須磨明石間、

人丸神社

赤石城に續ける東の丘陵人丸山にあり人麿と官位高き人にはあらざるも持統文武に御門に仕へ奉り文武の皇子草壁新田部高市の三皇子あとにも知られ長歌に巧なり花を愛て月をはれみ昔を思ひやり今をよろこひよめる歌いと多し本朝通鑑には聖武帝神龜元年に死せりと見もれと眞淵は老境に歌なけれと五十歳以前に死せるものなり故に元明天皇の和銅二年頃に死せしなるへしと云ひ槿千藤と奈良遷都以前に死せりと云へり万葉の歌より考ふる時と千藤の說眞に近しと云ふものあり里諺に此社を安產火災に神といへるは人丸は人生るまた火止るに通はしての事にて平家物語に古之岐を腰氣に通ゝし瓢とするに同しきものなれ姓氏錄　柿本朝臣大春日朝臣同祖天皇彥押人命之後也敏達天皇御世依家門有柿樹爲柿本臣氏

文學博士大學頭藤原敦光朝臣

太夫姓柿下名人麿蓋上世之歌人也持統文武之聖朝遇新田高市皇子吉野山之春風押仙駕而獻壽明石浦之秋霧思扁舟而瀝調誠是六義之秀逸万代之美談者歟方今依重幽玄之古篇聊傳後素之新樣固有所感乃作讃焉

和歌之仙　禀性于天　其才卓爾　其鋒森然
三十一字　詞花露鮮　四百餘歳　來葉風傳
斯道宗匠　我朝先賢　温而無萍　鑽之彌堅
鳳毛少稿　麟角猶專　既謂獨步　誰敢比肩

古今著聞集ゐ人麻呂の影像は鳥羽天皇の元永年間修理太夫顯季の供養せんとて敦光ゐ右れ書讃を求めーよと世に廣まれりと見も

無名抄　人丸の墓と云ひて尋ぬるゐ知れる人もなーー彼所にい歌塚とそいふなるを墓の側ゐ柿本寺人丸の堂ありけるか清輔の頃已ゐ柿本寺と礎とかり殘りて其墓は四尺斗りの小塚なり木なくーて淨生ひたりきといふ按するに人丸と石州に於て死亡せり其屍を和州ゐ移せるもれかと顯昭の勘文にいへり

我峯集　未知何世何人之所建祠在城内近世移於郭外云々在時奏神樂於城内舊跡云

播州名所巡覽圖會　元和年間小笠原右近太夫明石城を築きーー時今の城地より移せるもよとゐして始先より此ゐ祭れるにあらす軍記などゐ人丸塚の戰ひとまるせーは今の城地の事なり石州高角山にも社あり享保八年一千年忌に當り石播の両社へ正一位を賜き禁裏仙洞の両御所よりも法樂の御制ありと」の事を記るせり

盲杖櫻

舊城内より移せるものとて社前ゐあり所傳に筑紫の盲人詣て今のーと鹹あかしの神ならと我にも見せよ人丸とも塚と詠せしゐ両眼忽ち開けて明かに物見ることを得しかは今と用なしとて携へたる櫻の杖を地上に植へ去りまか枝葉生ひ出て依てこの名ありと云ふ

八房梅

社の西月照寺の庭に船形の老梅樹あり此を云ふまとひかし赤穂とも義士間瀬久太夫手つから植へーものにて淺紅の花幾開き八つ房の實を結ふとそ

此外に筆柿雲井櫻あとありて何れも奇しき物語あり盲杖櫻の花濃八つ房の梅濃はのーー糖なとの名物所々とも茶店に見ゆ

林　羅　山

此地遠蹤柿本仙、聞唫殘夜欲明天、浦邊望入霧中去、傍島移過無數船、

問起歌林柿太夫、紛々朝霧海之隅、氛氳一氣未全曙、遙指前洲辨有無、

草場　佩川

氷輪當夏影將圓、赤石城邊夜泊天、明發相思終不寐、烟波何處吊歌仙、

齋藤　拙堂

山光帆影憶當年、播海楚江名句傳、誰識東西同一想、歌仙何肯讓詩仙、

入見友元

東方既白大江天、香霧霏々接水烟、雲島風帆看不見、浦頭何處問歌仙、

藤田　吳江

歌仙一去二千年、祠廟尚存松樹間、沙鳥一聲天欲白、孤帆影落霧中山、

須磨誌畢

1/6/40

明治廿六年四月　日初版
明治廿九年七月　日再版
明治卅二年八月　日三版

〔定價金卅五錢〕

香川縣香川郡安原村大字安原下三百拾番戸
編纂兼發行者　上原勇太

香川縣高松市大字濱町百貳番戸
印刷者　新居政七

兵庫縣武庫郡西須磨村
賣捌所　直井元介
兒嶋宗次郎
志賀藤吉
林八良左衛門
成瀨猶喜

神戸驛内
永樂店

凡例
役場
警察署
停止場
古跡
鉄道
國道
里道
海川
山岳
國界
村界
耕地
電信
郵便局
療病院
温泉

15
215,1

15
215

025506−000−6

15−215

須磨誌　附，舞子明石志

上原　勇太／著

M32
ADC−2971

15-215.